に誠實を以てし、諸君の同情に與ふるに敏捷を以てし、諸君の警戒に與ふるに勢力を以てせん。若し基督を愛する一念を以て之を爲し、基督の榮光に專ら着眼して之を爲し、基督を十分に恃みて之を爲さば、是れ尤も主の祝福したまふ事業たるべし。主は諸君が知らざる又計らざる方法を以て諸君の盡力を援けたまはん、而して諸言は忠信なる牧師が此世にて賜はり得べき至大の歡喜を得べく、其勞が主にありて徒爲ならざるを見るべく、又自家の經驗に由て諸君は一ばら彼の聖軌範に則るの多幸多福なることを看いだすに至らん、曰く——「汝朝に種を播け、夕にも手を歇るなかれ、其はその實る者は此なるか彼なるか、又は二者ともに美なるや汝これを知ざれば也」。(傳道之書十一章六節。)

第七講話

病健兩者の幫助

に誠實を以てし、諸君の同情に與ふるに敏捷を以てし、諸君の警戒に與ふるに勢力を以てせん。若し基督を愛する一念を以て之を爲し、基督の榮光に專ら着眼して之を爲し、基督を十分に恃みて之を爲さば、是れ尤も主の祝福したまふ事業たるべし。主は諸君が知らざる又計らざる方法を以て諸君の盡力を援けたまはん、而して諸言は忠信なる牧師が此世にて賜はり得べき至大の歡喜を得べく、其勞が主にありて徒爲ならざるを見るべく、又自家の經驗に由て諸君は一ぱら彼の聖軌範に則るの多幸多福なることを看いだすに至らん、曰く——「汝朝に種を播け、夕にも手を歇るなかれ、其はその實る者は此なるか彼なるか、又は二者ともに美なるや汝これを知ざれば也」(傳道之書十一章六節)

第七講話

病健兩者の警助

『汝が教養を施こすべき人々の中に於て病る者にも健全なる者にも公けに或は私に警め勸、告をなすの必要起り又其機會の與へられしとき努めて之をなすの覺悟あるや』

（聖品プレスブテロ派立式文）

第七講話　病健兩者の幇助

今諸君の前に講ぜんと欲する問題は是れ我等が已に較、詳らかに論じたる所なり、然れども其範圍の廣きと其關係の大いなるとは我を驅て今一たび之が領分に踐いらしめんとす、其問ふ所に云く、——

「汝が教養を施こすべき人々の中に於て病める者にも健全なる者にも公けに或は私かに警め勸告をなすの必要起り又其機會の與へられしとき努めて之をなすの覺悟あるや」。

偖今我が已に述べたる所に加へて茲に諸君の思量忖度を請んと欲する要點は此の誓約に由て諸君が勵精努力の生活をなすべき義務を身に負ふの事なりとす。我が教會が斯く諸君を警めて防がしめんとする弊害は、凡そ目ある者の容易に見得る者なりとは雖も、哀い哉、甚だ普通なるを奈何せんや。されば今日のごとき時——將來の衆聖職のために安全の方向進路を指定するを要する今日のごとき時——に於ては須

『汝が教養を施こすべき人々の中に於て病る者にも健全なる者にも公けに或は私に警め勸、告をなすの必要起り又其機會の與へられしとき努めて之をなすの覺悟あるや』

（聖品プレスブテロ派立式文）

第七講話　病健兩者の幇助

今諸君の前に講ぜんと欲する問題は是れ我等が已に較詳らかに論じたる所なり、然れども其範圍の廣きと其關係の大いなるとは我を驅て今一たび之が領分に踐いらしめんとす、其問ふ所に云く、――

「汝が教養を施こすべき人々の中に於て病める者にも健全なる者にも公けに或は私かに警め勸告をなすの必要起り又其機會の與へられしとき努めて之をなすの覺悟あるや」。

偖今我が已に述べたる所に加へて茲に諸君の思量忖度を請んと欲する要點は此の誓約に由て諸君が勵精努力の生活をなすべき義務を身に負ふの事なりとす。我が教會が斯く諸君を警めて防がしめんとする弊害は、凡そ目ある者の容易に見得る者なりとは雖も、哀い哉、甚だ普通なるを奈何せんや。されば今日のごとき時――將來の衆聖職のために安全の方向進路を指定するを要する今日のごとき時――に於ては須

く我等の注意を之に凝らすべき也。

「公けの勸戒」に要する勵精努力につきては或る他の問を講究せし時に、已に詳かに論ずる所ありたり、故に本問題の彼の部分には肯て還りゆかず、今は專ら之が他の一半を諸君と共に講論し、而して諸君が彼の「私の勸戒」につきて誓約せられたる所の果して何事なるかを見んとす、是れ諸君が聖事業は之が正用を待て大いに力あるを致す者なれば也。此に諸君が誓約せられたる第一の要點は誠心實意の努力なり。諸君は必要起りたる時は力の及ぶ限り私の勸戒を用ひんと約せり。而して之を用ふるの量は決して寡なかるを得ず。之を要する場合は嗚呼如何に多端にして又如何に頻繁なるぞや。諸君が教會の信徒は上下おしなべて之を要する者如何に夥きぞや。無頓着なる者、及未感化なる者が此の如き私の勸戒を要する事は如何に大いなるぞや。斯の如き人々の中には教會堂内の公禮拜に臨まざる者甚だ多ければ、公禮拜場にては彼等を勸戒するに由なし。假使習慣より、又は外見のため、又は眞心をやすめん

と欲して、教會堂に來るとも、如何なる聾耳を以て彼等は我等の說教を聽聞するぞや。斯る人々が我等の公禮拜に對する耳目の鈍きことは言語道斷なる者なるを我等は經驗して知れり。無頓着の習癖は彼等に蒙むらしむるに矢石も殆ど穿つ能はざる鎧を以てすれば、凡て是れ馬耳東風雲煙過眼のみ、我等の放つ矢が神の特恩に由て裏かくに至るは稀有の事なり。縱や公勸戒を以て多少の感覺を惹き得たらんも、若し之に次ぐに私勸戒を以てして補ひ足すに非んば、暫時にして其感覺も消え去らん耳。又中には感化せられんとして窄門の闕に立ちつゝも世界と惡魔とより畢生の攻擊(妨礙)を受けをる者も少なしとせず、斯の如き人々をば之を勞はり援けて門内へ安全に入らしむるを要するや切なり。中には又始めて狹き路に登れる者ありて、牧師の之が手を來り引くを須つや急なり。中には生來遲鈍にして睡を貪る者あれば再三再四恒に喚び醒まさずんばあるべからず。中には臆病にして始終後へ還らんとする人々あれば、之を鼓舞せずんばあるべからず。中には世慾の爲にな

は強く纏ひつかれて動もすれば世間の誘惑に陷らんとする人々あり。中には哀き悲しむ人々ありて慰藉者を其身邊に求めつゝをるに、元來斯の如き者は神が其御使命を我等の口より承けしむるために艱難に乘じて導きたまへる者なれば、若し其我等に使命を授け給ひし者に於て慰藉者を得たらん如く、我等に於て其求むる慰藉者を得なば、今此際速かに之を利導して神に歸向せしめ、拯救に入らしむるを得んと雖も、今此機を失しなば、彼等は決して再び我等に耳を傾くることを肯んぜじ。中には心に惱める人々あり、温和にして狐疑し、進退去就に自ら惑ひて竊かに苦しむ、斯る人々は其憂悲を口外に發するを得せずと雖も、其牧師――眞の大牧者の如く、其の臂にて小羊をいだき之をその懷中にいれてたづさへ、乳をふくます者を柔らかに導びかん者――の深切なる同情同感を須つや至つて急切なりとす。

且又人々の一生中特別に我等の注意を要する年齢ある者なるを忘るべからず。我等が教會の青年にして今や始めて父母の檢制外に獨立せんとする危險なる且大切なる年齢に在る者は、我等の至極賢明、至極親切なる注目を要す。又活潑の業務に從事すべき日已に過ぎて、一層規則だてる禮拜に嫺はしめらるべき餘暇を有する老人も我等が多分の勞と慮とを之に費やして出來榮多かるべき人物の種類なりとす。

又許多の事情起りて時々我等の教會信徒に種々の影響を及ぼし來るあれば、是また我等の最も小心翼々たる臨機應變の待遇を要す、例へば一家の困難、一家の紛紜、財産の損耗、青年の就業または轉業、子女の出生等是なり、是等の諸事はみな牧會上の勸説を與ふべき機會を供するのみならず、併せて又靈性上の勸説をも與ふべき機會を供す。而して又此等の事情中には彼等をして其信任厚き慈眼愛腸の牧師に非れば與ふる能はざるが如き勸告を切に求めしむる者おほし。

偖以上約説畧擧し來れる種々の人物及び若干の事情を單に考へても、若し果して此職を盡さんと欲するならば、如何に勵精努力を要すること

との大なるかを了るに足らん。

然し乍ら我等もし本問題を一層幾分か詳細に究むるならば、――而して此等の職務を單に言譯ばかりに行なふこと無くして、之を正しく且十分に盡すに要する者の何なるかを銓らんと試むるならば、益々勤勉の必要なるを感ずるに至らん。

我が最も幸ひなる事と思ふ如く、我が教會にては、信徒は定期の懺悔(告解、痛解)をなし解罪を得る爲めに一定の虚式に循ひて牧師の前に出るが如きこと無く、却つて彼等(信徒)の靈魂と眞心とを訓廸する事は悉く彼等が自ら進んで牧師の勸告を求め、己が憂悲を牧師に自ら進んで打明かすより來るの結果ならざるべからずとするが故に、牧師たる者は人々の心情と眞心を司どる其の内面の職掌を正しく盡さんことを望み得ん前に先づ群信徒の深厚なる信任を得ざるべからず。但し是の如き信任をえんことを期し得んには、先づ要する者きはめて多し。萬行の基礎として、唯に日々一貫なる生活、高潔の精神、嚴肅、眞摯、清廉、言談の居

常莊重なる事等を要するのみならず、又其間に親密あるを要す、是この親密獨り能く信任てふ生育遲々たる植物を培養する者なれば也。信徒をして先づ我等の同情と恒忍と厚情とに信頼せしめざるべからず、否らざれば其心を我等の前に開かじ、――而して此信頼は漸を以てして始めて得べきのみ、一歩を誤らば瞬間に失せなんとす。一片の激語、冷淡の答、不一致の行動等は忽ちに信頼或は信任の嫩芽を寒殺し去らんとす。故に之(信任)を得ることは一朝一夕の事に非ず、大いに勤勉努力を積みて始めて得らるゝ而已。其教會信徒に對して常に我が爲す所を急ぎをる人々の如きは之を得る能はず、――彼等をして一朝に君子たらしめんと欲する者、忽々其職務をなし去りて餘暇を多く我に得んとするが如き者は、到底之を得べからず。

是の如く我等が其信徒との交際は二種の殆ど相背馳する危險に陷るの恐なきに非ず、而して其二種はともに我等の奏功に大障碍たる者なりとす。我等は或は往て病健兩者を訪問せん、彼等と共に聖經の數節ま

たは一章を讀まん勸告の辭を以て之を彼等に服膺せしめん、彼等とともに祈禱せん、而して萬事をなしをはりぬと思ひて辭し去り、夜間其日の奔走と訪問を回憶して多分竊かに滿足せん、然るに其實は一事をも成じたるに非ず、多くとも其勞は虛に鄰する而已、我等は未だ何人の心をも打開かず、何人の信任をも博し得ず、何人の心をも啓發せざる也、——我等が其間に奔走斡旋せし群信徒は、希望、恐懼、迷惑、願慾、困難等の空氣に恒に圍繞せらるゝ靈物としては、宛から路人のごとくにして、毫も我等の識る所とはならず、毫も我等の親づく所とはならざる也。却つて我等の訪問は或る人を頑硬にせり、或る人を倦しめたり、或る人の虛禮心を滿足せしめし而已、或る貪慾家をして一身上の利益のために忍んで聽かしめし而已、未だ嘗て一箇の罪人をも悔しめず、一箇の悔悟者をも慰さめず、一箇の惑へる者をも導びかず、一箇の聖徒のためにも德を立てざる也。是れ靈魂なる者は斯の如き機械的なる手段を以てして親づくを得ず、斯の如き死物的なる方法を以てして拯ふを得ざれば也。我

等は此の如くにして宗教を彼等に投げつゝ其成るに任せて打棄おくべきに非ず、却つて我が萬福なる主の模範に倣ひて群信徒の心を之(宗教)に啓發し、愛情の門戸を經て眞理を彼等の心室に入らしめんことを務めざるべからず、箇々別々なる靈物として彼等を一人一人に訓導せざるべからず、彼等の困難を察知せんことを務めざるべからず、我等と彼等との間に此の靈的なる活交通を保つに非ざれば、彼等の眞狀を洞見する能はず、彼等に裨益を及ぼす能はずと知りて、彼等に教ふるに其困難憂苦を如何に我等に告げ知らしむべきかを以てせざる可らず、然かする時は、假使全く、若くは殆ど全たく、徒爲無功なるが如き訪問を或は屢々彼等になさざるを得ずして、毎回或は毫も宗教の事に論及するの機を得ざるあらんとも、尙暗々裏に始終我等は金鍵を彼等が靈魂の秘鑰に當はめつゝある者にして、——彼等の方においては信じて我等を頼み、我等の方に於ては彼等の魂を安息と平和のために基督に懇ろに導きつゝ、——此努力の悉く好結果を結ばん日を企て望みをる者と謂

ふべし。

然れども他方に於ては之に反して又我等の牧會的訪問をして單に世間的なる禮儀及び懇親に流れしむる事も容易なりとす、即ち之をして無益の雜談を以て始まり又終らしめ、或は無用の寒暄的挨拶、健病的問答を以て徒らに時を費やさしむること最も容易なる也。されば此等の大危險を避けんには、我等の方に於て油斷なく勵精苦心を凝らすことと無んばあるべからず。即ち第一に我等は彼等のために眞に憂ふるを要し、彼等の利害休戚を眞に慮かるを要し、就中彼等の靈魂のために眞に計るを要す。若し然らずんば、我等が彼等のために憂慮するが如き外觀はことごとく虛假なる者なるべくして、彼等(信徒)忽ちに其空曠なるを看破せん耳。此の如く我等は先づ萬事に超えて彼等の靈魂を貴く思ふに非れば、彼等のために力を盡す能はず。否な然のみならず、我等は亦他の時日に於ても恒に誠心實意を以て彼等の事を思はざるべからず、常に彼等の憂患、人物、艱難、試煉等其他諸の事情及び境遇を我等の眼中に

おかざるべからず。然る時には彼等を訪問する時に我等は牧會者たる公資格を以て儀式だてる訪問をなすの心地せず、我等が識り且愛する善男善女――肉と血とを有し、感ずべき心情を有し、學ぶべき天性を有し、誘惑と憂喜とを有する男女の人――を懇ろに訪問するの思をなし、斯く彼等が悲しむ所若くは彼等が喜ぶ所を洞察し、喜ぶ者とともに喜び、哀しむ者とともに哀しむを得ん。是の如くして始めて我等は彼等を化導することを能くすべき耳。

加之、我等もし眞に其職を此に盡さんとせば、群信徒の千差萬別なる人物(品性)を學びて之を審かにせずんばあるべからず、――其私かに勸戒せんと欲する人物を一々に洞察して機に臨み變に應ずる所なくんばあるべからず、然かする時は庶幾くは箇々の活人を捕ふるを得ん、空しく人名を帶ぶる冷々たる抽象物に無益の勸戒を與ふるの徒勞を免かれん。人々をば箇々別々に教化せざるべからず、同一時に多衆を併せ救ふことは能はず。故に我等は群信徒を一人一人別々に勸戒するを要す

る而已ならず、又靈魂を以て問題とする此の難學問に已に幾分か通じをらざるべからず。此學に通ずるに非れば、到底人々の靈魂の病を明かに見、之に濃かに觸れて治愈する能はざること、猶目の曇り手の痿たる醫師が、形骸の複疊せる機械を正しく治療する能はざるがごとし。祭司の口唇には知識を持つべし」。然るに尋常一樣の勤勉を以てしては到底この智慧を獲る能はず。幾分なりとも此智慧に達せんには先づ博く讀まざるべからず、經驗を積まざるべからず、警戒を常にせざるべからず、我等自身の靈魂を熟知せざるべからず、他人を勸戒するの習慣なくんばあるべからず。最も平凡なる人の靈魂といふとも、若し之に對して爲す所あらんとせば、中々に深くして到底一朝一夕に測る能はざる者なり。各人に具はれる器量といひ、勢力といひ、需要といひ、意ひの外に深き者にして、大活眼あるに非れば之を洞見するを得ず、大敏腕あるに非れば之を導く能はず、爭でか復之が需要を滿たすを得んや。我等もし靈魂の嚮導者たる任を盡さんと欲せば、聖書を光とし經驗を師として常に

人性の深義を學ばざるべからず。否な唯に之を學ぶのみならず、又之を盡く實行せざるべからず、幾多の日月といふとも必要なるだけは之を一人のために費やすを惜むべからず、而して其人の遲緩なるをも謂れなく疑がふをも、妄りに懼れ危ぶむをも、其復病するをも變易するをも、凡て長く忍んで好結果を待たざるべからず。

此職務を單に儀式一片として盡すは危險の最も甚だしき者とす。我等もし其牧會上の交際をして單に常式の服務に流れしめなば、――若し單に唱へだにせば幾分の好結果ありと云ふ符咒の如き者として之を行なふならば、其牧する群信徒の靈魂は大いに餒えんこと必す。今一例を擧て之を言はんに、牧師が病者若くは瀕死者を訪問するあるや世間普通に語りて曰ふ「彼は宗教の慰藉を某氏に齎せゆけり」と。若し人々が要する所の者果して單に「宗教上の慰藉」に止まらば、此の如き辭も或は實を傳ふるに足らん。靈魂が要する所の使命にして若し此の如き者ならんには、基督の役者は固より自ら進んで慰藉の使者となるを要す。然

れども是たゞ靈魂が此の如き使命を要する時に限るべき而已。之に反して病者が要する所の者は慰藉ならずして或は警醒なるあらん、然るを諸君若し往きて其人の良心に慰藉の軟膏を塗るならば、諸君は是れ未だ練らざる灰沙を塗るの拙泥工ならん耳。諸君のなす所は或は大熱に苦しみつゝある者に燒酒を與へ、昏睡に陷いらんとしつゝある者に阿片を飲ましむるに彷彿たるあらん。斯の如くにして靈魂故殺の大罪を免かれんとすとも豈其れ得べけんや、然るも我等は勤もすれば斯の如き慾に陷らんとする者は、薄志弱行にして此の誘惑に打克れんとすれば也。是れ我等の職務を執行するに甚だ容易なる、而して又甚だ愉快なる方便なるは爭そふべからず、甘言蜜語を弄するは甚だ快し、甘言柔語を以て其職務を行ふときには、己れが自愛の心を滿足せしむる者の其中に多きを見る、是れ此の如き牧師の訪問は殆ど一般に歡迎せらるゝ者なれば也。口に甘き麻睡劑を與ふる醫師は必ず病人のために愛せらる。靈魂の疾病においては斯の如き治療法の大毒なる結果容易に見

えざるが故に、人々一般に然か治療せらるゝを悅こぶなり、即ち群信徒はその牧師が訪問の際に呈する柔輭なる言語を承けて自ら滿足し、竊かに之(柔輭なる言語)を以て悔悟に代ふ、而して其必然の結果として己が靈魂を失なふ。——是故に我等は其の牧する人々の眞品性を探求せずんばあるべからず、而して、其治せんと欲する傷の底までを氣强く探る醫師の如く、如何なる治療を眞に要するかを先づ明かにするを要す。然らずば、重大の傷を慥に聊か愈して止むの恐なきに非ず。此にも亦勤勉努力の必要ありて存す。我等は人々の品性を一旦に知悉するを得ず。人々は屢々故意に、又屢々無意に、眞相を己れの目に匿し、又我等の目にも匿くす者にして、其傷つける部分は自然に退縮して我等の接觸を避く。故に我等は氣を長くして之が病症を觀察せざるべからず、大早計に判斷を下すべからず。用意周到なる醫師(身躰の疾病を治療する人々)は患者の樣子を單に己が記憶にのみ委ねず、必ず之を記錄して、今日の狀態を先日の狀態と精細に比較す。斯の如くして彼は疑かはしき徵症を

千思萬考し、遂に之が眞相を看破して藥劑を投ず。我等もまた彼と均しき周到の用意なきに非れば、我等の職務を盡すを得ず。我等は先づ其牧する人々の靈魂の病症を千思萬考し、之がために禱り、之が要する良藥を聖經の大寶庫中より採らずんばあるべからず。但し是みな如何なる用意と勞苦とを要する者ぞや。時としては人々言ふ小さき敎會は牧師の十分に手足をのばす餘地なしと。然れども是れ思はざる者の言のみ。若し僅少の靈魂をすらも斯の如く潛心に周到に治療する事に十分注意したらば、其判斷(所感)は如何に是と異なるべきぞや、其相異なるの差必ず天淵ならん。假令其群小さくとも、牧師たる者もし斯く活眼を以て之を窺ひ、慈眼を以て之を守り、之が實狀を洞察せんことを頻りに求め、拜跪して之が療法を案がへ、神の聖靈の指敎および闡明を切に祈るならば、其小群を牧するの事に由て如何に人心の委曲を審かにするを得る者ぞや。

請ふ此等の思想を我等が處遇するを要する最も著明なる一二の人物

に應用し見よ。

第一に、諸君は須らく先左の大問題を詳かにせんことを務むべし、——諸君が牧しつゝある人は眞に神に歸向したる者なるや否や、眞に其罪を悔たるや、眞にキリストの血に就て救罪を求めて之を得たるや。若し然らずんば、——彼をして先づ其罪ふかきことを知らしめて慰さむる事をせず、彼を基督の拯救に引きて眞箇の安心を得せしめて慰むる事をせずに、——單に彼を其罪に染まれる儘にて慰さむるは、實は是唯その人の靈魂を殺す者なる耳。

但し此の廣汎なる問に對してすらも正しき判斷をくだす事は我等にとりて容易なる事にあらず。我等は其人の日常の行爲を知らざるべからず、彼が靈魂の脈を謹んで細かに柔らかに診せざるべからず、先入の見を棄るに敏からざるべからず。羈絆たる黨派心的偏見を悉く拋つに吝ならざるべからず。何人の靈態につきても我等が由て以て此の大問題の解答を得べき一定不易の常規とては有ることと無し。言行は未だ十

分に謹飭ならざらん、感情は未だ十分に鋭敏ならざらん、教義の告白は未だ十分に正しからざらん、然るも尙教義を說けば誤まれる多き處にも、感情は甚だ遲鈍なる處にも、爽懷の發言は甚だ緩慢なる處にも、眞箇の感化は却つて在るあらん。されば我等は是非孰れの斷定にもせよ、徐々と歩展を進むる無くして、一躍して輕卒の結論を下すならば、恐らくは神が愛へしめたまはざる靈魂を憂に沈ましむるあらん、恐らくは謂れ無き好望を懷いて身を亡ぼさんとしつゝある人をして益々虛望を以て浮たゝしむるあらん。

斯の如き困難に敢て面する人は其聖職を盡すに勤勉なる者ならざるべからず、但し斯る困難は纏に千萬中の二三なる耳。

仔細に看きたるに、我等が牧すべき人は或は眞箇に感化して神に歸向せし者ならん、然れども冷淡にして虛禮をのみ是れ事とし、却つて日々に神に遠ざかりつゝあらんも知るべからず。彼が心中には聖靈のやどること或は極めて少なからん。斯る場合に於ては諸君は、若し能くすべ

くんば、此の退轉の由て來る所を尋ねざるべからず。此人の祈禱を冷却し、此人の靈魂を寒殺しつゝありたる者は或は某隱匿ならんも知るべからず、屢々內密の怨恨若くは憎惡を胸中に懷きて時々これを逞しうするに因て、斯の如き冷情を來せる者あるを見る、中には又天命に安んぜずして不平を鳴らすより此に至れる者あらん、或は此世の憂慮または劇務の逼れるよりして此に至れる者あらん、或は合法の快樂を餘りに肆にせるよりして此に至れる者あらん、或は吾人すべてに甚だ有がちなる虛禮空式に拘はれるようして此に至れる者あらん。但し其原因は何なりとも、若し能くすべくんば、之を見いだして其人に之を見しめ、其の神の前に之を悔い改めしむるを我等の任とす。此事は皆是れ絕大の勤勉を要する者なることは殆ど我の贅言を須たず。諸君もし此點に於て其職を辱かしめざらんと欲せば、日夜粉骨碎身して須臾も油斷すべからず、慈眼愛腸を以て警戒に從事するを要す。

且又此事業が我等に要むる勞の如何に大いなるかを十分に覺悟せん

とするに當りてや、我等は亦我が教會が我等をして其教會内の「病る者」と「健かなる者」とに對して此勤勞と努力を致さんことを誓約せしむる時に我等に斯く著るしく要めたる所の者を深く服膺して忘るべからず。

病者は容易に之を家に訪ひ得べし、我等の訪問はまた概して歡迎せらる。病者に對して我等が難んずる所は、重に彼等に對する交際をして靈なる者たらしむるに在りとす。我等は先づ第一に我等の訪問をして單に其或は伴なひ來ん賑恤のために歡迎せられしめざらんことを心がくるを要す、却つて世間の利益を離れて專ら道のために我等を歡迎せしむるを務むべし。我等の萬福なる主も大衆の來り從がふ所となりたまひしが、其來り從がへる人々は主の金口より出る天上の妙智を聞かんとせしに非ず、只「パンを食ひて飽しが故なり」き。聊かたりとも此の困難を防がんとせば一方ならぬ注意を己れの身に要す、――即ち我等は其物質たる施濟と虛靈なる聖職とを混同せざらんことに須らく心を

用ふべし。救恤を要する貧困者を救恤する事は靈なる救濟を之に持きたさゞる日に於てすべし、即ち肉體を救ふ事と靈魂を救ふ事とを同時になすべからず。概して之を言へば、道を說かんが爲にせる訪問をば之を結ぶに金錢の施與を以てすべからず。此の點に於て戒愼を怠るときは貧困者をして牧師の來訪を肉慾的に渴望せしむるに至る者にして、其渴望の情たるや牧師が彼等の心を天上の事に率かんと務めをる間にすらも其悲鳴哀求を殆ど匿し得ざる乞うたでけれ。

縱や此の困難にして幸ひに打克たれたりとも、嗟その後に殘れる者如何に多きぞや。病患の時は是れ宗教上の緊要なる事業を始むるに特に困難なる時なりとす。平常の諸誘惑の單に暫く止みたる事、世間の諸利益および快樂の一時興味を失なへる事は、特別にも其人をして自ら欺むくに容易ならしむる而已ならず、又疾病よりせる虛弱は凡て多大なる克己および獻身をして殆んど行ひ難き者たらしむれば、聖生活を始むるには是れ特別にも困難なる時期たる也。我等が牧師として病者を

訪問するの交際は一として之がために影響せられざる無し。斯の如く例へば我等は單に疾病の恰當なる一附隨物として迎へらるゝこと極めて屢々なり。紳士の體面を維持せんために我等を迎ふるあり、其心もまた、少しく宗教上の談話若くは儀式なる阿片劑を以て眠らされざるならば恐くは落つかずして、我等の訪問を歡迎せんとす。我等は斯の如き病室へ屢々往くなり。親戚朋友相集りて病床の周圍に額を蹙めを る、病人の身體の痛く打弱れる、凡て此等の事は我等が其病人を驚かすべき或は警しむべき辭を發するを禁ずる者のごとし。然し乍ら茲には基督が代りて爲に死したまへる――悲む力も喜ぶ力も殆ど窮り無き――靈魂の在るありて今や審判の座に飛さらんとす。斯る場合に於ては「看視病式文」を謹んで唱へ、靈魂を傾け注ぎて切に禱る事は、多分これ最も宜きを得たる處置ならん。然れども此事を聊かにても考へ見る人は誰か斯の如き場合に賢こく忠實に處する事の非常に困難なるを曉らざる者あらんや。

然し乍ら「病める者」を訪ふ事かくのごとく困難なる者なりとせば「健かなる者」を訪ふとも亦同じく困難に圍繞せらるゝ者と謂はざるを得ず。」第一の困難は唐突なる推參若くは不便利なる訪問をもちひずして健體の人々に親づくに在りとす。我等は貧者の食事時に闖入すべからず、妻女の家事を妨ぐべからず、工人の其業に就きをる處を訪問し得るは稀なり、縱や其場へ往きて彼等(工人)に近づくを得たりとても、我等は唐突にも宗教上の話をしかけて彼等の感情を傷つくべからず、彼等をして僞善者たらしむべからず。嗟是の如き種々の困難に打克つを得んには先づ如何なる伎倆、如何なる氣象、如何なる追憶、如何なる柔性、如何なる關心配慮(彼等のためにする)、如何なる百折不撓の勤勞を要するぞや。我等は決して此等を輕視すべからず却つて須らく自ら言ふべし「誰かの之に堪へんや」と。

兄弟諸君、是皆我等おのおのにむかひて絶大の勤勉努力を要むる者にあらずや。此の事業に含蓄するが如き生活をなすを得る前に我等は先

づ幾度か其勞多きを想ふて退縮するぞや。我等の牧する信徒をして我等の眼中に眞に斯の如き絶大の關心を價ひする者とならしむるを得る前に、我等は先づ幾多の得意なる嗜好を廢ざるを得ざるぞや。是れ我等もし此約を守らんと欲せば、凡て之が妨碍たる者を排除せざるを得ざれば也。眞に有功なる牧師などが百發百中の狩獵家たるを得ず、熱心熾盛なる政論家たるを得ず、又は逸遊家たるを得ず、交際家たるを得ず、否な文學にすらも身を委ぬる者たるを得ざるは、一に之が爲め而已。此等の中の孰れにても彼(有功の教師)はあるとを得ざるなり、否な彼もし己が身と其群信徒とを俱に救はんと欲せば、是非とも爲さゞるを得ざるが如く、其心情の最第一および最良なる部分を其群信徒の教導に委ねざるを得ざる者とす。彼(牧師)若し眞に其誓約を守らんと欲せば、其事業の各部各分に於て勤勉ならざるべからず。例へば、彼れ多分天性小兒を好まざる者ならん、斯る性質を有する懶惰の牧師は其學校をば學校先生に放任し、又學校に來らざる童男童女をば彼の惡魔が市街の十中八九に開きて待てる惡少年養成學校に放任す。是豈其事業を進張する莫大の機會を空しく過し去る者に非ずや、唯に童男童女が其幼稚の思想と感情の經緯を宗教の感化力に染めらるゝこと無くして徒らに成長するのみならず、又凡て恩愛の羈に便りて彼等が父母の心につたはり入るの道も之が爲に杜絶せらる。然し乍ら牧師たる者若し眞に幼童を己れと神とに懷け、併せて又衆多の父母(其子女に由るに非れば到底招き致す能はざる者)を彼等の恩愛に由て神に歸向せしむるを得んには、必ず先づ幾度か食事を妨げられざるべからず、幾度か睡氣を耐へざるべからず、幾度か朋友に別れざるべからず、幾度か招待を辭せざるべからず、幾度か喧騒不興冷淡密室等を忍ばざるべからず。其職に忠ならんと欲する者は此覺悟あるを要す。

否な啻に此點に於て獨然るのみに非ず、他の牧會事務に於ても多くは然らざる無し。我等の中の或る者は生來病を惧るゝと蛇蝎の如くにして只管その感染をのみ是れ憂ふ。此の如き教師にとりては種々の病に

罹りをる人々を訪ふとの一大苦患なるや言を俟たず。固より斯る場合においては我等もまた用心ぶかき醫師が用ふる如き預防をなすを要す。然れども肉體の醫師は病人を避けざるに、靈魂の醫師たる我等安んぞ之を避くべけんや。我等もし之を避るならば、爭でか世間の醫師が人々の肉體のために盡すごとくに我等もまた靈魂のために盡すとは自ら信ずるを得ん、況んや亦人々をして之を信ぜしむるをや。某氣風の人々にとりては遠離して感染を防がんとの情いと切なり。然れども此大誘惑に貪くるは、是れエホバの使が生命の水を攪みだしをるに病者を棄てゝ扶け入れざる者なれば、唯に其病人に對してのみならず、其全體の信徒に對して眞に我等を無用の長物たらしむる者と謂ふべし。教會の信徒もし其牧師が斯る時に於て畏縮して其判然たる職務を廢するを見ば、爭でか牧會職の眞面目なるを信ぜんや、爭でか我等牧師が之を盡すに眞摯なるを信ぜんや。

是と同樣なる惡結果を來たすべき原因は此外にも亦極めて夥だし。疎

虞怠慢にして徹底利己主義なる人々は論外とせんも、或る人々の如きは其性質の單に柔弱なるが爲に、訪問の勞を厭ひ、病室の惡氣を忌むに至り、又或る人々のごときは單に內氣なるが爲に切諫痛戒の接戰——他人の靈魂を化導するに缺くべからざる要件たる者——に從事するを憚かるに至る。此の如き人々は衷懷の吐露せらるゝに接するを自然に避くる者なれば、今しも悔悟者が其憂悶を告白せんとするや半ば倉皇として屢々漠然たる糊說を其間に挿みつゝ、不幸にも之を遮ぎり了り、斯くして彼の若し其秘密の重負たる憂を眞に告げたらば安んじて基督に導びかれたらん人心を永久に閉鎖するに至る。

偖諸君の眼前には此の如き萬殊の誘惑あれば、諸君の嚴肅なる任職式において諸君に要むるに靈魂の鄕導として其事業に孜々勉勵せんと誓約せんことを以てするも怪しむに及ばんや。勤勉なる學校牧師また は病室牧師たることよりも、有名なる講壇說教師となることは如何に尤も容易なるぞや。併し乍ら牧師が專ら說教師たる教會——牧師が單

に講壇説教をのみ是れ事としをる教會――においては百事悉とく假扮的なるを奈何せんや。是の如き教會にては、靈魂の鄉導者毫も其牧する群信徒の狀態を知らず。群信徒はその牧師のまはりに走馬燈のごとく徒らに回るのみ、而して牧師は之に對すること魂魄の蟬蛻たる屍に對するが如く然り。

されば諸君は此誓約を如何に守らんとするや。若し其職を辱しめざらんと欲せば、唯に全力を盡して實際に働かざるべからざる而已ならず、又預め之が邪魔物を除きて十分に其職を行なふの準備をなさゞるべからず、困難なる務を日々に懈怠なく盡すに要する者を悉く先づ諸君の心中に蓄はへざるべからず。

斯の如く、例へば――

（第一に）諸君は其就職の初よりして克己の精神を修養し、獻身の習慣を形成するを要す。「爾キリスト、イエスの精兵卒のごとく我と共に苦を忍ぶべし」と我等が命ぜられたるは意味なき者にあらず。靈魂の懶惰に

流るゝを防ぐは只日々に克己獻身をつとめて怠らざるに在るのみ。凡そ安樂なる業として聖職に就ける者、凡そ其聖職をして己れの身に安樂なる業たらしむる者は、牧師の本色を失ふに至るや必定なり、我等が擔へる職務は安佚を貪ぼるの情の熾んなるがために片端より段々に容易く廢措るゝ事となる者なれば、早くよりして自恣の癖と偏く戒かふより外に安全の防禦法あるを見ざる也。

（第二に）我等は其牧守する靈魂の極めて貴き者なることを恒に記憶するを要す。此靈魂が永生をも永死をも買ひ得るの力ある者なることを屢瞑想するを要す、彼の世の絶大の結果と此の世の瑣末なるらしき行爲との間には必然の關係ある者なることを屢沈思するを要す。安佚または世慾のために誘はるゝときは須らく自ら顧み問ふべし、我等もし其怠慢放肆によりて人々を沈淪せしめしならば、神の大審庭において復何の面目ありてか彼等を見ん、彼の怖ろしき時刻におよびて我等は如何にしてか彼等が復讐を求めて嘗々たるに勝んや、我等いかにし

てか十字架(我等もし忠信なりしならば、我等と彼等とを兩ながら救ふたるならん彼の十字架)に縋りて憐憫を乞ふを得んや。

(第三に) 然のみならず我等は彼等が贖なはれたる價の如何に高きか、又彼等を我等に囑托したまひし者は誰なるかを深く心に記して忘れざらんことを要す。天父の無始無終なる御子その寶血を彼等のために濺ぐことを甘んじたまひしに、我等かへつて彼等を輕んじて豈可ならんや。御子かれらを贖なはんゑに父神の懷を去りて天國の萬福を捐たまひしに、我等わづかに一時の快樂のため、暫時の安佚のために、彼等をして滅亡せしめて豈可ならんや、我等の最も愛し奉る主の御血は彼等を贖ふために畏こくも流されしに非ずや。主が我等に托して守らせたまへる群をして猛獸の餌とならしめなば、主が大審判の庭に坐したまへるに何の顔ありてか見えんや。

キリストに在て親愛する兄弟諸君、此の思想は我等を導きて此懶惰てふ危險の最大防禦たるべき者に考へ到らしむ。

(第四に) 我等は一層切に、一層頻りに、主に求むるに主を愛するの心を賜はらんことを以てするを要す。是れ主がみづから垂れたまひし訓誨なり。「爾我を愛するか」は「我が羊を牧へ」に先だゝざるべからず。我等の胸中に群信徒を愛するの情を活潑ならしむる者は主を愛するの情に若くは無し、我等の心情をして其日常の職掌上に濃やかならしむる者は主を愛するの此情を措きては他に求むるも得べからず、我等は必ず先其牧守する人々が我等の預め燃るばかりの想像を以て心眼に描きたらんごとくならずして、大抵は冷淡、遲緩、頑硬、薄情の人物なるを見いださん、果して然らば我等が彼等に對する愛情の日に月に冷却し行くを防ぎとめん者はキリストに對する眞箇の熱愛を措きて復何かあらん。此の日に月に冷却し行く愛情は則ち我等の大審判主の御耳にいつも殺人者の聲として響く者にして、カインと同じく恒に自ら語りて云ふ、「我あに我が兄弟の守者ならんや」と。されば結局は此に存す。我等もし其兄弟を守ることを怠らざらんとせ

ば、我等の主を愛せざるべからず。我等はキリストの十字架の下に在て、恭しく跪きて、――自ら罪惡と戰かふにおいても、自ら救はるゝに於ても、キリストの御聲を聞くに於ても、キリストの祝福を受くるに於ても、キリストの御肉を食ふにおいても、キリストの御血を飲むにおいても、齊しくキリストを愛することを學ばざるべからず、又キリストのために我等の兄弟を愛することを學ばざるべからず。然るときは至難の職務も、――愛する心よりすれば、何事も易き者なるに因て――輕らかなる者となるべし。さらば我等は日々の訪問および行事上に於て如何に主に倣ふべきか、如何に「左に揭ぐる」主の御言を解すべきかを御靈に教へらるべし、

「我は爾曹の師また主なるに尙なんぢらの足を濯ふ、爾曹も亦たがひに足を濯ふべし、我なんぢらに例を示せり、此は我なんぢらに行し如く爾曹にも行しめんが爲なり」。

第八講話

祈禱の不倦怠

ば、我等の主を愛せざるべからず。我等はキリストの十字架の下に在て、恭しく跪きて、――自ら罪惡と戰かふにおいても、自ら救はるゝに於ても、キリストの御聲を聞くに於ても、キリストの祝福を受くるに於ても、キリストの御肉を食ふにおいても、キリストの御血を飲むにおいても、齊しくキリストを愛することを學ばざるべからず、又キリストのために我等の兄弟を愛することを學ばざるべからず。然るときは至難の職務も、――愛する心よりすれば、何事も易き者なるに因て――輕らかなる者となるべし。さらば我等は日々の訪問および行事上に於て如何に主に倣ふべきか、如何に「左に掲ぐる」主の御言を解すべきかを御靈に教へらるべし、

「我は爾曹の師また主なるに尙なんぢらの足を濯ふ、爾曹も亦たがひに足を濯ふべし、我なんぢらに例を示せり、此は我なんぢらに行し如く爾曹にも行しめんが爲なり」。

第八講話

祈禱の不倦怠

『努めて神に祈り』

（聖品プレスブテロ派立式文）

第八講話　祈禱の不倦怠

基督における兄弟諸君、――今まで講話し來りし種々の問は諸君の爲すべき事業に關する者なるが、今茲に我等が到達せる問題の目的とする所は諸君が其敎會に於て神のために働くの業よりすらも遙かに深き者なり、即ち是れ一切の眞事業のために眞正の預備たらざるべからざる者――諸君自身が靈魂の狀態、諸君自身が精神の準備――に關す。此中には二種の判然別異なる而して又最も切要なる研究を包含すれば、我は別々に之を諸君とともに學ばんと欲す、而して今は此等二者中の第一なる者を專ぱら論ぜんとす。聖職中の高等なる部分を志願して之が爲に其幾層大いなる試煉に勝ふべき最も大いなる力を要する人々にむかひて、今此の問は特別にも緊切なる者とす。但し是また幾分は會吏の職を志願する者にも當らざるに非ず、――否な然のみならず、此事たるや靈魂を牧守する此の危險の職を托せられたる我等にむかひ

『努めて神に祈り』

（聖品プレスブテロ派立式文）

第八講話　祈禱の不倦怠

基督における兄弟諸君、――今まで講話し來りし種々の問は諸君の爲すべき事業に關する者なるが、今茲に我等が到達せる問題の目的とする所は諸君が其教會に於て神のために働くの業よりすらも遙かに深き者なり、即ち是れ一切の眞事業のために眞正の預備たらざるべからざる者――諸君自身が靈魂の狀態、諸君自身が精神の準備――に關す。此中には二種の判然別異なる而して又最も切要なる研究を包含すれば、我は別々に之を諸君とともに學ばんと欲す、而して今は此等二者中の第一なる者を專ぱら論ぜんとす。聖職中の高等なる部分を志願して之が爲に其幾層大いなる試煉に勝ふべき最も大いなる力を要する人々にむかひて、今此の問は特別にも緊切なる者とす。但し是また幾分は會吏の職を志願する者にも當らざるに非ず、――否な然のみならず、此事たるや靈魂を收守する此の危險の職を托せられたる我等にむかひ

て誰よりも最も多く當る者なりとは雖も、亦是れ敎師にもあれ俗信徒にもあれ、凡てキリストに從がひて其榮光に與からんと欲する者には誰彼の別なくして齊しく當る者とす。即ち我が今より諸君の清聽を煩らはさんと欲する者は他ならず、「諸君は努めて神に禱るや」といふ問につきてなり。

此問の意味につきては多く言ふを要せず、固より是れ各種の祈禱――公私、定期、臨時、偶感等の祈禱――を指せる者にして、此等の諸の祈禱において諸君は均しく努めて倦まざらんことを要す。亦努めて祈るといふは如何なる事なるかといふにつきても我は喋々するを要せず、勿論これは單に長き時刻を之に費やすをいふに非ず、もつとも平常無事なる日に於て時刻の之に費やすべき者あるに、之を故らに短縮するが如きは、努めて祈る者とは謂ふべからず。然れども眞箇に努めて倦ざらんとするには是よりも遙かに多くの事あるを要す、即ち心と精神を十分に盡くすといふ事なくんばあるべからず、靈魂を神に捧ぐる事なくんばあるべからず、愛情を神に注ぐ事なくんばあるべからず、願望を神に繫ぐことと無くんばあるべからず、熱心熾んにして同時に忍耐に富み、謙遜深くして同時に剛膽に厚からずんばあるべからず、――此精神は光陰も度る能はざる者にして、長き祈禱をも之をさゝぐる者には短かしと感ぜしむ、亦短き祈禱も若し止むを得ずして此に至りしならば、神の前には長き祈禱と算せらる、神は情の切なる人を基督のために憫み納いれたまへば也。

諸君の誓約せる所の者は斯のごとし。親愛する兄弟諸君よ諸君の聖職を辱かしめずして却て有功ならしめんには是よりも大緊要なる者はあるべからず。他の諸資格をば殆ど皆缺きたる者にして其聖職上に好成績を擧げ、時としては案外に著大なる好成績を擧たるが如き例は或は乏しからざらんも、祈禱に努めざる牧師にして其聖職上に好成績を擧げ得たる者は一として有ること無しと我は信ず。何れの方面にむかひて尋ぬるとも、有功なる聖職は是れ祈禱に努むるの聖職なるを發見

すべし。祈禱と奏功との親密なる關係を明かにする所の例證を算ふるは、實に是れ古來基督のため及び其兄弟(同僚人類)のために大事業を成し遂げし人々の姓名錄を讀むの事なりとす、請ふ先づ聖使徒保羅を以て始めん、彼は許多の點に於て代々の同役者(聖職に於ける同僚)の模標たる者なるが、其すべての書翰中にて入敎者に確言して曰く、晝夜切に爾曹のために禱る(帖撒路尼迦前書三の十)、――曰く、爾曹のために恒に祈る(哥羅西書一の三)、――曰く、恒に爾曹衆の爲に祈るごとに欣びてねがふと(腓立比書一の四)、――羅馬の基督敎徒にむかひては曰く、神は我が祈るごとに不斷なんぢらを懷ふ其證なり(羅馬書一の九)、――エペソ人にむかひては曰く、我が祈禱のとき爾曹を懷ふ(以弗所書一の十六)、――テサロニケ人にむかひては曰くわれら祈禱の中に爾曹の事をのべて常に爾曹もろもろの爲に神に感謝す(帖撒羅尼迦前書一の二)、――テモテにむかひては曰く、われ夜も晝も祈禱に斷ず爾をおもふに因て……神に謝す(提摩太後書一の三)、――ピレモンにむかひては曰く、われ祈るときに常に爾の事を陳て我が神に謝す(腓利門書四節)。使徒(アポストロ)たちの世より下りて直に其次の世代を見るに聖ポリカルプ(St. Polycarp)のごときも敎會に災難の臨めるときには、必ず二三の同志とともに都府を去り、日夜ひたすら萬人のため及び天下の諸敎會(ヅ)のために祈れりと云ふ、彼の偉人たる君牧師(カーデナル)ボロメオ(Borromeo)が羅馬敎會に腐敗の夥だしかるにも拘はらずして能く超群の聖行に造詣し、別に天縱の大伎倆もなくして能く周圍に社交上および政治上の大釐革を行なひしも、一に此祈禱を常にせしに因るや疑をいれず。聞く「彼は日夜に禱ることを唯に其靈魂の樂を算せしのみならず、等しく又其の聖職の力と算し、何の事業を企むるにも必ず先づ聖善なる人々の祈禱を之がために求めたり」と。又曰ふ彼は平素二十四時間の中五時間をば祈禱と瞑想とに供せし者なるが、自己または敎會のために大事件のおこらんとせる時には、終日の疲勞をも厭はずして祈禱に夜を徹するを常とせりと。亦努めたりと謂ふべし。

且又常に祈るの事が何故に然か最第一の要具なるかを了ることも難きに非ず。先づ此事は我等が職務の性質上實に然らざるを得ざる者とす。該職務は要するに是れ聖靈の御業の一部分なり、其初は訓慰師の來れるより起り「五旬節の賜物に根柢す。其任命は昇天の前に基督より出たれども、使徒たちは上より此能力をたまはるまでエルサレムに留まりをれり。其天に昇りたまへるや基督やがて人々に能力をたまへり、而して「其賜ひし所は使徒あり預言者あり傳道者あり牧師あり教師あり」き（以弗所書四の十一）。

基督教の聖職の起原はすなはち此に在りとす。是れ聖靈の施治なり。其權威其勢力其功德はことごとく此より生じ來る。我等の發する辭に力あるは、聖靈が我等を媒として人々の心を柔化したまふに因る耳、我等の辭のみを以てせば宛ながら下磨のごとく硬からん人心も、聖靈の氣を吹かけたまふ時には綿のごとく柔かに成る者なるが故に、然か我等の辭の透るなり。我等もし聖靈の我等に命ぜる事をなすならば、其業は徒

爲ならずして眞に功力あり、是は聖靈われらの手を以て自ら働きたまふなればなり。是の如くパプテスマに於ても、我等が薄弱なる身を以て施こすにも拘はらず、小兒は之に由て更生してキリストに接木せらる、是の如く聖餐に於ても、パンを劈き酒を斟ぐは我等なれども、信者は眞に其靈口を以て「人子」の御肉を食ひ御血を飲む、——是の如く我等が主の命にしたがひて天國の鍵を用ふるに於ても、恩惠の潮流は我等に托せられたる靈魂の上に或は注ぐことゝなり或は注がざる事となる、是の如く我等赦宥を悔悟者に宣るに於ても、多福なる解罪の壁は肅かに傾むける耳を偷びて通り渴望しつゝある魂に貫ぬき入る。皆齊く其力を左の大眞理より獲る者とす、——曰く我等は主の恩惠の國に在り、曰く訓慰者たる聖靈われらと俱に在り、曰く我等の職任は、其れ自身に於ては如何にも薄弱なる者なれども、來ん世の力の絶大なる作用ありて其中に充ち滿つ。

是に由て之を觀れば、善く禱る聖職員は有力なる聖職員なるや必然な

り、何を以て之を言ふや、曰く、我等の弱を神の強に繋ぐ者は祈禱なれば也、神の御稜威を揚ぐる者は祈禱なれば也、萬福なる聖靈が働きたまふは祈禱に應へてなれば也、一切の枯たる者、暗き者、死せる者を濕ほし照らし活かす御氣息を主より吹いでしむる者は祈禱なれば也。

されば祈禱を帶びずして聖職に從事するは、譬へば其力を悉く背後に遺し來りて數多の勁敵に戰を挑む者のごとし、其打勝たんことを望むとも豈其得べんや。其力髮を斬られたるサムソンといへども斯る愚人には譬ふるに足らず、如何となればペリシテ人よりも猛惡なる者夥しく彼が前途に埋伏して窺へば、其末路は之を彼の力ぬけたるナザレ人に比すれば、更に幾層恥かしかるべく、其盲目は更に幾層慘ましかるべし。

否な、唯に此に止まるに非ず、其影響の及ぶ所更に是よりも大いなる者あるなり。我等が擔ふ聖職の力あるは全く聖靈なる神の直接なる援助に由る者なるが故に、此事は實に斯の如くならざるを得ざるのみならず、又此事たるや聖職中我等が神と同勞者たる部分に於ても同じく然る者と謂はざるを得ず。抑も我等が聖職なる者は徹頭徹尾我等自身の善惡良否に由て多少の影響を蒙らざるを得ざる者なり。我等が誠實なるか或は不誠實なるか、肉に屬するか或は靈に屬するか、地を慕ふか或は天を慕ふかに依て、我等の擔任する聖職もまた同じく然るべき者とす。我等もし單に言語を弄ぶ者ならば、我等の生活は虛禮なるべくして、必ず續々と虛禮家を生ぜん。我等もし冷淡、獨斷、乾燥にして、外部の禮拜には細かしと雖も、心中には人を愛するの精神なくば、我等の信徒も亦冷淡にして相爭そひ、愛心なくして獨斷を逞しうするの人たらんとす。之に反して我等もし幸にも神恩に由て基督の十字架の前に身を卑くすることを學びたらば、若し我等の重荷其處にて我等の肩上より落ちたらば、若し灑ぐ所の寶血我等の身にふりかゝりたらば、若し我等の靈魂自由になりたらば、若し基督の救贖を喜びて我等はゝかり無しに「天にまします我等の父」と唱ふることを學びたらんには、若し我等「御靈に

よりて歩み」なば、――神の大恩の働に由て、我等の信徒中にも亦此の如き美德の散在するを見ん。勿論例外は無きに非ず。神は大主宰者なり、大主宰者として事を行ひたまふ。我等は須らく神の諸の施行を――其吾人の欲するが如くなるにもせよ然らざるにもせよ――謹み忍んで伺ひ奉るべし。然しながら牧師自身の精神は一般に其聖職中に呼吸する者なれば、牧師が善く禱る人たらんことは、其聖職の奏功に最大緊要なる者とす、如何となれば善く禱る人たるに非んば亦自ら神の人たるを得ざればなり。牧師もし高等の聖域に達せんと欲せば、多く禱るの人たらざるべからず。此點に於ては衆聖皆一致す、――聖アンセルム(St. Anselm)曰く、「汝若し喜怒哀樂等の諸情の纏縛するを脫離せんと欲せば、夜中獨り起き出で神の前に祈禱と熱涙とを以て解脫を求めよ」。――聖ベルナルド(St. Bernard)曰く、「神を愛するの情は恒に神にむかひて注ぐと雖も、時としては此の情幾層の熱を加へて爆發迸出す、祈禱の時に於て殊に然りとす」。但し高等の聖域に達するには姑く之を措くも、神の役者

は、努めて禱るに非れば、安全なるだも能はざらんとす、即ち彼は人中の最も安全少なき者ならんとす。如何となれば役者には其職務のために惡魔特に烈しく抗敵しつゝ其諸の武器をさしむくれば也。而して惡魔は我等が祈禱の冷淡にして且疎慢なるに乘じて、屢々勝利を博す。彼の公然怠慢不虔にして吾人の憂を釀すが如き牧師は固より論外とせんも、牧會上の大失敗は、若し其の由て來る所を審かにするならば、必ずや祈禱の缺乏疎慢または之を行なふの不注意に歸すべき者なるを發見せん。如何となれば此缺典たるや是れ萬種の弊害のために進入の門戶を啓く者なれば也。努めて禱る事の足らざるよりして先づ氣を散らし目を迷はし、隨つて惡き想像を挑發し、而して其惡き想像は泥を塗るの汚點として精神に固着し、終に其惡貫盈し、「慾すでに孕みて罪を生む」に至るが如きこと、嗟如何に屢々なるぞや、皆て世慾を抑へたる祈禱の弛めるが爲に如何に屢々世慾は再び心内に熾んになるぞや。單に事の表面のみに着眼する人々より見れば如何にも突然たるが如き又愕然た

るが如き許多の頓仆も實は是れ祈禱の怠慢疎略が如何に幾多の歳月の間隱然と馴致し來りし者ぞや。泰然として千歳の狂風嚴霜を凌ぎ來し大木が俄然一夕の凉風に倒るゝは、豈是れ其祈念の根が多年の間すでに朽壞に委せられてありし明驗にあらずや。此等の人々も若し努めて怠らずに禱りたらば、其頓墜を如何に屢免かれたらんぞや、肉慾的なる邪念に對して心の關門を如何に屢杜ぎ、世慾の田に蔓こる荆棘を如何に屢芟ることを得たらんぞや、虚榮および傲慢は我等が公務の心腸を蝕ふ者にして、衆多の牧師を亡ぼすの大敵なれども、我等もし執務上神を念ずるに心を專らにせば、――我等が公けに執行する所の職務をして我等が密かに神に親しむ所の者(祈禱に努むるの事)の推擴たるに外ならざらしめなば、――此等の大敵も入るに餘地なからんとす。然のみならず、斯の如き親交(神に祈りて交はる事)はまた我等が禮拜奉仕する者の威嚴を感ずるの念を以て我等の胸中に充たさんとす。我等もし先づ私かに己れの罪を室内に哭きて出で來らば、我等の耳目は聰明なる者となりて、群信徒を如何に訓導すべきかを了るに速かなるべく、又我等の觸着は甚だ柔かにして、群信徒に其必要の手術を耐へしむるに餘りあるべし。

且又努めて禱る事は我等の聖職を全體として力あらしむるに斯く必要なるが如く、亦是れ其諸の部分をして有功ならしむるにも必要なる者とす。

例へば我等は自ら先づ跪きて教訓を求めたるに非ずんば、爭でか人を誨ふることを敢てせんや。ウヰクリフ(Wiclife)曰く「神の役者は善く禱る人ならざる可らず、如何となれば天の教誨を先づ心中に受くるを要すれば也」と。但し我等が要する者は單に神の眞理を知るの事のみに非ず、我等は亦該の眞理を其群信徒に最も有益なるが如く擇ぶ事に導びかるゝを要し、且該の眞理を正しく宣傳するの道を教へらるゝを要す。此に於ても亦奏功は祈禱に由て得べき者とす、故に聖アウガスチンの曰く「此の目的は雄辯の力に由て達するよりは切實なる祈禱に由て達す

るを遙かに多しとす、即ち是れ我等自身のためと我等が教へんとする人々のために切に禱る事に由て達すべき者なり、是故に我等は説教者たる前に先づ祈禱者たらざるべからず」と。彼また曰く、「エステルは其人民の此世に於ける救護を王に求むるに當りて先づ己れの口に智慧の語を賜はんことを神に祈れり、果して然らば況して人々の未來に關する永遠の拯救を宣ぶる事に勞らく者をや、豈同樣の賜物を與へられんことを祈らずして可ならんや」と。聞く是は彼の聖徒フレッチェル(Fletcher)が常に行ひし所なりと、彼が説教は必ず或は之に先んずるに祈禱を以てし、或は之に伴なはしむるに祈禱を以てし、或は之に次ぐに祈禱を以てしたり、而して其祈禱中に在て彼は「其信徒の狀況に適する題目を選ばしめられんことを特別にも神に求め、而して自己のためには其題目を講ずるに要する智慧と雄辯と能力をたまはらんことを祈り、彼等(群信徒)のためには「健全なる軀殼、公平なる精神、好記の心情」を有たしめられんことを祈れり。其素行かくのごとくにして彼は恒に自ら信ず

らく其禱の冷熱は之を後日の成敗に徵し得るなりと、夫の冷頭にして熱衷することだも稀なるエラスマス(Erasmus)も是と其説を同じうす。彼すなはち曰く、「祈禱の家に在ては説教師たる者須らく深く禱るべし、嬰兒や乳哺者の口を啓きたまふ者にむかひて智慧と言語を求むるを要す。此の祈禱よりして幾何の聰明氣力および覺悟の説教師に流注するかは殆ど信ずべからざるほどに大いなり。」

實地に之を試たる者にして誰かエラスマスの語を是認せざらんや。誰か知らざらんや神の御前に跪きて禱りつゝ或る有益の題目を求め、或は之を講説するの力を乞ふ時には、暗影飛び去りて光明入り來り、今まで混沌冥晦なりし宇宙忽ち變じて秩然朗然たる新天地を神の前に現ず。枯燥無情なる精神――毫も人のために憂へず、キリストの十字架をさへに冷々然と仰ぎ望み、何等の力といふとも迎も融す能ずと見ゆるほどに固く凍れる心――を以て神の前に跪きたる者も、人のために禱ることを始むるや、惡魔出で去り天使來り助くるを見ること、凡て之を

試みたる者の皆知る所なるに非ずや、

此事たるや我等が從ふ聖職のすべての部分に通じて悉く然る者とす。主の靈我等に與ふるに活視力ある目を以てし、慈悲の心を以てし、天來の智慧に浸れる言辭を以てするに非れば、安んぞ我等の牧會的訪問を以てするに非ざれば、我等安んぞ其群信徒の靈なる試煉を洞察するを得んや、然るに斯の如き活眼はルーテルが謂ゆる「教師を構成する」の具——「祈禱、瞑想、及び誘惑」——の調和を以てするに非んば、如何にしてか授かるを得んや。神われらに賜ふに祈禱の靈を以てするに非れば、我等安んぞ其群信徒のために禱ることを得んや。我等もし聖ベルナルド(St. Bernard)の如く、同樣の試煉にあふ時に於て、彼が謂ゆる「群信徒のために禱り且泣くといふ例の甲冑」を穿るに非れば、如何にしてか群信徒中なる頑硬者輩と戰ひ、且頑硬者輩の爲に戰かひ行くことを得んや。神われらを扶けたまふに非んば、我等いかにしてか彼等の前に不撓不屈なる

こと百年も一日の如くなるを得んや。神の此扶助あるに非ずんば、我等牧師として立つ處にて何れの領分に於てか安全なるを得んや。神もし我等の祈禱に應へて我等を謙卑に止まらしめ給ふに非んば、聖職執行上に奏功ある毎に我等いかでか傲慢に流れざるを得んや。我等神を己れの城とし力として之に投じ得るに非んば、此の聖職務の心配困難失望および辛酸を如何にしてか忍ぶことを得んや、——即ち我等もし、昔しの聖アンセルムの如く、神にむかひて「嗚呼我をして爾の羊を飼はしめんとすること爾の無始より以來定めたまへる聖意なるに非りせば、我何をか此に爲さんや」と申すことを得るに非んば、如何にしてか斯く百折不撓なるを得んや。アンセルム(Anselm)更に語をつぎて曰く、「嗚呼神よ我もし爾の恩助に由て我が兄弟の拯救を計るべくあらずんば、何ぞ此の如き喧鬧中に留まらんや。冀くは爾の大慈悲を以て天の慰籍を我に垂れたまへ。爾が我に負はせたまひし此千萬鈞の重は我如何に之を任ふべきかを知らず、又之を背より取おろすことをも敢てせず。嗚呼神

よ、凡て爾を頼む者を助けたまふ神、願はくは爾の恩惠をして我を棄しむる勿れ、願はくは爾の慈悲をして我を離れしむる勿れ」。此の如く言ふを得てこそ始めて百折千磨に堪ふることを得るなれ。

偖もし善く禱る生活斯の如く我等の安全と成功とに必須なる者ならば、我が教會が其嚴肅なる按手禮の時に於て、我等をして努めて禱らんことを誓約せしむるは、慈且智なるの所爲と謂はざるを得ず。

但し我等が此誓約をなさしめられたる所以の理由は此に竭くるに非ず、此外にも尚在りて存す、其の首要なる者の一につきて我は今より將に稍詳かに諸君に語る所あらんとす。

我等が善く禱るの生活をなさんことを嚴かに誓はしめらるゝは善し、如何となれば是れ祝福に富める而已ならず、我等の身には缺くべからざる者なれども、亦是れ許多の大障碍に打克つことと無しには爲す能はざる生活なれば也、されば請ふ少しく此等の障碍の何者たるかを考へ、而して又其如何にせば打克たるべきかを論ぜん、

吾人は地に屬するの心を有す、此心は神と親しむことを自然に嫌ふ、是此等の障碍中の第一なる者にして、又是れ實に一切の障碍の根本たる者とす。我等の中神に禱らんことを試みたる者にして誰か此障碍の實有にして且力强き者なるを見いださゞる人あらんや。勿論或る種の祈禱式に若干の光陰を供することは難きに非ず。然れども是より上に出ることは――唯に生涯に一二回のみならず、嗟再三再四と幾回も――如何に難ゝ哉。神の現前まします事を只十分に感ずるだも容易の業に非ず。我等の祈禱の聲が神に達したりと信ずるは更に難し。祈るに當りて單に或る藝を演ずるが如き、――暫くの間我等の心を鼓吹して若干の感動を激發せんと求むるが如きは、決して眞の祈禱に非ず。祈るに當りてや滿心須らく進出して靈知の神を慕ふべし。而して祈禱が其眞面目――すなはち神を慕ふて心情を傾注すといふの域――に達するや、全く自己を忘るゝの事なくんば有るべからず。固より此世の慈惠を乞ふが如き、否な罪の赦宥を乞ふが如き、或は誘惑を防ぎ、又は心裏の惡念

に打勝つの力を乞ふが如き、或は特別の恩惠を直接に賜はらんことを乞ふが如き、――凡そ此等または此類の乞願に於ては、頗る自己といふの觀念ありて其祈禱を混和せざるを得ず、即ち我等は其懼るゝ所、其需むる所、其希ふ所等と併せて我等自己を有意に神の御前に携へつゝある者なれば、我等の心は隨て自己といふ者を多く慮ばからざるを得ず。是故に神の現前を眞に感ずるの第一困難に少しにても打克てる時は、我等が乞ふ所の情若し强からば、自然に一種の熱心を我等の祈禱に與ふべし。然れども我等の祈禱若し此に終りて其上に出でずんば、――我等の祈禱もし神の榮光を其終極の目標として之に向ひて益々上るに非んば、畢竟これ危險なる熱心にして、妄りに之に氣をゆるすべからず。バアル神(Baal)の禮拜家輩も朝より夕まで彼を顧び、刀鎗にて躬から傷つけ、地に屬するの熾盛なる熱心を以て耳も聾するばかり頻りに叫びて「バアルよ我等に應へたまへ」と言ひしに非ずや(列王紀畧上十八章二十六節)。

萬殊の虛妄なる禮拜には十中八九すべて斯の如き僞熱心充實す。然るに此事たるや是れ眞に禱るべき者(祈禱の眞目的)、すなはち靈知聖德の神といふの觀念が此の熱心の中に入らざりしとを明かに示す者とす。此祈禱の氣息をして數百度の爐熱に上らしめたる者は其最大目的たる神を慕ふの情にあらずして、全く或る他の目的を慕ふの情たるなり。然れども高尙なる禮拜上よりは是等の陋劣なる目的は必然に排除せられて其中に入ることを得ず。是に於てか我等は彼の普通なる世間的精神(世慾)の如何に吾人の靈魂を痿痹せしむる害物なるかを明らかに見る也。我等單純なる謙遜を以て聖者の前に拜伏せんと欲する時にも、無始無終なる御父、我等の萬福なる救主たる同じく無始無終なる御子、及び我等の聖成者たる同じく無始無終たる聖靈を仰ぎ崇めんと欲する時にも、神の聖德を讃美せんと欲する時にも、神の聖意が我等のうちに、又我等に由て行なはれんことを單に祈らんと欲する時にも、如何に屢我等は神の大能の蒼穹が、銅鐵の壁を以てするごとくに、我等にむか

ひて固く閉されたるを見るぞや。

世間を全く謝絶することは如何に難い哉。如何に速かに禮拜は單に世間的なる瞑想に流るゝぞや。我等暫くの間思想を此等の永遠なる眞體に注ぎたるならば、自ら省ると均しく、如何に我等は、早くも既に世間の朦霧が我等の未だ善く心づかざる前に其靈魂を蔽ふて天上の榮光を盡く遮ぎり了りたるを見いだす者ぞや。或は我等もし其群信徒のために努めて禱りたらば、若し我が教會の復興せんことを禱りたらば、若し聖靈の息が我が教會の上に氣吹んことを努めて禱りたらば、若し眠れる魂の目醒んことを努めて禱りたらば、若し罪惡に死したる靈魂の悔改めんことを努めて禱りたらば、若しエホバの腕の扼げられんことを努めて禱りたらば、若し基督の十字架が其吾人に生命を與ふる權能と榮光を以て高く擧られんことを努めて禱りたらば、我等の見いだす所は果して如何ぞや、——我等の精神は如何に懦弱なるぞや、我等の欲望は如何に寒冷なるぞや、我等の乞願は如何に虚式なるぞや、我等の祈禱

は——宛がら其天に達するの大氣が餘りに清潔爽利にして我等のごとき粗性の呼吸するに堪へざる者のごとくにして——如何に息短かきぞや。されば我等の最第一なる大障碍は此に存す。世間じみたる心にして懦弱寒冷なる者は、痛恨する、或は信頼する、或は愛慕する、或は崇拜する靈魂の聲を神の前に注ぐべく打醒せらるゝを肯んぜざる者のごとく、又然か打醒せらるゝを得ざる者のごとし。

但し此の第一の困難は又他の諸困難の來り加はるがために幾層其度を強うせしめらるゝに至る。斯の如く我等の中には長く續いて禱るべき時間を見いだすを眞に難んずる者多し、職務外の障碍は——是もまた我等の生活の割合に離群獨棲なるにも拘はらずして殘念にも尙夥だしけれども——姑く措きて論ぜざるも、我等が聖職上の業務すらも屢々之が障碍をなすが如し。我等の牧する教會は或は大なる者ならん、而して我等が時間と思想と注意を要むると間斷なくして、煩累はしからん、——或は我等の牧する教會は小なる者ならん、而して直接に道德

的または宗教的なる件々のみならず、慈善救濟等の件々までも躬から管理することを要せん、――我等或は身を以て學校の要務に當らざるを得ざらん、――或は種々の倶樂部および貸本文庫を掌どるを要せん、――或は貧民の病髓を看護し且彼等の困難を慰諭するを要せん、――或は説教の書かざるを得ざる者あらん、讀書の廢するを得ざる者あらん、始終公務の執り行はざるを得ざる者あらん、是の如くにして實際氣を靜め精を凝らして密かに神と交はるの暇きはめて少なからん。且又此等の諸障碍につきては、茲に左の特別なる危險ありて存す、――即ち是みな我等が職掌上務めねばならぬ所より出で來れる者にして、悉く是れ直接に神に事ふるの臭味を滯ぶるが故に、我等はイエスの足下に坐して其教誨の辭を聽く事よりも動もすれば此マルタ然たる齷齪を善しとせんとす。是を以て此等の餘事たるや、其中に職務たるが如き觀おほければ多きほど私の祈禱を碍たぐる者として危險大いなりとす。凡そ私の祈禱を碍たぐる者は死の熱風を吾人が靈魂の上に吹しむる

者なれば、其危險焉んぞ大なる者とせざるを得んや。

此缺乏を補ひ得る者は世に無し、何物も之に代るには足らず。是なき時は、唯に他人に對する我等の職掌疎畧なる者となり、利己なる者となり、外見に專らなる者となり、キリストが人々の心を醫したまへる處にて心の事業の聖潔および活潑を缺く者となるのみに非ず、更に歩を進めて、我等の公祈禱自身もまた冷淡虚式および幻妄なる者となるべし。是實に特別なる危險にして、經驗と自警とを重ぬるに非れば、到底その廣さを正しく量ること能はず。我等公禮拜に屢々列なるべく始めて導びかれたる時には、新奇の祈禱界へ携さへられたるがごとき心地す、而して實にまた我等は然かる者なり。我等もし公祈禱上に於て己の靈魂を神に獻ぐることを得るならば、斯の如き好機會たる禮拜を有することの幸福を益々大いに感ずるに至るべし。但し是(公禮拜)につきても、亦一切の靈なる利益につきてと同じく、一種特別の危險ありて存す。斯の如き祈禱の蔭には虚式と稱する者ありて常に埋伏す。我等は至極速かに

祈禱會及び讃美會を以て祈禱及び讃美となすに至らんとす。否な我等は公けの祈禱に多くの時間を費やすとの口實を以て動もすれば私しの祈禱をさへに短かくせんとす。之に反して我は却つて信ず凡そ仔細に自ら檢する者は必ず經驗して知らん若し公祈禱をして虚禮空式に流れしめざらんと欲せば、公祈禱の數の增すに隨がひて益々私祈禱の數を增すこそ却つて必要なるなれと。此等二者の間には幾分の比例なくんばあらざることを忘るゝなかれ。諸君もし其公職務の精神をして活氣あらしめんと欲し、健全ならしめんと欲せば、中保者を媒介として神と密かに靈交するの必要習慣、――神と密かに交はるの時刻に於て仲保者の御聲に加ふるに我等が靈魂の叫呼を以てするの必要習慣を常に活かしめおかずんばあるべからず。されば此にも亦一大危險ありて存するや言を俟たず。思ふて此に至るも、亦諸君が善く祈るの生活をなさんことを其任職の際に於て神の前に誓約せしめらるゝは、宜なる事と謂はざるを得ず。

但し此における我等の危險は唯た世慾より起るのみに非ず、又は聖職執行上の業務等より起るのみに非ず。亦是れ懶惰より生ず。是また一大陷阱なり、屢また是れ我等が最も心づかざるの陷阱たるなり。至極鞅掌する如く見ゆる人も其心底に於ては懶惰なる人たる少なからず。懶惰が業務といふ城廓に閉籠りたる時ほど犯す可らざる者はあらず。實に繁劇なる懶惰ほど普通なる危險は稀なり。是れ懶惰は實は業務の反對には非ず、我等の能力を活潑に働らかせざるを謂ふ者なれば也。抑も我等の祈禱は、之をして眞實ならしめんには、我等の全心を之に凝集せざる可らず。我等はその自己の全躰を神の御前に啓かざる可らず。按ずるに祈禱ほど然か同時に我等の氣を鼓舞し又我等の氣を耗消する者は有ず。是の如く我等自己を傾注するには、斯く斷乎として我等の靈魂を一定なる姿勢に保住するには、――懺悔告白のために罪の度を觀測するにもせよ、解罪(アブソルーション)のために耳を傾くるにもせよ、代禱するにもせよ、懇求するにもせよ、讃美するにもせよ、――其力を十二分

に張らずんばある可らず、神の現前を深く會得せずんばある可らず、信仰に由て神を執へて我等の分となさずんばある可らず、主基督に自ら投ぜずんばあるべからず、思想および愛慕の全流を張らせて基督の大力なる中保の潮に混へずんばある可らず、――基督と我等との間に邪魔物を入らしめざらんとに心せずんばある可らず、特別にも我等と基督との間に私心なる者の突入するを防がずんばあるべからず、信仰の眼を純ぱら基督に着くるに引替へて、宗教の光明裏に不健全なる觀想の生長せんとするを防止せずんばある可らず。然るに此事たるや我等が靈魂の諸能力を極度にまで徴發する者なるを奈何せんや。此の困難事業よりして我等を誘ひて退縮せしむる者は即ち此の懶惰なりとす。我等は動もすれば徒らに瞑想に耽り、思想より思想へと盡處なく飛び移り、何處にも止る無く、何物をも得るなく、何物をも竭くす無くして、空しく祈念の時間を費さんとし、或は祈禱の辭を單に聽き、或は單に唱ふるに滿足せんとし、或は公祈禱の場に於て精神の熱するを以て足れりとし、或は華麗嚴肅なる禮拜の外形を見て或る人々が心中に起すが如き歡喜を以て足れりとせんとす。即ち我等は夜の明くるまで客と角力し、「我を祝せずば去らしめじ」と衷心より叫ぶが如き奮勇努力をば百方これを避けんと工夫す（創世紀三十二の二十六を見よ）。然れども此奮勇努力をこそは眞の祈禱と稱すべき者なれ。吾人が精神の天生懶きや必ず此事業より畏縮せんとすれば、此にも亦新しき大危險あるなり、而して是亦我等が其按手禮の際に此の困難なれども極めて必要なる美風を長養せんことを誓約せしめらるゝ所以の一理由なりとす。

但し茲に尙また困難の一原因たる者ありて我等に存するを見れば、是をも亦全くは看過するを得ず。我等の身心に於ける各種の善事は神の恩惠の直接に來す者なりとは雖も、我等の祈禱もまた神が自ら火を發ちたまへる靈魂の熱する氣息なりとは雖も、我等が神を切に求むるは神が我等を已れ（神自身）に引き寄せたまへるを我等の心中より表出する者なりとは雖も、――我等の美德は悉皆、若し眞實なる者ならんには、

箇々別々の行爲ならずして、平素の常習ならずんばあるべからず、就中祈禱の此の美德を以て特に然りとす。因て我等は其箇々別々なる散行を平素の常習とならしむるに非ずんば、何事をも正しく爲す能はざると同じく、又祈禱をも正しく行なふを得ざる也。是故に凡そ其祈禱に短かき或は稀なる、或は急ぎ、或は疎かなる人は善禱の美德を眞に獲る克はず若くは眞に保つ克はず。而して我等が今まで已に考察せし諸の障碍は悉く我等が善く禱るの常習を形くらんとするを妨たぐるに其全力を盡す也。世間的なる心は休歇を求む、事務ありて祈禱の時間に突入す、而して懶惰の性癖は其麻醉力を以て箇々別々の祈禱行を虛式若くは自恣に化し去るが故に、千萬遍これを反復するも終に善禱の常習を形くることを得ず。故を以て我等は其職に任ぜらるゝ際に先づ此の困難を眼前に揭げ出さるゝ也。是は我等をして預め之を見知りつゝ之に打克たんために神の力を頼ましめんが爲なりとす。

然し乍ら以上列擧せる所は未だ此至要なる常習を形くるに障碍たる者を數へ盡せるに非ず。如何となれば我等の身心中より起るべき是等の障碍の外に又我等の靈敵が挑發し來る邪魔あれば也。而して此等の邪魔もまた少なき者に非ず輕き者に非ず。否な我等の靈敵は此にて我等を妨げんがために其の誘惑の全力を竭くし來りて我等を惱ましんとす、神の僕は其最も弱き者にても其弱きを以て神に祈る者は甚だ强しと惡魔は知れり、――彼は即ち熟知す凡そ神のために此世にて爲す所の大事業は神の聖徒が祈禱の力を以て成す者なりと、又熟知す凡そ說敎師が放肆なる人を敎化し、睡魔に襲はれをる人を呼醒し、鬱憂に沈める人を慰さめ、聖徒の信仰を堅うし且勵ますを得るは一に其力を祈禱の中より得る者なりと、又熟知す神の眞理を了るの明、神の聖語を愛するの心、身を知るの事、謙る事、信仰、神を渴仰する事、キリストに止まる事、其十字架を純ら頼む事、キリストの救贖を貴ぶ事、罪愆を怖れ憎む事、良心の温柔なる事、他人に對して善く忍ぶ事等、――此等の美德は神の僕たる者が其主と面をむかへて交はる時(即ち禱る時)に賜はる者なり

と。故に悪魔は第一に先づ此の祈禱の時間を妨げ、毒矢を夥しく此聖行にむかひて亂射し來る、――彼は我等の天性の弱點を攻撃し、或る時は、世間的なる心の自然なる腐敗をことごとく撹發し、俗塵をして天を掩はしめつゝ、我等の微かなる祈禱の氣息をして天に達するに由なからしめんとす、――或る時には又我等の周圍なる人々の弱點に乘じて我等を誘ひ、我等をして彼等の卑き標準に照して自ら己れの熱心を過度なる者と思はしめ、終には我等の高き志をして世間普通の短き、或は寡き、或は冷たき祈禱の平面に落しめんとす。我は思ふ特別にも亦凡そ自家の擧措を仔細に吟味する人は必ず他の事務の繁劇なるより其祈禱上に生じ來る障碍が皆悪魔の計略に出でたる者なるを曉るに至らん。我等跪づきて在る時には動もすれば突然と或る他の事務の直ちに爲さゝる可らざる事を憶ひ出づ、而して其事務たるや萬事を後にしても先づ執らざるを得ざる者なるが如き觀を呈す、然るに其事務たるや禱りて居らざる時間には決して然かく緊急なる者とは見えず、是れ普通

の事實にして、誰か知らざる者あらんや。此事の何に由て然るかを原ぬるときは、誰か其中に我等の靈敵の術計あるを認めざらんや。是れ我等は何にまれ其本分義務を盡さんとするに方りて其普通なる基址或は根本を祈禱中より獲きたる者なるに因て、靈敵すなはち悪魔われらを斯く此神との靈交上より誘ひ去らんと試むるなれば也。其他われらの祈禱を妨げんとする各般の困難若くは誘惑も亦是の如き耳。人心の各岐路を熟知したまふ者――己れも亦眞箇の人にして、且我等のために大敵の虚謊妄誕の毒氣を身に受けしに因て人心の曲折を知悉し給ふ者、――唯彼獨り能く悪魔が我等を試みんため、及び終に神の榮光を大いならしめん爲に、如何なる秘密の蹊路より我等の心に入ることを許されをるかを洞見し給ふ。唯彼獨り能く彼れの力を頼む者のために悪魔を責めて逃走せしめたまふ、然り彼は彼れの力を頼んで悪魔を防がんと欲する人々の爲に驅魔逐鬼の强腕を振はんことを約し給へり。我等は此幇助を要するや切なり。最も熱心熾盛なる基督教徒といふと

も、若し暫時なりとも獨力に委せられあるならば、其人の祈禱を傷け且弱めんとする特別の害惡ありて之が身邊に蝟集せんとす。先づ不聖なる大膽と稱すべき大害惡の在るあり。世には無思慮の狎褻を小兒然たる自信と混同する者嗟如何に夥しい哉。如何に彼等は神が宛がら天にいます者にあらざるが如くにして、或は己れが宛がら地に在る者にあらざるが如くにして、――禱るぞや、噫。如何に無思慮なる詞が彼等の不聖潔なる唇頭より發し來るぞや。如何に彼等が宗教上の意見唐突と――殆ど至高者に對する奏辭たるに適する形式をだも具へずして――口を衝て出るぞや、噫。嗟彼等が祈禱と稱する者の中には彼等が得意とする所の見解如何に不敬虔にも徒らに縷々反復せらるゝぞや。嗚呼是等の中には彼の五體を神の前に投ずるの精神いかに少なきぞや、此精神たるや是れ凡て神に近づく人々をして無始無終の大寶座に咫尺せしむる者にして、彼等は乃ち其二つの翼を以て飛翔り、其の二を以て面をおほひ、其の二を以て足をおほふ。

縱や幸ひにして此危險を避けたりとても、又衆くの人の祈禱は如何に臆病なるぞや。嗟彼等の祈禱は小兒が其罪なき心よりして「アパ父」といふ啼聲を無限の愛の懷に注ぐに似ずして、如何に屢々單に其權能の怖るべき鬼神を努めて和むる者のごとき口氣充みてるぞや。

此の如き臆病さいはひにして免かれたらんも、如何に屢々そのかはりに冷淡と虛式に流るゝぞや。祈禱の熱氣は忽ち冷却し、地上の空氣すらも之を虛禮空式の霜工に凍結せんとする者の如し。我等が祈禱を見るや、思へらく是れ我等が爲さんことを命ぜられたる者なれば、之を爲すに毫も憚るを要せず、而して之を爲すや若干の結果從ひて生ずと、嗚呼我等が是の如く思惟すること如何に極めて屢々なるぞや。我等は思へらく先づ正しき志望あるを要す、而して注意は其有り得るに任せよ、然らば其目的は達せらるべしと、然れども嗚呼これ夫の苦患を吐き、重負を卸し、而して全能なる大御父の面より神聖なる光耀を受くるの靈魂とは如何に相異る者ぞや、蓋し此神聖なる光耀たるや、最も平凡なる人

の顔面上といふとも、凡て眞に禱れる者の面には、其神と親しく交はるの山をくだり來る時に赫灼として見ゆべき者とす、神と親しく交はらざる人にして爭でか之を獲ることを望むべけんや。

兄弟諸君よ、我等の困難は凡そ是のごとし。我は此の我等をして稍落膽せしむるがごとき事項を列擧したる而已にて此の講話を結ぶを好まず。寧ろ我は此等の困難に應じて之に打克つの方法につきて一擧に奬勵ともなり助言ともなるべき二三の辭を諸君に呈せんと欲す。

先づ奬勵より始めんに——

此等の障碍は數多く且隱微にして、幾度となく逼り來る者なりとは雖も、神の各聖徒の生活は此等の障碍の打克つを得べき者なるを證す。古來此等の者初は神の子を一々に煩らはしたりと雖も、終には之が爲に盡く打克たれたり。されば我等もまた之に「勝得て餘りあ」らんことを信じ得べし。

請ふ只我等をして正を蹈で奮鬪せしめよ。第一、我等が一切の困難の根

本は神と親交するの障碍中に横はる者にして、世間的なる心の裏には必ず免かれざる者なれば、先づ元惡の增長を防ぎて之を退治せずんばあるべからず。此に在て我等は、他處に於けるが如く、基督教的生活の逆說(パラドクス)——人は弱き時に强しとの危言——に鼓舞せらる。我等は善く禱らんと欲せば、世間心に先づ勝たざるべからず、而して之に勝つことは一に祈禱に由りて能くする者とす。何人も懶惰なる、或は自恣なる、或は世間的なる生活中より起りて天國的なる靈想の巔に達することをば得せず。世間の心勞快樂または自恣を以て重く壓せられをる靈魂にして、神の榮光輝やける純潔の空氣中に騰ることを能くすべくんば、黐(もち)にて捕れたる鳥も其翼に黐絲(いと)をからめ乍ら中天に翔り上ることを能くせん。凡そ禱る時に神の現前を認め其主と親しく交はらんと欲する人は常に目を醒して居らずんばあるべかず、合法の快樂をすらも自ら制して輕く嘗はずんばあるべからず。此規則は唯に彼が快樂を支配するのみならず、又その業務をも支配するを要す。固より神が任は

せたまへる職務をば何にまれ敢然として之を行なひて可なるべく、力を盡して之を執行して可なるべしと雖も、無用不急なる雑務の深泥を以て身を埋めざらんことを心せざるべからず。最も繁忙なる生活にも休歇閑暇なくんばあるべからず、即ち思想を運らし自省を行なふの餘暇なくんばあるべからず、間断なき運轉に火を發せんとする車輪が休みて冷却すべき餘暇なくんばあるべからず、必要なる世間の事務を行なふに當りてさへも靈魂の上に止まらんとする塵を拂ふべき餘暇なくんばあるべからず、靈魂の靜けき夜に神の恩惠の露が降りて其凋れたる綠葉を爽かにするの餘暇なくんばあるべからず。

是尚未だ足れりとせず。我等もし善く禱る人たらんと欲せば、無用の過勞を愼むが如くに又懈怠をも愼しむを要す。神聖なる決心と眞面目なる努力とを以て須らく靈魂を扶け、之をして神と交るの極めて嚴かなる務に堪へしむべし、常に神のために働いて靈魂の懈怠に流れんとするを宜しく防遏すべし。懈怠或は懶惰に流るゝときは其の必然なる結果として天罰として、靈魂は夢むるが如き浮きたるが如き疾めるが如き狀に陷いるなり、然るに是の如き狀態は眞の祈禱と雲泥の懸隔をなし、東西の背馳をなす者とす。嗟之が犧牲となる者如何に多い哉、

彼等の中には屢其然るを知らずして此に至れる者あるは豈悲むべきの極ならずや。是の如き人々に在ては祈禱は虛浮なる自觀に墮落し去れるなり。其人は自ら信ず我は靈德に進みつゝありと、然れども其實は只是れ鬱憂病者――己れが病める神經より來れる幻影を外界の實境と見做すが如きヒポコンドリア患者――の迷妄を益々增長して自ら欺ける者のみ。祈禱は活動の生を靈ならしめざるべからず、活動は祈禱の生を實ならしめざるべからず。此に在ても、他處に於けると同じく、我等は窄き門に入るために力を盡さゞるべからず、「入らんことを求めて能はざる者おほければ」なり。諸君もし努め禱りて倦まずんば、習慣となりて益々力を獲ん。神のために働くの事は何等といふとも諸君が然か禱るを妨たぐるに及ばず、諸君は繁忙きはまる生活に免かれ難き罅隙

をば間斷なき祈禱を以て之を塞いで可なり。斯く之を諸君がすべて行なふ所に混和せよ。凡て教職を行なはんとするにも先づ、勉學せんとするにも先づ、說教せんとするにも先づ、病人を訪はんとするにも先づ、必らず常に禱れ。此の如き聖事聖物には只今方に神と密かに交はりて靜め淸め高め强めたる靈魂(心)を以てするの外には決して近づくことを敢てする勿れ。然る後諸君は其事務を始むる前に禱りし如く又其事務を行なひをる間にも善く禱ることをせよ、即ち最も繁忙なる執務の最中よりして主の拯救の矢を射あげよ、且禱り且働らけ。凡そ諸君が種蒔せる時には、其說教を以て一面に振まきたるにもせよ、訪問を以て之が活眞理を箇々の胸臆に放ちたるにもせよ、必ず密かに上つる所の祈禱を以て神の語なる種子に灌漑すべし。然る後或る特別なる時間を一層特別なる祈禱のために備へよ、諸君の誕生日、諸君の任職日、諸君の大恩感謝日、諸君の憂愁紀念日等ことごとく諸君に供するに斯の如き機會を以てせんとす。諸君にして斯の如く之を着々として躬行する時には、必

ず祈禱の眞力を獲るに至らんとす。唯如何なる困難に面しても懼るゝ勿れ。之に克たんと決心せよ、然らば必ず克つことを得ん。祈禱に困難おはきは即ち之を常に躬行するの必要なるを示めす者とす、而して此等の困難たるや斷乎として常に禱るの事に伴なふの神恩に由て打克つべき者なり。諸君もし祈禱の時刻に於て祈ることを好まざる心あらば、自ら戒しむることを爲して此の心に克たんとする勿れ、直ちに禱ることを始めて之に打克て。ヘンリ、マーテンは記して曰く、我が心は其最も寒冷なる時に於てすらも我が愛する人々のために禱ることを始むるや屢々非常に熱し來れりと。諸君もし祈禱をへて起ちたる時に、尙も其すでに地に拋ちし浮きたる思想や散りたる想像の纏綿して棄てがたきを感ずるならば、屈して此情に從ふなく、再び跪きて更に幾層の熱心を以て其未だ禱らざるの禱を祈り、諸君のすべて乏しき所、就中祈禱の精神の乏しき所を神の前に打あけて奏せ。「祈禱を恒にし」と聖書(羅馬書十二の十二)に特記せられたるは、此處における我等のために成功の最大

法則にして、決して尋常の閑文字には非ずかし。

諸君が靈敵の誘惑を防ぐの力は亦此に在りとす。請ふ祈禱の精神を祈れ。祈禱するの力を禱れ。祈禱は是れ神の賜物たるや著し。太陽が天に輝きて百花の馥郁たる馨香を抽出するの事も、之を神の御顏の光が善く禱るの人心より其希望の氣息を醒發するに比ぶれば、一層直接の功とは稱するに足らず。諸君の祈禱はすなはち神が直接に諸君に賜ふ所なり、是れ諸君の胸中における神の業なり、諸君の業たる前に先づ神の業たり、是れ神の恩惠が諸君の胸中に働ける者とす、是あるに非れば、諸君は終に未だ曾て一回も禱ることを得せざりしならん。されば恒に神にむかひて禱るべき力を祈れ。求めよ、然ば與へられ、尋ねよ、然ば遇ひ、門を叩けよ、然ば開かるゝことを得ん」(馬太七の七)。

最後に、請ふ諸君の祈禱をして悉く其主の中保たる祈禱に連ならしめんことを務めよ、諸君が父なる神に近づくを得るは諸君の主たる基督に由りてなり、基督の寶血をそゝがれてこそ始めて諸君は神の御前に

出るとを得るなれ。基督は諸君の手をひきて導き入りたまふ。諸君の祈禱は下界に繫がれて、諸君の心の重きがために殆ど天上に向ふては昇り得ざる者なれども、基督これを其中保の手に受けて神の大御前に諸君のために獻げ給ふ、即ち諸君の重き祈禱も基督の代禱に連なるや飄然として直ちに神の玉座に達する也。基督は黄金の香爐を執りたまふ、其中には馨香の類充ち滿てり、是即ち諸聖徒の祈禱なり。彼の叢雲なして立のぼる香煙に諸君の匍匐する祈願は相混じて天に達す。彼れは「已れに頼りて神に來る者の爲に懇求んとて恒に生きたまふ」(希百來書七の二十五)。されば請ふ恐るゝ勿れ。無始無終なる御子の仲保にして其力を失なはざる限りは、悔悟者の最も微かなる私語といふとも一として聽とられざるは無く、一として重んぜられざるは無し。諸君の弱き時落膽の時に於て此事を回想せよ。請ふ此事を思ふて頭をもたげよ。諸君の祈禱も基督の之を受つぎて呈げたまふ時には、萬軍の主たる耶華和の御耳に必ず入らん、而して「汝等は其信じて祈る所の者をことごとく得

法則にして、決して尋常の閑文字には非ずかし。

諸君が靈敵の誘惑を防ぐの力は亦此に在りとす。請ふ祈禱の精神を祈れ。祈禱するの力を禱れ。祈禱は是れ神の賜物たるや著し。太陽が天に輝きて百花の馥郁たる馨香を抽出するの事も、之を神の御顏の光が善く禱るの人心より其希望の氣息を醒發するに比ぶれば、一層直接の功とは稱するに足らず。諸君の祈禱はすなはち神が直接に諸君に賜ふ所なり、是れ諸君の胸中における神の業なり、諸君の業たる前に先づ神の業たり、是れ神の恩惠が諸君の胸中に働ける者とす、是あるに非れば、諸君は終に未だ曾て一回も禱ることを得せざりしならん。されば恒に神にむかひて禱るべき力を祈れ。求めよ、然ば與へられ、尋ねよ、然ば遇ひ、門を叩けよ、然ば開かるゝことを得ん(馬太七の七)。

最後に、請ふ諸君の祈禱をして悉く其主の中保たる祈禱に連ならしめんことを務めよ、諸君が父なる神に近づくを得るは諸君の主たる基督に由りてなり、基督の寶血をそゝがれてこそ始めて諸君は神の御前に

出るとを得るなれ。基督は諸君の手をひきて導き入りたまふ。諸君の祈禱は下界に繫がれて、諸君の心の重きがために殆ど天上に向ふては昇り得ざる者なれども、基督これを其中保の手に受けて神の大御前に諸君のために獻げ給ふ、即ち諸君の重き祈禱も基督の代禱に連なるや飄然として直ちに神の玉座に達する也。基督は黄金の香爐を執りたまふ、其中には馨香の類充ち滿てり、是即ち諸聖徒の祈禱なり。彼の叢雲なして立のぼる香煙に諸君の匍匐する祈願は相混じて天に達す。彼れは「已れに頼りて神に來る者の爲に懇求んとて恒に生きたまふ」(希百來書七の二十五)。されば請ふ恐るゝ勿れ。無始無終なる御子の仲保にして其力を失なはざる限りは、悔悟者の最も微かなる私語といふとも一として聽とられざるは無く、一として重んぜられざるは無し。諸君の弱き時落膽の時に於て此事を回想せよ。請ふ此事を思ふて頭をもたげよ。諸君の祈禱も基督の之を受つぎて呈げたまふ時には、萬軍の主たる耶華和の御耳に必ず入らん、而して「汝等は其信じて祈る所の者をことごとく得

べし(馬太二十一の二十二)

第九講話

聖經の勉學

『汝世と肉に屬ける學問を棄て努めて神に祈り聖書を讀み及び之を知るの媒助となるべき學問をなすや』

（聖品プレスブテロ派立式文）

第九講話　聖經の勉學

基督に於ける兄弟諸君、――今より講ぜんと欲する所は、前回の講話と同じく直接に諸君が外部の職務に關する者に非ず、諸君をして其精神内に（謂ゆる）神の生活を保たしむるの事に關す、――此生活たるや、諸君もし其事業をして或は人に對して好結果あらしめんと欲し、或は己れに對して多福ならしめんと欲せば、之を常に其の身に盛んならしめ勁からしめずんばあるべからざる者とす。

今此に問ふ所には曰く、――

「汝世と肉とにつける學問を棄て努めて神に祈り、聖書を讀み及び之を知るの媒助となるべき學問をなすや。」

此は是れ聖職志願者にむかひて聖書の事につきて問ふたる第二の問なり、而して諸君の此誓約の意義たるや諸君が既に立てたる所の誓約と此誓約を比ぶるならば、庶幾は之を審かにすることを得ん。第一の問

『汝世と肉に屬ける學問を棄て努めて神に祈り聖書を讀み及び之を知るの媒助となるべき學問をなすや』

（聖品プレスブテロ派立式文）

第九講話　聖經の勉學

基督に於ける兄弟諸君、――今より講ぜんと欲する所は、前回の講話と同じく直接に諸君が外部の職務に關する者に非ず、諸君をして其精神内に（謂ゆる）神の生活を保たしむるの事に關す、――此生活たるや、諸君もし其事業をして或は人に對して好結果あらしめんと欲し、或は己れに對して多福ならしめんと欲せば、之を常に其の身に盛んならしめ勁からしめずんばあるべからざる者とす。

今此に問ふ所には曰く、――

「汝世と肉とにつける學問を棄て努めて神に祈り、聖書を讀み及び之を知るの媒助となるべき學問をなすや」。

此は是れ聖職志願者にむかひて聖書の事につきて問ふたる第二の問なり、而して諸君の此誓約の意義たるや諸君が既に立てたる所の誓約と此誓約を比ぶるならば、庶幾は之を審かにすることを得ん。第一の問

〔五十六頁を見よ〕に於ては諸君は聖書を以て信仰の究竟なる金科玉條となすや否やを問はれたり、即ち其問に云く、——

「汝聖書はイエス、キリストを信ずる事によりて永遠き救を得るに必要なる凡ての教義を載すると堅く信ずるか、——又は其聖書に示されたる事によりて汝に托られし民を教へんと決心しや」。

されば彼の問は是れ諸君が教へんとする所の者の材質に關せり、是れ諸君が教へんとする所の者の何なるかにつきて諸君に證言を徵したるなり、即ち是れ諸君をして人間の案出せる妄談奇話を棄てゝ純粹無雜なる神語を教へんことを誓約せしめたる者なりき。因て同一の問を單に少しく文字を取舍して、亦た會吏志願者に向ひても反復したるなり、

抑も會吏の特別なる職務は會衆の前に聖書を朗讀するに在りとす、故に會吏は其自ら聖書を信ずることとの何如を問はれ、其之を群信徒の前に讀あぐる精神の何如を問はれたり、然れども今日我等が講ぜんとす

る所の者に當るが如き問は會吏の職を志願する人々には之を呈する無し。而して監督の派立式文中には此の問幾分か更に詳かなる者となりて再び出づ。此の如く此問が高級の聖職員に限りて與へらるゝを見れば、其目的の特別なる者たるは推知するに難からず、如何となれば是れ聖職務中會吏に托すべからざる部分に關係する者なれば也。會吏は聖書を會衆の前に讀むべき者にして、監督より特別に許されたる場合に非れば說教するを得ず。之に反して會長は說教することを判然と委托せられ、且「神の語を施す者」たらんことを特に命ぜらる。是に於てか會吏志願者に獨り與ふる夫の單純なる問に加へて、今斯くは會長の委托せられたる新權力に關する此の問を呈する也。故を以て此問たるや、嚮に我等が講論したる會長の誓約——諸の謬見と異端を驅除し、公私の警戒と勸話を其の信徒中に施こさんとの誓約——に自然に續ぐ者とす。されば此關係に於て本發問の精神は如何なる者ぞや。是れ會長自身が說教師としての資格に關する者なるや疑ひを容れず。彼は既に聖書

に本づきて人を教へんことを誓へり、彼が遵奉すべき教育も既に決定せり。加之、彼はまた此宣教事業をなすに勇敢勤勉謹慎ならんことを約せり、――但し彼如何にせば聖書に本づきて人を教ふることを得べきや。曰く、聖書を己れ自ら善く知る事に由て、――己れ自ら聖書の言を曉りて身を益するを得るやうに神の御靈の助を常に求る事に由て、――聖書の隱れて見えざる意味の奥底に究め到るを妨たぐるが如き精神の惡癖を防ぐ事に由て、此の業は庶幾ふべき耳。是すなはち此の問の趣意にして、諸君は則ち此の事を誓約せんとする者なり。是れ直接に諸君が靈魂の内狀に關する者にして、只間接に諸君が教誨の外狀に關する而已。今は諸君にむかひて、「汝は聖書に本づきて人を教へんとするか」と漠然重ねて言ふには非ず、一層切に問ふて曰ふ、――「諸君は今より神の語を施こす者とならんとすれば、果して善く之を施こすことを得るやうに然か進退去就行住言動せんとするや」と。監督聖成式文中に此の問の重ねて出るを見れば、此の義は更に幾層の明瞭を致せるを覺ゆ。即ち

彼處には問ふて曰く、

「汝は全く良き教理を以て教へ且勸め、反對者を防ぎ、又之を服さすることを得る者とならん爲に、自ら信實に聖書を攻究し、之を眞に了解る爲に祈禱を以て神に呼求めんや」。

此に在ては其問の旨義一目に瞭然たり、是すなはちマラキ(馬拉基書二の七)が謂ゆる「祭司の唇には須く知識あるべし」なりとす、但し斯の如く知識を持つの力は其れ自身亦これ或る一種の靈境に在るの結果ならずんばあらず。因て我が教會は問ふて云ふ「汝は神の恩助によりて該の靈境に達せんことを望み得るが如くに自ら勤め行なはんや」と。

偖此事は最も大切なる研究問題を我等の前に開く者なるが、其問題たるや亦我等を驅て其今此に誓約せんことを要めらるゝ所の事を如何にせば忠實に盡し得べきかを曉らしむるに與かりて大いに力あらんとする若干の考察に達せしめんとす。即ち左の問の來りて此に我等に接するあり、云く――忠信と不忠信とは、神の語の頒施者として之を見

れば、如何ほどまでに基督教會の教師の內行と靈德(靈境)とに關係する者なるやと。寔に是れ此職を求むる人々に取りて畏るべき問なりとす。請ふ試みに其達する所の如何に遠きかを見よ。時としては說者ありて言ふ、俗信徒にとりても同く罪ならざるが如き事は敎師にとりても亦罪ならずと。斯の如く敎師の標準をみづから卑めんと欲する人々は逆に推論す。彼等はすなはち論じて曰く、「某々の遊戲——例へば遊獵打毬等の遊戲は、其度をさへ過ぎざれば、俗信徒の身にありて毫も罪となる者に非ず(他點に於て其人もし善良なる者ならば)、されば是また安くんぞ敎師たる人の身にありて罪となるべけんや」と。

偖是の如き疑問は其數甚だ多く、甚だ實際的なる者にして、其中の或る者は、單に其物自身において見るときには、一方ならず面倒なる者なるが、是等一切の疑問に對する其最も深き最も眞なる解答は、我おもふに是れ我等が今此に講じつゝある所の眞理中に存す。請ふ敢て問はん基督の役者の職の最大眞面目を構成する者は何ぞや。是豈に將に來らん

とする世の權力を眞に握る者に非ずや、是れ豈眞箇に靈職なるに非ずや、而して其靈なるは、唯に靈なる事に關はるに因て然るのみに非ず、亦其若し正しく之を盡さんとせば、神の莫福なる御靈の權能ありて基督の役者が基督の名を以て執り行なふ所の外行に伴はざるべからざる者なるに因て然る者とす。不信者は笑はゞ笑へ、基督の敎會には依然として眞に此等の權能あること今も昔に異ならざる也。聖靈は該敎會に宿りたまふ。聖靈が終まで現前せんことは基督の言を以て約せられたり、而して基督の言は爽はず。彼の約は千古渝ること無し。訓慰師は、其の世間と偕にをらざるが如く、我等とは偕に居り、我等の中に現前したまふ。但し特別現前の約束を以て神は果して如何なる義を我等に示さんとしたまふなるや。確かに是れ神は我等の弱きに枉げて從ひ、故らに我等の言語を用ひたまふと言ふ也。形體を以て現前するの事と、事業を行ふの力とは吾人に對しては甚だ相似たる者なるが故に、吾人は自然に此等二者を聯想す、——是の如く、神その我等の心中に必ず其働をなさ

んことを我等に信ぜしめんと欲する時には、元來其神性の然らしむる所として宇宙に遍滿する者なるにも拘はらず、其教會の聖職中にありて特別に我等の中に現前す(我等と偕に居る)と自ら宣まふ也。然らば神は基督の教會に在て如何に働きたまふぞや。確かに是れサクラメント、及び謂ゆる施恩の方法を以てする者、其特別なる職務を行なはしむる活聖職員を以てする者、其役者(教師)を經て彼等(役者)が牧する人々の靈魂を感化する事を以てする者、彼等を己れの機械として之に由て働くの事を以てする者なりとす。但し斯く役者を以て事をなし給ふ時にも、或時は單に職務の執行上これが手を借りたまふ而已にして、彼等が神の旨にしたがひて行ふところは即はち神が自ら行ひたまふ者たるあり、――例へば會師がサクラメントを執行する時、または悔悟者に解罪を宣言する時のごとき是なり、是の如き執職の効力には會師の聖不聖は與かりて輕重をなす者に非ず、又障碍をさしはさむ者に非ず、如何となれば此等の件々に於ては會師(主の役者)は只機械として之をなせる

のみなれば也、凡て忠信に之を受くる人々には神その祝福を加へたまふ。然し乍ら此事は彼等(聖職員)の所行に悉とく及ぶ者に非ず。神は其僕を單に若干の職務を執るの機械として用ひたまふのみに非ず、亦彼等が精神と靈魂の力を以て彼等の諸兄弟の精神と靈魂とを陶冶せんとを計りたまふ。是すなはち彼等をして神の語の頒施者たらしむる所以なりとす。神の語は教師の智力および靈力を以て活用し施行し解釋して人心に徹せしむるを要す、神は教師の是等の力に由て感化の工を施こしたまふ。是を以て彼等の靈職は行用の宜きを得たる時には彼等をして聖靈の協同を得せしむる者にして、勿論其すべての功果および勢力は此より生ず。此の奇異なる賜物あるに非れば、如何にしてか此の人の精神あるひは靈魂彼の人の精神または靈魂を感化して神に歸向せしめ、聖德を希求せしむるを得んや。然るに人間の執職上に此の力ありて存するは他なし人を以て人を教化せんとの事是れ神の救世法なれば也。キリストの教會の創立せられてより以來此事は常に是の如く

なりしや一目に瞭然たり、新約書其物の大體も實は神が最も大いなる度にて、人々の精神と靈魂とを斯の如く感化し、彼等を以て又他の人々を順次に漸々と感化したまひし結果なる耳。固より四福音書にはキリストの御言充みてり、然れども四福音書に於てすらも其大半は、而して又使徒書翰(イヒスル)は悉皆、是れ聖徒の靈魂が神の御靈を強く感じて吐露した る言辭なり。是の如く發言の機械となれる人の靈性行が其人の口より出でゝ吾人に傳れる默示天啓を形塑し徧く薫染したるを發見す。是に於てか神の智慧が聖ヨハネ、聖ペテロ、聖ヤコブ、及び聖パウロの口を以て吾人に垂たる訓誨の相互に著しく其口氣を異にせるある也。天啓は一般に通ず、眞理は一のみ、然れども其活用、其辭氣、其種々なる人物の需に應ずるの力、其直接の感化力等は最も千差萬別なるを見る。而して是等の人々――直接に神の感動を蒙りて天下萬世のために一切の神感の模標たる人々――の身に於て吾人が斯く最も明かに看る所の者は、實に亦イエス、キリストの忠信なる各役者の身上に幾分か反復せらるる也。各役者もまた其職に任ぜらるゝ事に由て「神と、ともに勞く(はたら)者」となる、――彼もまた其パプテスマに由て彼(か)の來らんとする世の諸大權能の眞中に活ける靈魂として携へられたる者なるが、今や神の大恩に由て聖職に任ぜられつゝ、其身は靈なる祝福を他の人々に傳ふるの媒(通路)となりぬ。彼も亦他の靈魂を鼓舞すべき者にして、神の吾人を提醒し說服し感化し啓發し潔淨する御靈(みたま)今や彼が口を經て呼吸せんとす。聖靈今より彼が口を借て說く所あらんとし給ふ。其奉ずる道の大本に關するだけは別に何の新默示をも得ず、又實に之を要せずと雖も、彼の大本たるや初よりして聖書の中に明記せられありと雖も、諸信經及び綱領の中に解釋せられ、キリストの敎會の活靈覺心中に保持せられ、必要あるに隨ひて該靈覺心中より新に拈出せらると雖も、然るも尙彼は其身を以て之を一種の新らしき物として他人の面前に呈出せずんばあるべからず。聖靈彼れの靈魂を庇蔭し給はん、彼れが靈生活は其衝突に際し其希望に際し其恐怖に際し其恐怖に際し其歡樂に際し、訴陳となり敎說となり

第九講話

警戒となり慰藉となり訓誨となりて發露し來らんとす、而して鏡に於て面と面とが相照らすが如く、聽聞者の靈魂は神の語(ことば)の忠僕(忠信なる敎師)を鏡として之に向ひて自家の覺心を照し來らんとす。是すなはち基督の敎會における敎師の任なり、是すなはち我が主の昇天の結果なり、五旬節(ペンテコステ)の賜物なり、——「彼れ上(うへ)へ昇りし時に賜物を人に賜へり、……其賜ひし所は使徒あり預言者あり傳道者あり牧師あり敎師あり」(以弗所書四章八及十一節)。是すなはち預言者の任なり、是すなはち預言者の力なり、——親愛する兄弟諸君、是すなはち預言者の責任なり。諸君が今志願しつゝある職には實に斯の如き重大なる資格ありて屬す。諸君もまた預言者たらざるべからず、或は僞預言者或は眞預言者たらざるべからず、——即ち或は心中の聲を打消して益々虛謊の事を預言するの預言者たらざるべからず、或は眞實の事および正義の事を預言して、世の終に我等の主より眞實と正義の宣傳者と認められん預言者たらざるべからず。此思想皆て諸君の胸中に浮みし事あるや、或はまた、衆多の

第九講話

人が思ふことの極めて明らかなるが如く、諸君もまた竊かに思ふ乎、基督の役者たるの職を求むるは、是れ只若干の事務を擔任する者、或は最も善くとも、只是れ若干の智力的奮發をなさんことを誓ふ者のみと、而して其身が斯く預言者の麁服を纏ひ、預言者の險難を與かり受くる者なるを全く知らざるや。

然し乍ら預言者の職は其もつとも肝要なる品性に於ては如何ぞ我等の職に異ならんや。預言者をして神は其兄弟を誨へしめたまへり。固より時としては神靈預言者を執へて之に由て人々を誨へたる事なきに非ず、是の如き場合に於ては其預言者は單に神の聖語を口に發するの機械たりし者の如く然り。されども此事は必ずしも恒に然りしには非ず。聖ヨハネ、聖パウロ、聖ペテロ、聖ヤコブ等が書きたる物の間に於けると同樣なる差別異同はまたエゼキエル、エレミヤ、アモス、イザヤ等の預言中においても存在して、舊約の天地に於ても亦、我等が基督敎會內の聖著者の場合にて已に論じたるが如く、天の使命が之を宣傳する下界

の機械(即ち預言者)の爲にそれぞれ相異なれる特色を以て色づけらるゝに至りし事を明らかにす。抑も神靈が預言者を全く占得したる時においては、其人が口に發する所に關するだけは、不忠信の行爲を容るゝ餘地なき者に似たり。バラムも神の御靈が彼を掩ひし時には、其預言せし所の眞實なりしことイザヤの眞實なりしに讓らず。サウルもまた預言者の中に在て預言せしことサムエルに異ならず。僞預言者は其他の諸點において――即ち人間の元素が聖靈の感動力と混和せる行動上において――馬脚を露はし來れり。然のみならず僞預言者の欺妄は彼が直接に其使命を故らに枉げたる處に存するに非ず、其本色は彼が人を欺むけるのみならずして又己れを欺むける處に存すと見ゆ、――即ち是れ神の聲が右を言ふを知りつゝ故らに枉げて左を語るを謂ふに非ず、自ら其內心の知覺において眞僞を全く混同するが如き狀態に已に陷りて、虛妄を其虛妄たるを知らずして吐くが如きを謂ふ者とす。此事は聖書中なる數多の言辭に徵して明かなる也。云く、「神の日に至りて

預言者は異しむべし」と(耶利米亞四の九)、是すなはち彼等が預言せしところの當らざるを怪しむ也。又云く、「預言者は虛誕の默示と卜筮と虛しきことと己れの心の詐を預言す」、――云く、「彼等はヱホバの口より出ざる己が心の默示を語るなり」(同書十四の十四、及二十三の十六)、――云く、「汝の預言者は虛しき事と愚かなることを汝に預言す」、……「其預言するところは惟むなしき重荷となるべき事のみ」(哀歌二の十四)と、是みな彼等が其吐きたる所の事どもの虛妄なるを知らずして眞に之を默示せられたりと信ぜしなるを暗示する者とす。是故に又說て曰く、「彼等は空しき異像を見る」と、而して其理由としては記すらく、「彼等虛僞の物を見るによりて」云々と(以西結書十三の七、八)。否な是等よりも更に幾層强き言ありて存するを見る、すなはち聖經の中に明言して曰く、「若し預言者欺むかれて言を出すことあらば、我ヱホバ其の預言者を欺むける也」と(以西結書十四の九)。

是みな僞預言者の身において如何なる種類の虛僞を指す者なるや、曰

く是れ故意に眞を僞に枉げたるを表するに非ず、却つて是れ預言者が先づ自ら欺むかれて然る後に他人を欺くを表する者と謂ふべし。

我等もし彼等が如何にして斯く自ら欺むかるゝに至りしかを尋ぬるならば、忽ちにして釋然たる所あらんとす。眞預言者は彼等を責て曰く、彼等は其神の意と知る所の者を直接に犯したりと。斯く姦淫、醉酒、殘忍、利慾等は彼等を惑はして此の暗黑の境に陷いらしめし原因と算せられたり。彼等の預言力は斯く蠱惑と化して彼等を滅亡の淵に誘なひしも也。

此事にして特に記載せられたる例一ならず、意ふに此等の例を推し究めなば我等は蓋し此墜落の次第を知ることを得ん。

彼等の心眼よりは、例へばサウルが罪を犯せし時における如く、初は先づ其賜はれる通力を減じ、然る後まつたく之を失なふに至らんとす。主はウリムとトンミムに由て應ふることを止めたまふべし、而して其人はその苦難にあたりてや或る他の手段を恃みて己れが欲する應答を

賜はらんと計るに至らん。即ち彼は或は自然の激發を賴みて之を天の指敎と誤認せんも知るべからず、――或はバラムが爲したりと見ゆるごとく、奄々たる靈氣を鼓舞せんために「法術を求め」調伏を賴まんと試みたり。一方に於てはバラムの場合を見、他方に於てはエレミヤの場合を見れば、此眞理は極めて明瞭なるに至るを覺ゆ。バラムが利を欲するの念は甚だ强くして、彼が全心を歪ましめたるを我等は見るを得ん、而して又、エホバの御靈暫時があひだ、或る特別なる目的のために、彼を强ひて眞の預言をなさしめたれども、如何に彼は、彼の時にさへも、速かに其大誘惑の陷阱に飛入らんとせしかを我等は理會するを得ん。彼は神の靈に强く制せられて實際に預言したる所と全く反對なる事を實は言はんと欲したるを我等は見る。彼自身が利慾の聲如何にも嚣々として神來の辭と並び響きたれば、彼が神の機械となりてイスラエルを祝し居る間にすらも、其人自身は預言者たるよりは寧ろ陰陽師たるの觀ありと我等は感ず。彼が心中より眞理の聲は漸々に死うせて、虛誕の聲

只獨り殘らんこと必然の結果のみ。

エレミヤの場合においては是れと正反對の行徑を見る、――エレミヤはユダの王がエルサレムを出でゝ其敵に投降せんといふ事を神よりの直接なる使命として啓示せられたり。此の眞實を吐露したるがために最も強き憎惡を彼は招けり。是に於てか彼をして其帶べる使命を曲しめんため又は措かしめん爲に、爾來百方或は賺し或は威して、順次に彼を誘なはんとこそは試みたれ。エレミヤはその默示或は異象を再三受けしとは見えず、然れども一たび之を受けたれば復た渝はること無かりき。世慾に戀々たる輩ならば卑陋の心術をほしいまゝにして終には全く神の眞使命を掩翳するに至らんとするが如き誘惑物今やエレミヤの眼前に堆かかり、然れども彼は其中の何物にも心を動かさず、――王の宮殿にありて或は威し或は誘なふ王侯の使命に接しても、――即時に殺さんとの怒聲耳にひゞきても、――ハンメレクの子マルキヤの庭の土牢にて泥に深く打しづめる時にても、彼が心は堅固なること

鐵石のごとくなりき、彼が預言の靈はいつも明かにして淀み無く、虛妄の異象はつひに一回も彼が心を欺むくことは無りき。

是に由て觀きたれば、預言者の境遇は其要點において悉とく是れ我等の境遇なること如何に明らかなるぞや。神の眞理は其かれらに傳へられしごとく我等にも亦傳へらる。此の眞理はこれ我等が兄弟に宣べざるべからざる神の使命たるなり。此の眞理たるや預言者の場合に於けるが如く、之を傳ふる御靈の直接なる感動によりて其人の心に入るとも、又は我等の場合におけるが如く、同じき御靈の敎によりて聖書の中より學で知らるゝとも、何も別に大なる差別ある者に非ず。古への預言者は第一には其言ふべき事を言はざるやう、而して終には(夫のベラルに住める預言者がヤラベアムの偶像禮拜の盛んなるにも拘はらずして其處に止まりをれりと見ゆるごとく)神の聲をして己が胸間に全く喑啞たらしむるやう、動もすれば世間の芳餌に誘なはれんとす、――或は又た人に歡こばれざる使命をば之を傳ふるにあたりて幾分か之を

軟らげ若くは曲ぐるやうに誘はれんとし、或は行なふを許されたる罪、若くは平素の温柔、及び人間の寵遇を愛するの情等預言者の心を暗くして、遂に眞實を虚妄と分別する克はざるまでに盲せしめんとせり、而して其人この誘惑に負けし時には僞預言者となりぬ。斯の如き人は其道德上の試煉に失敗したる者にして、其失敗やがて彼をして其貴き賜物を妄用せしめ、遂に僞預言者てふ特別の罪に陷らしめし也。此の事若し果して然らんには、我等もまた正に彼等の行路をたどりて同じき沈淪の淵に終に臨むの恐如何に多き者ぞや。何を以て然か言ふや、他なし、我等もまた我等の日において彼等のと同じき危險を防がざるべからざる者なれば也。罪慾と世慾あるひは我等の目を暗まして天の光明を見わくること能はざらしめん、我等の帶る使命を宣ぶるの障碍多きや我等を驅て其使命を棄て若しくは枉しめつゝ終に或は我等をして盲啞の流たらしめ、又は神が我等の口に授けたまひしと全く異なる使命を識らず知らずに宣ぶる者たらしめん。而して此の怖ろしき零落は無

害なる平常の聖職と見ゆるが如き者の眞中にありて、遽かに我等に迫つかんも知るべからず。固より我等は僞預言者と看破せらるゝに遇へば、悚然として後に飛のかんとす、然れども兄弟諸君、畢竟何物か斯の如き墮落よりも容易なる者あらんや。恐らく我等は神の使命の重荷を天下の兄弟に擔ひ往かんとの眞の願望を以て聖職に就けるならん、先づ伺がひ祈り、聖書の語を學ばん、我等の說くところには幾分の感激あらん、我等の牧する群信徒中には幾分の力あらん、は此の部分に於て嫌はれん、彼の眞理は彼の部分に於て忌まれん、因て我等は之を軟化せん、或は後まで之を說くことを延さん、是の如く我等の聲は益々曖昧なる者となり、益々弱き者となりて、最早人の氣にさはるが如き事なからんとす。多分我等は其群信徒に好かるゝ者とならん、其食膳に屢招かれん、其禮遇を身にうけん、而して之を成功の徵として得々たらん、是れ此事のうちには毫も吾等の猜疑を惹がごとき事なければ也。不規則の我等を駭ろかすが如き者は一として無からん、却つて

第九講話

此の誘惑は其外部の職分を盡すに最も規則たゞしき人々を特別にも圍繞する者とす、如何となれば、其職掌を盡すに斯く規則正しくして外面に儀式を全たうする事は、我等をして其群信徒の眞心を靖めしむるに必要不可缺なる者にてさへもあらんとすれば也。彼等(群信徒)は預言者をして己れ等の中に住しめんことを欲す。彼等の宗教的情願は是の如き穩和の刺激を要むる也。彼等もし神の見證者をことごとく己れ等の中より實際驅逐し去りたりと思ふならば、惴々焉として恐懼の念を惹起し來らんとす。故を以て昔しイスラエルの至惡なる王たちすらも預言者を其身邊に有せんことを欲して、多くの預言者を其宮に宿し其食膳に招きし如く、彼等(群信徒)もまた或る預言者ありて己れ等と偕ならんことを願がふ、唯彼(預言者)が甘言蜜語を用ひて彼等の聽かんと欲するが如き事のみを預言せんことを欲するのみ。但し此事たるや、殘念ながら眞に是れ古來衆多の眞教師の歷史なりとは雖も、畢竟これユダの僞預言者輩の故轍に非ずして何ぞや。此の如き行爲は、其教會信徒の

眞正の靈品性を卑うするの惡結果を呈する者なるに於て、――又キリストの使者の靈眼および預言力を全く掩蔽するの惡結果を呈する者なるに於て、如何でか是れ彼の昔し神の義怒を惹き起しつゝ神をして――我エルサレムの預言者の中に憎むべき事あるを見たり、……彼等は惡人の手を堅くして人をその惡に離れざらしむ、彼等みな我にはソドムのごとし」――と畏こくも言はせ奉りし所の者に異る所あらんや(耶利米亞記二十三章十四節)。

譬ふ又暫く他の一例を擧て論ぜん。少年の人は先づ神の御聲が己れを召たる所の者の偉大なる事を活潑に感ずるの念を以て其聖職に就任す、其十字架の天に靡がへるを見るを許されたり、衷に住む罪の重荷に惱み呻けり、而してカルバリの麓にて其重荷を解かることゝを得たり神の御靈は彼を覆ひつゝあり。彼はその多福の使命を諸餘の罪人に傳へんことを切望す。彼は人々が罪と禍に沈淪するを見、之を救はんことを願ひて告て曰んとす、「神汝等を愛したまふ、神汝等を救はんと欲す、救

主汝等を救はんと切に望みたまふ、歸れよ、歸れよ、汝等なんぞ死なんとするや」と。彼は多分此の精神を以て、眞の預言者として其聖職に就けるならん。されば彼は其の牧する信徒のためには何事をかなさゞらんや彼等の中の最も惡き最も陋き者のためにも其主は寶血を流したまへり。主の僕たる者は是非とも彼等を愛せざるべからず。此の如き教師、其勞き且禱り、聖書の奥義妙理中に棲遑する時には、神の聲恒に其人より逃出して周圍の諸人に波及せんとす。彼もし此精神を長く持たば、日々に德に進み、益々深く謙り、己れの罪を見ること益々明かに、慈愛に愈々富み、神の眞理を愈々廣く知るに至らん、而して是等の諸德衆美は、聖靈の力に由て、彼が神のために立つる證をして必ず幾層剛膽ならしめ、幾層十分ならしめ、幾層善く諸の變化に適せしめ、幾層敏慧ならしめ、幾層確乎たらしめ、幾層可愛ならしめ、幾層有功ならしめん。彼はエヽヤがアハブの前に立てるが如けん、エレミヤがユダのために太く哭くが如けん。然し乍ら此の初期の熱心は長く保たざるを奈何せんや。彼が熱心は

或る人々の――多分彼が先輩たる同僚衆の――冷々然たる職業的の儀式、および愉快らしき世間的なる格言のために冷却せん、又は或る誘惑かれに打勝たん、肉情かれを誤らん。殆ど目に入らざるが如き歩履を重ねて彼が一身の宗教(信仰)は衰ろへん、或は又虚榮および私慾勃興せん。彼が密かに禱ることは稀にして且冷淡なる者とならん。彼が内心にて其主と交はる事は絶えん、聖靈の働は止まん。彼は外部においては多分舊のごとくに行なひて渝らざらん、否な單に外面の禮式を守ることに於ては却つて以前よりも嚴ならん、説教するに當りては今までよりも一層熱心ならん。彼は斯く其嘗て彼が心中にありて神の眞箇の働たりし者の此等の殘喘を一生懸命に握らん而已。然れども彼は徹首徹尾只是れ自ら欺むける而已。何となれば、是豈七つの壇を築く者に非ずして何ぞや、是豈七の牛と七の羔を殺す者、却つて表裏に神の御靈を宜く充たさるべき人に由りて法術を行なはんと求むる者にあらずして何ぞや、此の如き人の狀態は僞預言者の狀態にあらずして何ぞや、今は既

にエホバより何の異象をも賜はる無く、其衷心には神の働すでに消え、其預言の力はすでに虚偽に化しをはりぬ。兄弟諸君よ、嗟是れ何等の龍頭蛇尾ぞや。太陽の光の滅したる者も豈これに比すべけんや。是の如き睡眠よりは何れの日か醒むるの時あらんや。嗟他人にむかひて教を説きたる我等如何ぞ自ら丟らるゝに堪んや。嗟誘惑にあはん時、――肉の強からん時、若くは世が惑はし、己が自咬かさん時に、大審判者の顔と不盡の刑罰を一目なりとも見んこともがな、カルバリ山上の十字架を、釘にて衝とほされたる御手を、槍にて刺されたる脇を一目なりとも見んこともがな。嗟左の件々を回想して一たびなりとも胸をとゝろかさんこともがな、――嗟われ其みづから敵に交したてまつりし者を如何にしてか仰ぎ瞻るを得んや、彼れの御手を按かれ、彼れの御力を賜はれる此の我や、如何にしてか汝「罰せらるべき者よ去れ」といふ叱咤を彼より聞くに忍びんや。嗟、大口を開ける地獄、熄えざる猛火、眞暗の牢獄、永く死なざる蛆、底なき大淵、超ゆべからざる墻、止むとき無き叫喚ありて我を

待ちつゝあるに、而も我を援くべき者も無く、我を抱きて救ひ出すべき者も無く、我ために中保すべき者も無き」が如き悲絶慘絶の境遇には我其れ如何にしてか陷るに堪へんや。

されば本問題は蓋し此に歸着す。――神の使命が由て以て各人に傳へられたる預言の職は尚活きて基督の教會に遺存す。是れ卽ち聖靈なる神が衷に住み、眞理の御靈が其約せられしごとく、現前して罪と義と審判とを世に會得せしむるの結果なりとす。諸君は彼の預言の職が由て以て盡くさるべき機關たらんとす。諸君の活靈魂は聖靈の此の働を受授するの具たらんとす。されば請ふ看よ、諸君の責任は如何に大なるかを看よ、僞預言者を誅せる禍殃は一々ことごとく我等の身にも亦適中す。然り、神が我等と偕なることは昔日よりも幾層親密、幾層常住なる者なるが故に、我等の罪罰もまた古人のよりは却つて幾層直接にして又幾層怖ろしき者と謂はざるを得ず。

さらば我等の防衛は何に在るや。是れ我が教會が慈眼愛腸を以て我等

の需を先見して此に我等の前に掲げたる者にあるや疑をいれず、――即ち其問に曰く、

「汝等努めて祈禱を爲し、聖書を讀み又之を知るに補助となる事物を學びて此の世と肉の雑慮を棄るや。」

此の三重の防衛を怠らざる間は、庶幾くは神恩によりて、安全なるを得ん。

第一に我等は努めて禱らざるべからず。努めて禱ることを以て我等は第一の干城とせざるべからず、是れ斯く爲すは神に投ずる者なれば也。我等は確かに、常に、最第一に祈禱の人たらずんばあるべからず、我等は其守るべく立てられたる人々のために恒に禱ることを要す、是れ聖靈たる主彼等の耳を開きたまふに非れば、我等の禱るところ徒勞ならんとすれば也。我等が彼等を愛すること又彼等を守ることを最も善く學ぶは彼等のために禱る時に在り、我等は祈禱を以て最も善く彼等を助くるを得る者とす。又我等自身のためにも如何に我等は恒に禱ることを要するぞや、――我等は己れの既往および現在の罪愆、怠慢および無知が聖靈を全く苦しめて之を我等の心中より驅りつゝ、我等の胸中を不毛の曠野に變じ、我等の心眼をして盲せしむるが如き事なからん樣基督のために、又基督の深愛に由て、禱らずんばあるべからず、我等の靈魂が潔められて神を愛するを得んことを禱らずんばあるべからず、我等の預言者たる職を善く盡すことを得るに極めて必要なる堅忍、沈勇、智慧、活眼、慈悲、愛憐、勤勉、用心等を賜はらんことを禱らずんばあるべからず。

親愛する諸君、我が教會が其役者たる我等のために規定する所ありて、斯くも我等をして祈禱の人たらしめんと務めたるは偶然に非ず、如何となれば是なきときは一切の者枯死し、此等の爽かなる露饒かなるときは一切の者新綠芊々として生長發育すれば也。我等もし眞理を曉り且傳ふるの力を我等の心中に活潑ならしめんと欲せば、カルデア朝廷の威嚴も官職も其預言の至高至大なる靈眼を鈍らする能はざりし夫

の偉人に倣はざるべからず、是は彼れ「面を主エホバに向け斷食をなし麻の衣を着灰を蒙り祈りかつ願ひて求むることをなしたれば也(但以理書九の三)。

第二に、我等は善く禱るの常行に加ふるに神の言(聖書)を深く恒に研究するの事を以てせざるべからず、是れ我等自身の德を長養せんが爲なり。是れ他人のためにする表面ばかりの讀誦を謂ふにあらず。我等若し其の讀誦を單に此に止めなば、我等の目的をして水泡に歸せしむるの外なからん耳。すなはち我等は遂に淺き虛しき自轉機械となりをはらんとす。我等もし其靈魂をして常に天と交はるに適する者たらしめんと欲せば、日夜彼の活る泉に浴せずんばあるべからず。是の如くにしてこそ始めて我等の務むる聖職は我が既に委しく諸君に語りたる如く範圍濶大なるべく、我が說く所の敎は種々の眞理大小輕重相和諧して琴瑟の調あらんなれ。此にては代用を許さず。天下最良の書も神の聖書とは相去ること啻に雪壤のみならず。唯聖靈の冥助によりて月々に聖

書を研究してこそ始めて我等は其聖職にますます熱し愈々强くならんなれ。聖書を啻に之を以て人を敎へんために讀むのみならず、又己れを益せんために學びてこそ始めて我等の敎誨力は幾分か完成する者なれ。聖書の大海に浮ぶに當てや我等は其の僻見と先入とを離れ、狹き岸邊の霧や岩を遠ざかり、獨り神とともにありて能く神の慈悲の絕大なるを無礙に觀望す。然り、大山の如き潮に乘ずる者は「エホバの奇しき御事跡を海に見る」なり。

但し第三には、又之に加ふるに「世と肉との雜慮を棄る」の事を以てせざる可らず。此事たるや我等のごとき人間には頗る難き事なりと雖もエホバの預言者たらんと欲する者には最第一に必要なりとす。是の如き肉情的なる雜慮は目を昧まして神の眞理を見る能はざらしめ、耳を鈍くして神の警戒を聽く能はざらしめ、舌を結びて神の命を自由に說く能はざらしむ。猶太人すらも此の大必要を能く認めて明言しけらく「預言は唯智慧と德行とに大なる人に宿る而已、是の如き人は世事におい

第九講話

て其感情に克たるゝに非ず、却つて其知識を以て、恒に其感情に克つなり。是の如き人の頭上に聖靈は降る、是の如き人の靈魂は天使に繞み、全く豹變して別人となる」(マイモニデス Maimonides)と。此の文を或る他の人――己れが人々に薦むる所を多福の經驗に由て自ら善く味はひ知れる人――引きて敷衍して曰く、「聞く預言者たちは其直接に啓示せられたる所の事を探り索め且推し尋ねたりと、言こゝろは彼等神の默示の靈光をして常に通ぜしむべき道を開きおかんことを學べる也、其の靈魂をして世間の有罪なる感情のために煩らはされ羈されしめず、神の御靈の聲の善く聞え得るやう精神を靜めんことを務むる即ち是なり」と(大監督レートンの註彼得前書一の十を見よ)。

主に在て親愛する兄弟諸君、此の如き生活に今上り入らんことを切に努めよ、合法の事件をしてすらも諸君を引きて之を下らしむる勿れ。請ふ神の前に立て、諸君が救主の十字架の下に默想瞑禱せよ、救主の重負の中諸君が負ふべき分をば穩和なる決心を以て負へ、世と肉との煩惱

および雜念をば聖靈の恩助によりて及ぶだけ脫離せんことを祈り且努めよ。是の如き生活は固より多勞克己の警戒および用心を要す、然れども其報賞は此土にて早くも來り始めんとす。――先づ神諸君のまはりに現前したまはん、刺し貫ぬかれたる御手諸君の頭上に伸されん、聖靈つねに諸君のうちに宿らん。多勞の生活なりとは雖も、其の勞は忽にして終を告げん。主は恒に宣まはく、「視よ我は速かに至らん」と。嗚呼忠僕にとりては是れ何等の大時期ぞや。長く待ち、多く勞し、久く悲みたる所は消え、萬の歡喜とこしなへに在らん。勝をうる者には我さきに勝を得て我父と偕に其寶座に坐するが如く我と偕に我が寶座に坐することを許さん」(默示錄三章二十一節)。

第十講話

群信徒の模範

『汝は汝の家族をキリストの教義の模型にいれ又力の及ぶ限り己と彼等をして共に基督の群羊の良模範とならしめん事を務むるや』

（聖品プレスブテロ派立式文）

第十講話　群信徒の模範

我が派立式文（任職式文）中に在て我等が前回の講話にて縷述せし所に次ぐ所の問は會吏の聖品を志願する者に向ひても、會長の聖品を志願する者に向ひても均しく呈けたる者にして、左の如し、——

「汝は汝の家族をキリストの教義の模型に投れ、又の及ぶ限り己れと彼等とをして共にキリストの群羊の良模範とならしめんことを務むるや」。

此の問は之に先だてる所の問と親密に相隣れり。抑も此の問に對する答に在ては諸君をして我等の主の教に範とれる言動をなさんことを誓約せしめ、彼の問に對する答に在ては諸君をして祈禱を恒にし、聖書を始終讀み味ひ、世と肉との煩慮を脱せんことを誓約せしめたるが、此等二種の生活はすなはち是れ聖潔なる生活を形づくるの最大要件なりとす、然り是れ極めて必須なる要件なれば、聖潔の生活は到底是なく

『汝は汝の家族をキリストの教義の模型にいれ又力の及ぶ限り己と彼等をして共に基督の群羊の良模範とならしめん事を務むるや』

（聖品プレスブテロ派立式文）

第十講話　群信徒の模範

我が派立式文（任職式文）中に在て我等が前回の講話にて縷述せし所に次ぐ所の問は會吏（デヤコン）の聖品を志願する者に向ひても、會長の聖品を志願する者に向ひても均しく呈けたる者にして、左の如し、——

「汝は汝の家族をキリストの教義の模型に投れ、又の及ぶ限り己れと彼等とをして共にキリストの群羊の良模範とならしめんことを務むるや」。

此の問は之に先だてる所の問と親密に相隣れり。抑も此の問に對する答に在ては諸君をして我等の主の教に範とれる言動をなさんことを誓約せしめ、彼の問に對する答に在ては諸君をして祈禱を恒にし、聖書を始終讀み味ひ、世と肉との煩慮を脱せんことを誓約せしめたるが、此等二種の生活はすなはち是れ聖潔なる生活を形づくるの最大要件なりとす、然り是れ極めて必須なる要件なれば、聖潔の生活は到底是なく

しては成る能はず、――又是れ極めて其作用に確實なる要件なれば、聖潔の生活は必ず之れを日々に行なふより生ず。されば此に在ては是等の二問相通じて經渉交錯するが如くに見ゆ、然れども其間には區別の原ぬべき者ありて存す。即ち前の問は新生命の內部の源を特別にも指し、此の問は新生命の外部の形體および顯現を特別にも指す者とす。前者は密かなる祈禱と隱れたる靈交(神との)を以て長養し維持すべき內部の生活を指し、後者は神の僕が外部の試煉および、惡魔との公戰の日に於て、人衆の目の前にありてすらも、操らざるべからざる警戒の生活――誘惑の抗拒、神聖の服從、高潔の精神等を以て體とするの生活――を指す。是の如く此問は諸君の一身より轉じて他人に移る者にして、啻に諸君に問ふに其心中に於て神と親しく靈交せんことを務むるや否やを以てするのみに非ず、更に又諸君に問ふに其光を人々の前に輝やかせつゝ諸君の生活と諸君の家族の生活をキリストの群羊の模範たらしめんことを務むるや否やを以てす。

此方面に於て此の問は我等を導きて或る新らしき最も緊要なる件々に至らしむ。即ち此問は左の大眞理を我等の前に揭げ出す者とす、曰く我等および我等の最も親近なる者が呈する行動は人々の目前に其率由すべき模範となる者なり、曰く此事は然らざるを得ず、曰く本件の性質の然らしむる所として此事は免かる可らず、曰く善きにもせよ惡きにもせよ我等の行爲および我等が家族の行爲は、世人の眼中において極めて深く我等の敎說と混和したる者にして、實に之(我等が唱ふる宗敎)が代表者と見做さるれば、或は我等の模範によりて人々をキリストに肖るの域に高め、或は我等の不德に由て人々をますますキリストより遠く離らしむるの一に出でざるを得ず。實に是れ我等が此世に生活するに當りて從がはざるを得ざる法則たるなり。生物と美觀と百穀が此世にて維持せらるゝ光と熱は夫の神が天にかけて晝を司どらしめたまへる大光明躰より無言にして暗々裏に流出し來る、是の如く眞正の基督敎徒よりは凡て人々を善に皷舞する力恒に溢れ出でゝ、此力の範

園内に來る者をことごとく感化す。

「汝等は世の光なり」。凡そ熱心なる、敬虔なる、謙遜なる、眞實なる。克己なる人は、斯く其生活の光輝を以て日々に他人を照しつゝある也。彼は其談話または活動を以て他人を裨益せんと直接に試るより(すら)も是の如くにして却つて功を立つること多分おほいならん、如何となれば此の感化力たるや止むこと無ければ。なり、之に反して直接に故さらに努むる所の業は數ふべき者たるを免かれず。然のみならず、直接有意の働には世人とかく頑として抵抗せんとす。然れども聖潔なる生活の感化力はいつとなく朝の露のごとくに降り、いづこよりとも無く馨ばしき香氣のごとくに來り、閉づる間もあらなくに目鼻に入り來る。斯の如き人は其同僚人の間に住むや我しらず四方に健全の感化力を放つ者にして、所謂「聖ペテロの影」のごとく其處を通る人々を醫するなり。善人において然るごとく、惡人においても亦然り。惡性の傳染病を病む者が、病毒を其身に帶びて、識らず知らず之を其接近する人々の感染力に投ずる

如く、私利を營む者、淫慾を肆にする者、輕躁なる者、不虔なる者、不義なる者は常に破壞力の中心たるなり。假令其人如何に之を厭ふとも、其周圍なる道德の空氣は彼がために毒せらる。彼が言辭を排ぞけんと欲する人々も、識らず知らずの中に彼が行爲の病毒を吸入しつゝあり。己れが傍に來る人々をことごとく殺したりと小說に云ふなる怪物のごとく、彼等は假令自らは惡き模範を示さゞらんことを欲するとも、其生活の疫癘は四方に感染して其周圍の人々を仆すや夥し。毒蛇が其毒を以て己が子を殺せしと東方の昔話に云ふ如く、惡き人は、其もつとも行を愼しまんとする時(例へば其子女の前などにおける時の如く)にも、腐敗したる性情容貌及び言語の毒氣を我しらず周圍に發散して四方の人々を惱ます也

此事はみな是れ各箇の人につきて然る者なるが、他人を敎ふるの地位に在るものには殊に以て然りとす。此の如き人々には私密の行動あることと無し。彼等の生活は必ず或は善を敎へ或は惡を敎るの具となる、而

して其勢力たるや彼等の直接なる言辭若くは正式なる勸話よりも遙かに強し。異教の哲學者すらも言へり「人を訓ふるに言語を以てするは道遠し、模範を以てするは捷徑にして功多し」と(セネカ Seneca)。但し此事は特別にも我等にとりて尤も然る者とす、是れ我等の職掌の性質および構成の然らしむる所なり。是れ我等の主が人靈を教化する の大事業を活聖職員に托したまひし重大の任命よりして必然に生じ來る者とす。基督の言は實に「聖靈の劍」なり、然れども其劍たるや基督の僕(役者)の手にて振はざるべからず、而して我等はすなはち基督の僕(役者)なり。基督の使命は天使に托して行る者に非ず、人に托して行るなり、即ち之を宣傳する役者といふとも、天使には非ずして、勿論其宣教を受る人々と其性質弱點誘惑罪慾等を一々に同じうする者なり。神は斯く其使命をおくる人々(一般の人々)と其使者として用ふる人々(役者)とが其性質を同じうする所に由て其教化を行なひたまふ。神は其自ら先づ教化しつゝ今已が同勞者として用ひ給ふ人々(宣教者)を以て己れの働

を他の人々に及ぼさしめたまふ。

此聖職の起初よりして是の如くなりき。主の使徒たち先づ此の生命を自ら吸入し、然る後、主の恩惠の力を以て他の人々に之を授けたり。今後千萬年も亦かくのごとくならん耳。勤勞たる百姓まづ實を得べき也(提摩太後書二の六)。基督は自ら大模範たる自己をさして善牧者と曰ひつゝ、「彼その羊を引出すとき先に行くなり、羊かれの聲を識りて之に從がふ」と說きたまひし時に、此事の然るべきを教へたまへり(約翰福音書十の四)。而して又此事は聖パウロが再三再四諄々と左の事を勸めたりし一大理由なるや疑を容れず、——曰く、「故に爾曹みづから愼み且なんぢらが聖靈に立てられて監督となれる其全群を愼め」云々(使徒行傳二十の二十八)、——「なんぢ己を愼み亦教ふることを愼しむべし、恒に此等の事を務めよ、心を之に寄せて專ら之を務むべし、蓋なんぢの上達すべての人に明らかにならんが爲たり(提摩太後書四の十六、十五)。而して又聖パウロは斯く人々に教へたる所を同一の理由にて己れみづから努め

行へり。彼はすなはち以弗所の基督教徒にむかひて左のごく言ふことを得たり、曰く——「我アシアに來りし初の日より常に爾曹の中に在て行なひし事は爾曹が知るところ也、即ち我すべての事に謙遜また涙を流しユダヤ人の詭計により艱難に遇て主に事へたり(使徒行傳二十の十八、十九)。——又テサロニケの群信徒にむかひては彼れ言ふを得たり、曰く、「我儕なんぢら信ずる者にむかひて何等ばかり潔く義しく缺ることと無くして行なへるを爾曹も神も證をなす」(帖撒路尼迦前書二の十)。嗚呼との雄辯風生の生活は、(聖職に神恩の垂るゝに因て、)人々の靈魂が由て以て基督に導びかれたる最大手段の一なりしことを誰か復疑がはんや。此聖生活の雄辯なかりしならば、彼が諄々たる舌も、否な彼が奇蹟を行なふの力すらも、何の大事をか成し得んや。彼に於て然りしごとく、我等に於ても亦然らざるを得ず。「神恩に由て人々は今も尙夫の基督を自ら認めたる諸兄弟の手を以て基督に導びかる。此事は昔しガリラヤにおいてアンドレーがペテスマのヨハネの敎によりて基督に從ひたりし時と今も異る無し。「彼まづ其兄弟シモンに遇て曰けるは、我儕メッシヤに遇へり、メッシヤを譯けばキリストなりと、即ち彼をイエスに携ゆきぬ(約翰福音書一章四十一、二節)。

我等は若し其聖職を全たうせんと欲せば、我がヨルヂ、ヘルベルトの如くするを要す、即ち「須らく何よりも先づ善良なる生活(言行)をなさんと決心すべし、是れ敎師の德行は凡て之を瞻る人々をして彼を敬はしめ愛せしめ、少なくとも又彼と偕ならんことを欲せしむるに最も力ある雄辯なれば也。」ヘルベルト覺悟すらく「我等は今日訓言よりは好模範を多く要する世に棲息すれば、我は特に此事をなさんと欲す。……而して我は神に求む願はくは我が小功をして我が大聖師たるイエスに榮光を來すべく人々を感化し得るやうに成熟せしめたまはれかし。但し我等の模範をして斯く善にも惡にも甚だ有力なる者たらしむる」は唯に基督敎聖職の結構の然らしむる者たるのみならず、又是れ我等が牧する人々の性質の然らしむ者たる也。此事を審かにせんために我

は更に進んで我等(聖職員)が品行――敢て悪き模範とは曰はず、只何等の點にてもあれ我等が聖職員たるの德に慚るが如き言行――果して如何なる影響を其群信徒に及ぼすべきかを論ぜんと欲す。

第一には是れ我が教會内の悪信徒に如何に影響すべき者なるかを考へ見よ。基督の道を虛構の巧小説と證明せんことは凡て罪に起臥する人々の希がふ所なり、如何となれば夫の道は斯る人々を責め、又斯る人々は其胸中に如何に掩歴せんと試みても終に其非難の口を杜ぎ得ざる一種の聲を有して、内外交相攻撃するあれば也。請ふ思へ其道を教ふる人々にして公然と言行にて其教を信ぜざることを明かにしをるならば、基督教を非とする議論中天下また此の如く力強き者あらんや。されば斯る不幸の人々を其自滅の業に帮けて沈淪の淵に急がするは我等教師たる者どもの言行表裏に豈若く者あらんや。我等は如何に思ふとも彼の徒輩は眼光鋭どくして、之(言行表裏)を忽ちに看破せん、而して之に本づきて速かに推斷せん我等が説く所の教は唯是れ職業的なる

言辭にして、其空なることは我等も自ら密かに感ずるが故に斯く我等の行動上に顯はるゝ也と。

是と同樣の結果はまた、多少の差こそあれ、我等の疎虞怠慢に由ても生ずる者なり。各教會には基督教の教ふる眞理をば毫も疑はざれども、只纔かに其良心を安んずるに足るほどの分量だけ之を其世間的なる不敬虔の生活に加へんとを常に試みつゝある人々多き者なれば、我等の其職を盡すに於ける怠慢は必ず是の如き衆多の人々を益々罪に固くならしむるに至らんとす。如何となれば斯の如き人々は我等が説く所の語を聞て時に或は心中に懼るゝ所あるとも、我等が行ふ所を見ては再び心を安んずべければ也。彼等は其自ら致すべき義務ありと信ずるよりは我等に要むる所寧ろ遙かに大いなるを常とすれば、我等の行に世間的または不敬虔なる汚點の存するを見るや直ちに自家の汚點を恕し去らんとす。

然のみならず我等の身に斯の如き生活あるは、我が聖道を信ぜざらん

と欲する人々に供するに攻撃の利器を以てし、不敬虔なる徒輩に給するに其罪を寛恕するの口實を以てすると同時に、又是れ神に事へんと進み求めつゝある人々を却ぞくるにも與かりて太く力ある者なるを知らずんばあるべからず。後者もまた勿論日々に誘惑に圍繞せられつゝあるを免かれず。彼等の生來薄弱なるや動もすれば誤りて顛仆せんとし、斷然悪なるには非れども不得策にして、隨つて其靈魂に甚だ有害なるが如き動作を縱いまゝにせんとするの危險に常に面しをる者なれば、我等の品行にして放肆の方向に失するや必ず彼等の品行をして同じき方向に奔らしめん。斯の如く我等の自肆は彼等の進德を斷然阻攔す、是れ我等が彼等を助けて順從、信仰、愛、克世等の件々に於ける着眼の標準點を卑うせしむる者と謂はざるを得ず。

且又是の如き生活は、我等の牧する信徒を駭ろかし又は彼等をして、我等を忌ましむるがごとき事たえて無くして却つて屢々我等の人望をかれらの中に增す者なれば、此の危險たるや我等のためにも群信徒の

ためにも兩ながら更に大いなる者となるを見る。我等の公然たる罪惡は固より群信徒の忌む所とならん。我等もし粗大の罪を犯したらば、靈界の敎導師たる資格を失なはん、最はや模範たる者ならず。我等或ひは不信者をして益々其不信を固うせしむるを得ん、然れども夫の薄弱なからも徳に進まんと務むる基督敎徒をば誤まるをも憂へしむるをも殆んど得ざらんとす。但し之に反して、我等もし模範となるを得るほどには森嚴なる、而も尙ほ寛鬆なる模範たるほどには十分に世間的なる者ならば、然る時には我等十中八九はかならず一般の好評判を多量に博することを得ん。抑も世間の人々は彼の寛鬆なる而して又森嚴なるが如き品行を愛する者なり、然るに斯の如き品行たるや毫も耳心を鼓舞し靈魂を警醒することは無くして却つて之(斯の如き品行)に耽る人々をして基督敎の嚴肅なる銳利なる道を覆蔽することを幾層容易ならしめ、且現世の事物を愛する大貪慾心に加ふるに體裁よき敬虔の外觀を以てすることを幾層容易ならしむるを奈何せんや。實に此事たる

や其到る處きはめて甚だしかるを得べき者なれば、人若し其生活をして此の理論上(言語上)の善美に加ふるに世間普通なる單に外見の好躰裁なる行動を以てせしめなば、如何に世慾に貪着せる會衆に向ひて基督教の眞理を如何に多量に說教するとも、一言半句の反對をも彼等の口より招き出すの恐なかるべし。我等の行爲は彼等の行爲を寛恕す、——我等もし彼等をして其欲するまゝに生活せしめなば、彼等もまた我等をして我等の欲するまゝに說教せしめんとす、是の如き品行かれらをして然か生活せしむるより以上に出るならば、是れ進んで彼等の惡行を幇助する者とす。我等の模範は彼等と神語の雷聲との中間に立て媒をなす者なり、但し神の雷聲も時々かれらに達せずんばあるべからず。我等の模範は夫の最も品行の寛鬆なる人々の生活上に時々起るを見るが如き寒熱發歇(間歇的信仰熱)を彼等に免かれしむる也。

意ふに此事は、一二の細目に就て仔細に考ふるならば、最も明瞭なるに至らん。先づ假定せよ我等の牧する敎會には世間に少なからぬ有名無

實の信徒ありて宗教を幾分か貴とぶの精神に加ふるに自肆若くは虛衒よりする疎漫奢侈の生活を以てし、或は金銀を蓄ふるのみにして毫も施すこと無き守錢奴然たる生活を以てすと。偖我等若し斯くの如く神の恩賜物を基督教の精神に反して利己的に妄用する事を責めて正直に眞實に說教し、而して此の說教に加ふるに惜氣なく施こし、屢克己し、贅澤の驕奢を欣んで廢し、一に我等の財產を以て神の道を弘むるに供せんと務むるの實行を以てしなば、我等はかならず狂信者と思はれん、而して夫の各世各代にそれぞれ嘲笑の特別名稱あらざる無きが如き猖狂の頑信徒中に列せらるゝに至らんとす。然し乍ら假令正に同じき言辭を以て說教するとも、我等もし彼等のごとくに生活し、我等の言行を以て暗々裏に講壇上の言語は職掌柄に高潔なれども實際の品行は正に汝等と同じとの意を示すならば、——彼等を戒しむるの具たるべき我等の生活かへつて彼等の生活に同化したるに因て、——我等は十中八九は必ず彼等のために鼓舞せられ愛好せらるゝに至らん。是の

如く我等に於て世間の逸樂或は遊戯――其自身に在ては實際惡事にはあらざれども、我等の聖職には適はしからぬことの明瞭なるが如き件々――を慎まざるの結果は(世人は綏嚴に對して云ふ)の方面にては必ず其師に凌駕する者なれば)衆に供するに其不靈なる行爲を自ら恕する、――否な斷然有罪なる生活をさへに自ら恕するの口實を以てす。豈深く自ら戒めずして可ならんや。

次に別種の事件中より一例を擧んに、――

牧師が平素の行爲は終には一教會全體の口調となりて顯はれ來らんとす。我等もし其聖職を行なふにあたりて疎漫不恭なる動作をなすならば、――若し無精神の虚飾を以て禮拜を徒らに長うし、又は定式の若干禮拜を早く成をへんと鋭意する者のごとくに急々之を執行し去らば、我等の信徒中にも亦同じく倦める如き不注意または同じく迅まる如き不恭の弊風を長養せずんば止まじ。

此事もまたヘルベルトの慧眼を逃れざりき。此點につきて彼が述たる辭は今日に於て最も之を人々に回憶せしむるを要するが故に、我は之を此に諸君の前に誦出せんと欲す。――「彼は禮拜式文を唱ふる時に、最も恭敬の態度を盡し、誠心よりせる敬虔の姿を以て其手をあげ、其心をあげ、其目をあげて、天を仰ぎ望めり。是れ第一には其まみゆる神の絶大なる威德を眞に感じたるに因りて然り、第二には自ら感化せられたるが故に其信徒をも感化せんと欲するに因て然りとす、是れ何等の說敎といふとも、禱る時に呈する敬虔の態度ほどに人々を恭敬に導びく者は復あらずと知りたれば也。是を以て彼が聲は謙り、彼が辭は穩かにして遲し。但し遲しとはいへども、又祈願者の熱心をして發言の中間に懸りて冷死せしむるが如くに遲くは非ず、畏懼と熱喪との中間なる莊重の活潑を以てして且止み且强つゝ彼は禮拜式を執行す。

以上の細目を以て我が例解せんと求めたる大則は容易く之を基督敎徒の生活の凡ての部分に移し施こすを得べし。嗟然り、我等の墮落した る性質の薄弱なるや、何にまれ卑陋の造詣、および縱肆の生活を寛恕す

べき口實をば速かに執へんとすることと實に凡ての部分に於て皆然り、豈慨歎にたふべけんや。就中外面の好體裁なる不靈の牧師が其行狀を以て人々の前に掲ぐる寛鬆なる模楷の如き者ほど欣んで速かに倣はるゝ者は稀なり。

今まで我が語りたる所は、諸君の見られん如く、凡て是れ我等の周圍における聖生活の調子を上下する我等が模範の直接なる影響に關す。然れども茲にまた我等が其群信徒に模範たるの職分と相連なれる全く別種なる若干の危險ありて存するを見る。因て今より其事につきて諸君に一言せんと欲す。諸君が其各自の領分において彼の大模範(キリスト)の活寫たるべき者ながら然る能はざらんとするは單に卑き標準を人々の面前に立つるに由りて獨り然る者に非ず、又これ智慧の足らざるが爲め、及び前に我が列擧したるよりは遙かに少なく著明なる自恣の働に由て、畢竟諸君は善生活と稱すべき者の感化力を大いに危ふくし或は全然破らんとする恐あるなり。茲に有力の善人と認められたる

者あらんに、其擧動にして單に奇癖(變人的)なるならば、纔かに此一事すなはち彼が其まはりの社會における道德上の勢力をほろぼすに十分ならん、我は信ず諸君はみな是の如き例を多く知らるゝならん。因て我等は懶惰、疎鹵、奇癖等すべて人々の勢力をほろぼす弱點若くは疵瑕を我等の身に增長せざらしめん爲に深く自ら省察する所なくんばあるべからず。我等もし此點に於て過たざらんことを欲せば、其單に社會において爲す所の擧動を屢々省みるを要す。

此事は勿論精神の痛く勞れ又は久しく沈める後に忽然と反動の大潮を以て滔々と漲ぎり出るが如き休作不定の擧止に當る者とす、此事たるや其れ自身においては全く罪なき者なれども、他の人々の目には或は聖職員たる者の生活の高調と相容れざる者としも見えん、而して或は彼等が人々を感化するの力を傷つけん。聖潔自制快活なる擧動にして、毫も演劇的の假莊重なる無き者、是すなはち我等が目的とすべき生活、是すなはち我等が宜く禱るべき生活なりとす。此の以上に於てすら

も尙我等が戒愼せざるべからざる者少なからず。食事の不規則なる、服裝の清楚ならざる、交際の道に疎漫なる、其相接する人々に對して同情同感を表するに乏しき、快心合理なる談話に程よく連なるに懶うき、諸般かくのごとき件々は、凡そ其身に於て「此の職が謗らるゝ」に至らんことを恐れ、己れが基督のために證する力の減らんことを恐るゝ人には甚だ重大なる事と見ゆるならん。

遙かに此の以上において復亦われらが自ら戒めざるべからざる一層隱微なる形の自肆ありて存す。疎漫あるひは賤卑を表する一身上の習癖にして已に彼がごとく我等の勢力を打毀つを得る者ならば、況んや我等の群信徒をして(其虛實は兎まれ角まれ)是よりも更に深大なる惡事あるを猜がはしむるに於てをや。

……

此の如き猜疑の性質たるや甚だ曖昧不條理にして屢又最も迂妄なる

を常とす。此の如き猜疑は偶然にして我等の身上に來らん、或は我等が何等の眞理をも其の人口に苦きがために軟和せじと決心せるよりして我等の身上に蒙らん、或はまた我等が己れと說を異にする人々を容れはせざれども又虐たげはせざらんと欲して之を迫害することを斷然と君子的に拒むよりして我等の身上に加はらん。是等の猜疑是の如くにして惹き起されたる時には如何せば可ならんか、我等は固より深く之を慨歎すとは雖も、之がために決して自ら咎むる能はず。我等は如何に高價なりとも眞理をば維持せざるべからず、決して我等は己れを傷つくる猜疑を自ら免かれん爲に他人に對して——否な薄弱愚昧なる者に對してすらも——不義なる處置をなすべからず。是の如き試煉は固より我等これを義のために蒙むる迫害と見なすを得ん、而して或は望まん我等が主の「汝等は福なる哉」てふ語庶幾くは我等の身に及ばん、而して此の如き一見惡なるが如き事件も終には神の恩惠に由て却つて福音の道を進むるの具とならんと。然し乍ら此等の猜疑は屢々遙

かに是とは相異なる原因より生ず、而して斯る猜疑については、之を禁むる者は決して無辜なる犠牲には非ず。例へば一種特別の服装をなすが如き、我等が教會の内もしくは外に於て異常なる風習に耽るが如き事もし果して斯る猜疑をひきおこす者ならば、我等もし單に之を心に悅こぶといふがために輕々しく採用しつゝ斯くもキリストが代りて死にたまひし弱き兄弟たちを躓づかしめて、如何にしてか自から咎なきを得んや。我は此項を詳論せじ。單に一言せば我が精神を諸君に通ずるに餘りあらんとす。但し斯の如き事柄につきて己れが爲す所の擧動を決して瑣末なる者とは思ふ勿れ。社會の普通なる冷眼は深邃なる教理の實よりも此の如き外部の徽號を逸早く認むる者なるを忘るべからず。一の猜疑をも惹き起すこと無くして、聖潔なる模範と健全なる誨教とを以て一教會をことごとく我が改革教會の眞調子に化導するを得たらん衆多の人々も、其服装または態度が最も謂れ無くも又最も免かれ難くして惹起したる猜疑のために其功益をことごとく傷つけ、其

勢力をことごとく失なひたるあり。且又此の猜がはしき癖(猜疑の種たる習癖)たるや、嗟最も有害なる者なりとは雖も、或は全く其れ自身において不道理なる者にも非ず、或はまた内心の不健全を表すと假定せらるゝ此の如き外徽に拘泥するも強がち全くは誤まれる者とは謂ふべからず。軍旅の押たつる旌の色および紋は唯これ其軍隊が孰れの方に屬するかを萬人の眼に示すのみ、而して人々は自然に思惟せん此の如き瑣事は、黨の徽號としての外は、靈界の將士――人靈を拯ふの戰場に於て未來の大決戰に從事すべく立てられたる人々――の眼中には重要なる者たるを得ずと。

偖これらの事柄たるや諸君が好模範を以て人々を感化するの力に斯く大いに影響する者なるが故に、兄弟諸君よ、我は切に諸君に求む、寧くは諸君これらの事柄につきて神の御前に於けるが如くに咎むべき所なからんことを務めよ。

加之、此事は皆我等の生活(言行)が他人を化導するの力に當る者なるが、

亦是れ我等の家族の生活(言行)にも頗る大いに當る者とす。夫れ人が其職業的なる禮儀式法の裏面に在て眞面目には果して如何なる人物なるかは、彼が身邊に日夜咫尺しをる人々の品行を以て最も公然と屢々明示せらるゝ者なり。縱し此事は然らざるにもせよ、牧師の感化力は、彼れ自身の性行はとまれかくまれ、其家族の品行もし此世のものにして未來の者にあらざるならば、大いに傷つけらるゝや言を俟たず。されば此の任職の誓約にしたがひて我等は其家庭の伴侶を善く選ばずんばあるべからず、而して、萬事萬端我等に於けるが如く彼等においても亦神の榮せらるゝやうに家を治めんことを求めずんばあるべからず。家庭に於て惡き模範を人々のために立るは決して輕き罪に非ず。舊約の天地に於て神の叱咤の雷聲を最も甚だしく惹きたるは、神の預言者が己れの自ら金銀安佚または其他の快樂を愛するよりして神の人民を率ゐて罪を犯さしめたる時に若くなかりき。「エホバの民をして過たしむ」といふは、エリの子等の罪狀なりき。然り、夫の永遠不變なる靈界の

法則を以て審くときには、是れ今も尙重大の罪なるや疑をいれず。兄弟諸君、牧師たる者もし其世間的肉慾的なる模範を以て貴重の衆靈魂—基督が代りて死し且我等の手に委ねたまへる人靈——を日々に地獄に率ゐくだりつゝありたらんには、末日に於て何の顏を以てか主に見えんや。斯く此の小さき者どもを躓かするよりは磨石を頸にかけられて海の深みに沈められたらんかた却つて勝れる者なりしを必ず彼の大審判日において見るあらん耳。且又斯の如き惡勢力は如何に廣く及ぶ者にして又如何に人々の氣づかざる者なるぞや。萬人の心の秘密が悉く暴露せんとする彼の日までに、誰か能く此罪を免かれんや。我等の中誰か其聖職を以て高むべく立てられたる人々(群信徒)の口調を却て己れの自恣、無順着、懷疑等の弊習を以て卑めつゝあらざるを保すべけんや、誰か其己れと偕に信仰の翼に乘せて煌々たる萬福の天界に導きのぼるべかりし靈魂を裏表に世慾の羈絆もて下界に繫ぎとめつゝあらざるを保すべけんや。

單に是の如き危險の有り得る者なるを思ふても、我等は自ら警戒し自ら省察することを益々嚴密にせずんばあるべからず。實に我等の聖職を執行するや始より終まで恒に贖罪の血を以て灑がるゝを要す、恐らくは我等全たく罪に定められん。實に我等は許多の人が毫も聖畏怖の念なくして妄に瀆すを見る所の此聖職を輕々しく承なば、必ず自己と他人とを併せて危うくせざるを得ざる者なれば、預め深く自ら其大任なることを考ふるを要す、先づ其誓約する嚴肅長久の義務を如何に最も安全に盡し得べきかと深思熟慮するを要す。

此問題を我は今最後に諸君とともに此特別なる約束につきて吟味せんと欲す。

第一には我等をして其約したる模範を四六時中人々の前にたてんことを平素の心掛となさしめよ。我等の聖職上には故意の自恣を挿むべからず。我等が教師たるの生活には油斷あるを許さず。我等は須く自ら記憶すべし此身は常に基督の使者なり、我等の生活は其全部および其

各部俱に基督の聖職と稱する濶大なる任務の中に含まると。是を以て我等は常に警戒の眼を己れに注がずんばあるべからず、單一の激語、單一の營利、單一の詭計、單一の虚榮、單一の不義、單一の酷虐も、或は我等が聖職の直接なる事業上における最も熱心なる禮拜行を掩ふに僞善てふ毒熱を以てせんとす、豈猛省せずして可ならんや。

請ふ先づ是の如くせよ、然る後、此の間斷なき警戒を持續せんために、我等は屢々自ら省りみつゝ、其今此に冒しをる危險の重大なることを深く心裏に銘刻するを要す。請ふ己れの周圍に甚だ速かに自ら形づくる夫の職業的禮貌と稱する外皮を時々刻々に打破れ、而して請ふ自ら問へ、我が所行は彼の大審判日に果して如何なる者と見えんかと、我が行徑を人々如何に思はんかとは問ふ勿れ。我等の模範は其周圍の人々を益々高き、益々嚴しき標準に上せつゝある者なるか、又は相互の寛假を維れ事としつゝ、基督教の道德が由て以て忽ちに打汚さるゝ世間の利益および眼前の放恣を助成しつゝある者なるか。——我等もし已れが

蹈まざる路を徒らに冷々と指示して自ら足れりとしつゝ、唯に己れが靈魂を失なひたるのみならず、亦群衆を率ゐて偕に永辱と永苦の深淵冥坑に沈淪せしめたらば、彼の日の震慄は果して如何なるべきかと深く慮らずんばあるべからず。

第三には、我等は人の意見に由らず、神の聖語と教會の法則とに由て、我等が言動の規範を形づくらんことを要す。是實に我等が唯一の干城なりとす、抑も我等は兎角善惡の標準を段々に卑むる者にして、其甚だしきに至りては、己れの不德を猛省し、己れの放恣を打懲すことをばせずして、却つて日に月に益々己れの汚行敗德に安んぜんとすれば、是非とも之を以て干城と爲さずんばあるべからず。

第四には、請ふ我等をして己れを見るの明を愈々深く愈々鋭どくならしめんことを務めしめよ。請ふ合法の手段をつくして己れを知らんことを務めしめよ、唯に直接の自省によるのみならず、又彼の屢々有用なる手段——我等の自嚚自讃的なる判斷に比較するに他人の我等に對する意見を以てするの事——に由て、己れを知らんことを務めしめよ、然り、是等の判斷(他人の我等に對する判斷)は、其の惡意を以て誘發せられ、或は虛謊を以て過大せられたることの明らかなる時においてすらも、尙之が幫助を辭せず或は輕んぜざらんことを要す。たとひ是の如き惡意の虛謊たりとも、或は我等を導きて我等のみづから知らざる或る眞相に達せしめんも知るべからず、是れ斯る判斷は或る眞相の曲影なればなり。或る人曰く、弱き人も賢き人の長短を知ることと賢き人の自ら知るよりも明らかなりと、又曰く我は我が身に關する最良の警戒を信々犒々たる人衆より得たる多しと。嗚呼此言をなせる者は人物を看破するの眼光炬の如き明判官なる哉。寔に彼等の評言は膏肓をして疼ましめたり、然れども又如何に之を聞すべきかをも敎へたり。

最後に、特に一言せんに、請ふ記憶せよ、模範を立てんと試るの事と、模範たらんやうに生活するの事とは遙かに異る也。實に其差違たるや、他人につきても我等自身につきても兩つながら、筆舌の及ぶところに非ず。

失れ模範をたてんとして直接に爲す所の事、および模範を施さんとして我等が發する所の語は、之を夫の衆多なる日々の言行および容貌——即ち上に說けるごとく、常に我等の靈性的道德的なる品質より他人にむかひて流出する感化力——に比ぶれば、其數も寡くして、其力も弱し。我等が眞に能く人々を善道に感化するを得るは一に斯く我等の德を間斷なく無意無心に人々に示し且須つに在りとす。且又此の差異は我等自身につきても決して其度を減ずる者にあらず。自ら聖潔の人となりて而して他人を嘉惠せんと求むるときは、己れもまた拯はるゝに至らん、之に反して、最も神聖なる目的のためにもせよ、聖潔の人と見えんことを求むるときは、終に己れもまた十中八九はかならず亡ぶるに至らん。諸君にして若し他人を感化せんとの目的を以て其外行を裝ふならば、其結果として必ずや單に迷妄なる者とならん、道德界の道標に過ぎざる者とならん、自ら欺むける僞君子とならん。是の如き憫むべきの謀は是れ外見ばかりなる職業的宗敎の內幕なり、此の如き詭計は、其

が亡さんとする憫然の靈魂を欺くのほかは何人をも欺くの力を忽ちに失なはんとす。諸君は斯の如き虛衒の業に召されたるに非ず、否な諸君は神の前にて諸君の性行を豹變し、其一新更生したる性質の光輝を以て人々の燈臺とならんことをこそ期する者なれ。而して此の惠福を獲んには、諸君まづ神の眞僕たらんことを學ばざるべからず。諸君が他人の敬虔を高め得るは只己れ自ら敬虔なるに由るのみ、敬虔の外觀を裝ふに由るに非ず、諸君は神にむかひて自然且眞實なる愛行となりて迸出するが如き生命を神より賜はりてこそ始めて彼等の熱心を鼓舞激發し得るなれ。是れ即ち靈德界における最も確實なる眞理ぞかし。陰に克己獻身を務めて諸君の德を大いにせよ、竊かに神と交り、獨り處て禱れ、然らば諸君の顏は必らず輝かん、而して諸君はみづからは知らずとも、世間の人々は其光輝をみとめん。諸君は先づ自ら罪のために泣かざるべからず、先づ自ら其罪の重荷を己が主の十字架の下に卸さゝるべからず、先づ自ら此の廣き世界には主と諸君との外絕て人なきごと

くに屈みて主の軛に服せよ。諸君まづ自ら主の訓誨をまなび、主の拯救をよろこび、主の十字架を負はざるべからず、然らば諸君の生活は。諸君に在ては自ら覺ゆるなしといへども、人々の德を建ることと大いなる者あらん。

其主が來りたまはんとき然か爲しをるを見られん者は幸ひなる哉。彼の日においては今まで最も自ら陋しと思ひたるキリストの謙遜なる聖徒も、己れが神の恩助によりて人々を救ふの手段たるを得たりしことを發見せん、而して今まで自ら卑くして順ひ來りし生活の結果として其身をば夫の「空の光輝のごとくに耀やかん」眞箇の「穎悟者」の中に忽ちに上されつゝ、夫の「衆多の人を義に導びける者」「星のごとくなりて永遠にいたらん」とする者と伍するに至らん。嗚呼何等の多福ぞや、何等の榮光ぞや。

第十一講話

靜穩と平和の保持

『汝凡てキリストの民殊に汝に托けられたる者また托けらるべき者の間に力の及ぶ限り靜穩と平和と愛を保ち又之が進歩を計るや』

（聖品プレスブテロ派立式文）

講話第十一回　靜穩と平和の保持

基督に在て兄弟たる諸君、――我等の任職式文（派立式文）中に於て前回の問に次げる者は左のごとし。

「汝すべてキリストの民、殊に汝に托けられたる者、また托けられんとする者の間に力の及ぶ限り靜穩と平和と愛を保ち且進めんことを務むるや」。

此問は、我等が今まで講じ來れる種々の問とは大抵其趣を異にして、獨り英國教會の任職式文に限れり（註、但し此問も其他の諸の問も只些か其言語をかへて盡く亞米利加教會の任職式文中に載せたり、而して日本聖公會に用ふるために已に翻譯せられたり）。故に我等は我が教會に於て殊に此條欵を其任職式文中に挿みたるは抑も何の據る所ありしかを自然に先づ推繹ねんと欲し、而して又其之を此に挿ましめたる事情が今ま尙如何ほどまでに之を此等の嚴肅莊重なる問の中に加へも

くを是視し、又我等の聖職執行上に於て今ま尙如何ほどまでに我等の指導たるかを論ぜんと欲す。

按ずるに此の講究においては、先づ其式文其物に就て此問の精神を發明せんことを務るを善しとす。第一、我等は先づ認めん此問はデアコノ派立式文(會吏任職式文中)には出でず、此省畧たるや直ちに是れ此事が會長の職に專ら屬する者なるを示すに似たり。否な此事はまた監督聖別式文を參照して彼處に此の問が如何に一層推擴められてあるかを見なば、愈々明らかなるに至らん。即ち彼處にては「汝は力の及ぶ限り諸の人の中に靜穩と仁愛と平和を保ち且進むるや」といふの問に加へて、亦すべて監督の聖別せられんとする者にむかひて更に問ふて云く「汝の支配する地の內に不平、不從順、有罪なる事あらば、神の言に由て汝が有ち且この國の敎會の法規によつて汝に委任せられたる權威に循て之を矯正懲罰せんや」と。看て此に至れば本問の趣意は一目に瞭然たらんとす。抑も我等が此に保たんと特に誓へる「穩靜仁愛平和」の反對は「不

平不從順および有罪なる事」也と明記せらる、而して監督は又明言して曰く、此の點に於て罪ある人々には啻に聖書の勸話を施こさんのみならず、又矯正懲罰の戒律を加へんと。

偖此觀念は我等を導きて本問の明瞭なる意味に達せしめ、又其我が派立式文に挿入せられる所以の道理を察知することを得せしめん。

按ずるに第十六世紀に於て我が國(英國)に起りし宗敎改革の大變の如きは、其巨大なる福祉を持來せしと雖も同時にまた其禍祉に幾分か相應せる弊害を來たしたらんことは、殆んど免かれ難き所なりけん。是等の弊害中にありて第一にして且最大なる者は基督敎界の平和と仁愛を攪亂したるの事なりとす。單に宗敎上の熱心を鼓舞するが如き事も墮落したる人類間にありては必らず平和を攪亂するを免かれず。夫れ一旦豁然として絕大の眞理を周圍に覺得し、又己れが其眞理に與かる者なることを覺得したる人は必らず驅られて活動す、而して其活動たるや、勿論活動者の性質に感染する者とす。セラピムの熱心は純粹の愛

火を以て常に燃ゆ、然れども我等のごとき者に於ては然る克はず。假令人眞に其身を神に獻げつゝありとも、尙世間的なる元素ありて多く加はれば、其重濁なる性質よりして、彼が獻げんと務むる所の者に雜ふるに必ず晦冥の黑雲及び惡臭の蒸氣を以てせん。短識、偏見、獻身の未だ全たからざる事、隨て私利心の尙附着して未だ去らざる事、宿昔の僻說、固陋の見識、頑迷なる感情、――是等の者は皆其行事を傷つけ、而して之に與ふるに世間的なる、利己的なる、不和諧なる調子を以てせんとす。是故に熱心の最も熾盛なる人々の間には十中八九はかならず琴瑟の調和を缺く者なるを奈何せんや、否な其甚だしきに至りては屢々直接に反對するあり互に相罵り互に相攻む。是すなはち我等の萬福なる主が地上に出さんとて來れりと宣まひし劍なりとす。其全知完愛の口より親しく宣べられたる完全無瑕にして萬福なる眞理は、斯る世間的爭擾を世間的なる人心中には起らしめざるを得ず。將來に於ても基督の國の通則はまた永へに是の如けん。故に一人、一敎會、若くは一國に於て宗敎

的熱心の勃興するに際しては、必らず是の如き不穩、宗敎的爭擾、衝突等の害は其進路に横はれる陷穽として出で來るなり。是を以て將來に於て斯る勃興のある時は、其中心の麪酵と爲れる人々の中に、靜寧、平和、仁愛の精神を皷舞することを必要第一事として勉力するこそ、最も智慧深き所行はれ。

斯る大運動を常に圍繞する此危險は特に我國の宗敎改革を圍繞したり。是れには特殊の理由ありて存す、夫れ其盛んなるに方りて其犧牲となる人々を壓制するのみならず、其衰ふるに方りても、其滅亡に伴ふて起る不羈の放縱を以て之を害するは、是れ不正なる虐政の特質なればなり。是故に我が國に於ても、神恩によりて往時羅馬法王の舊來の壓制洗滌せられ、初代敎會の合理なる政治再施せられ、神の聖書衆人の手に付せられ、各自の良心に直接に感化を及ぼすことと成れる時にも、此禍害は出で來りしなり。新たに起りたる自由は諸處に於て肉慾を恣にするの弊害を生ぜり、是の如く惡魔は從來壓制し來れる人心を著く壞裂し、

其犧牲たる人々を痛く爬裂して後やうやく去りゆきぬ。

固より我國に於ては該改革の及べる基督教會中幸ひにして何れの他の部分に於るよりも、此弊害をして遙かに少からしめたる種々の勢力ありて働けり。然れども尙ほ此害惡は我國にも著しかりき。夫の所謂アナバプテスト「愛の家族」(Family of Love)其他諸宗の徒は我等の平和を擾亂したりき。我國の當時の記錄は此の如き擾亂害惡の精神が烈しく相戰ひたることを證することを夥だしとす。例へば大監督クランメルがエドワルド第六世の第二年に與へたる訪問箇條には明記して曰く、「粗暴なる人教會の會長および牧師を無情に誹謗するや否や」と。又其後二年にして監督リドレイ(Bishop Ridley)は問ふて曰く、私人一撰を起し、兇徒を召集し、他人の財產を强取するも可なりと說敎し、若くは辯護する者ありや否や」と。而して此等の尋問は不必要ならざりき、如何となれば他の書には又記して曰く、「一方に於て羅馬教徒が其目的を達せんとて銳意勉力するあれば、また一方に於て改革の恥辱たる不謹愼の信徒あ

りて、自在に集會して危險なる教說を吐露せり」。而して之を防禦せんとて種々の方畧を執りしに拘はらず、此等の諸害惡は廣く蔓延せり。「人民は宗教を多く議論するの風に陷りたり」といふ。其自然の結果は紛爭と分裂なりき。故に千五百七十七年の勅令に曰く、「近頃合法に任立せられず又た其職に當るの能無くして、妄りに自ら教會の教師若くは傳道者と僭稱する輩少からず、我が英國教會に於て全能なる神の公禮拜式及び聖餐の擧行に關して定めたる朕が法律に背き、其反則なる說教、聖書公讀、聖餐執行により、また其論爭及び新說を聽聞せしむるため反法の集會を催し、通常の教區及び遠方の地より多人數を召集し(此中には善業を營む朕が臣民の唯方向を誤りて集れるものもあり)、當教會に於て日々新禮新式を工夫し、想像し、解說し、實行せり。此の如き集會に由りて朕が臣民の中種々に分裂して危險なる說を主張する者夥し。其影響の及ぶ所きはめて危險なるを以て默許すべからず」云云と。又千五百七十五年の勅令に曰く、「大膽にして虛榮を貪り奇を好む輩新禮式を設け、衆

人之に參會し、隨て朕が臣民中に爭論、宗派、動亂等の事を生ず、而して敬虔均齊なる一定の秩序は亂れて絲の如く、雜多の禮式、議論、紛爭、分離、破裂等は既に起りてまた將來にも尙ほ起らんとす、女皇陛下は此秩序紊亂の原因を以て監督其他の有司の懈怠に基けりと明認し給へり」と。

されば本題の問の目的と其意味は蓋し此に在ること明かなり。今まさに目さめたる人民は舊來の迷信の死形に代ふるに宗敎觀想の無制限なる放肆を以てせんとするの大危險に遭遇せり。既に是れよりして不穩、爭擾、仁愛の缺乏は生じたり、是を以て神語の役者は其群信徒の中に靜穩、平和、及び仁愛を維持擴充せんことを嚴肅に誓約せしめられたる也、即ち其群信徒をして舊來の迷信の羈絆を脫せしむることに極めて勉勵し、彼の秘密、懺悔、僧徒の指揮、代拜的宗敎等の組織によりて眠らされ、氣力を奪はれたる衆人の良心を警醒し、其嗜好を飽かしめ、心靈の力を耗費したる所の養分なき古譚を廢し、之に代ふるに神語の滋養食物を以てして其靈魂を養育するを要し、而して之と同時にまた俄かに大

眞理を會得して之に心醉狂亂するの弊に陷らざる樣彼等を警戒し、謙遜にして仁愛ある個人的宗敎の靜穩安心に於て氣力を養はんことを勉めて救誨するを要したり。謙恭仁愛なる平和に於て生命のパンを以て其靈魂を養ひ、謙遜して眞理の開示を受くることを爲さず、唯宗敎の敎義を喧議嘩論せば如何に運命を危くすべきや、また之に陷るは如何に容易なるやを常に憶念するを要したり。

兄弟諸君、我等が職に當るべき今日の形勢を察すれば、上記の勸告は特に適切なるに似たり。何となれば我等が周圍にも宗敎の爭論は滿てり。今日は宗敎の事に大熱心なる時なり、而て多分其熱心は眞實なる者ならん、然るに熱心あれば分離の念生ず、實に今代は宗敎に就きて著しく喧しき時なり、即ち熱心の爭擾に變化せんとして既に幾分の變化を爲せる時なり。宗敎問題は一般社會に於て論議せられ、我が國會議院に於てすら公開議題とはなりぬ、斯く廣く論議せらるゝことは前代に無き所なり。斯く宗敎の事に熱中する我等が果して特別に虔敬なる、獻身的

なる、若くは又特別に謙遜なる人物なるや否やは唯神之れを知る、然ども兎に角我等が中には一種の宗教的活動ありて其氣焰熾んなるなり、諸説は凡ての方面に於て其極端まで論究せられ、我等の分裂によりて生活する所謂る宗教新聞雜誌なるものは爭擾を鼓舞し、往々にして最も破廉恥なる詐言や人身攻擊を以て益其爭擾を鋭ならしむること屢なり、黨派集會、黨派結社、黨派名義黨派綱領等は社會に滿てり、而して少くも此等の人の多くは其黨派熱に於て基督教の愛を失ひ、基督の宗教は彼等の爲めには黨派の爭ひに過ぐること多からざるものと爲り果てなんことを憂ふべき理由は抑も多く且大なり。然らば則ち此時代に方りて、我等宜しく我が教會より我等に對して嚴肅に出だされたる此尋求し警醒する本題の問を傾聽し、此に在て其教誨を遵守すべきの必要を熟考し、而して我等の職が基督の天國の爲に謙遜仁愛なる靈魂を養成せずは、如何なる事を爲すも無益に屬せんとするを記憶すべきこと最も肝要なるや疑ひ無きなり。

されば此に警戒されたる誘惑が如何にして我等を業務中に襲ふや、又我等は如何にして充分に之を防禦し得べきやを講究せん。

先づ第一に此誘惑が如何にして我等を襲ふべきやを講究せんとす。我等は其各自の大任務として、己れに授けられたる領分に於て、直接に人と交はるよりして誘はるゝと無きにあらず。熱心にして氣力ある人にとりては大抵公論爭の艱險を冒すは興味ある事と見ゆ。例へば我等が實行上に最も貴重する大眞理、若くは我等が教會の命脈に關すと信ずる制度が粗暴の攻擊を受けたらんには、我等が夫の曾て聖徒に傳へられたる信仰の爲に熱心に戰かはんとを神の攝理によりて命ぜられたるを疑ふ能はず、然り或は斯く命ぜられしならん、而して若し此事にして明瞭ならば、我等決して躊躇すべからざるなり。然れども我等また此戰鬪に臨むに宜しく戰々兢々たる恐懼を以てすべし、是れ固より敵を懼るゝに非ず我等自身を懼るゝなり。如何となれば唯此戰鬪に臨むに於ても如何に多くの危險はあるものぞ。我等狹小なる範圍の平穩なる

務を離れて、廣き範圍に於ける大なる福利たる如き或ひは實に福利たらんものに就くに方りて、自己の心中に靜穩平和仁愛を保つことは如何に難きものぞ、我等全然戰鬪者と化し去りて懺悔者たることを失ふは如何に容易なるものぞ。此失喪は想ふに先づ第一に我等が自己特殊の業務を見ること稍冷淡に爲れるに於て顯はれん、再び原の業務に就くことを難んぜん、舊の如く之に全幅の心を注ぎ、之を最上の福利と爲し、之を祈禱の目的、日々の勞力の目的と爲して斷えず顧慮することを難んぜん。我等の腐敗せる性質に取ては、王の軍隊にゆきて其「兄」を訪ひ、其「安否を視て其返事をもちきたり」、若くは自ら挑まれ出で、敵軍の挑戰者を殺すが爲めに石と投石索を以て戰場に臨みたる後は、戰爭畢りて再び曠野なる群羊に還へり來て、從前に均しき愛と顧念を以て其群羊を守らんことは甚だ難く、――イスラエル軍の面前に於てガテのゴリアテに敵したるが如くに無人の野にて獅熊と戰ふことは實に甚だ難し。されど我等が愛若し冷かに爲り、親情薄らぎ、顧念他に移りなば、我等

が彼等の爲に盡す所は嗟如何に活氣無く力なくなり、彼等を裨益するの望は如何に薄くなり、我等自身と彼等の退轉は如何に必然にして止まること無からんか。斯る行歩の結果は諸教會に於て如何に容易に見ることぞよ。多事なる牧師は全國の教育を司るべき教會の權を主張して辯論す、然る間に、己の管理する村學校、即ち從來は毎日斷えず視察したる村學校には到ること稀に爲り、病者を訪問すること若くは教會全躰の人々を訪問することは疎かに爲り、または懶うげに之を爲し或は粗漏に之を爲すに至る。教會の人員は從前の如くに彼が思惟祈禱の念頭に浮ばず、從前の如く彼等銘々の品性氣風を一個一個に觀察會得して之が爲に計り禱りつゝ其惡を防ぎ之を善に導かんとするが如きこと無く、唯朦朧たる影を彼れが念頭に留るのみにして、其面前に於ては彼れ必要なる公務を唯時々形式に從ひて爲すのみ。是に於てか彼れの武器は其鋭刃を失ひ彼れの聖職は活氣を喪へり。

されど是の如き弊害も尙これ只前記の變化につれて起る外部の弊害

のみ、牧師自身の心中なる此等諸害の本源をば未だ觀察せざるなり。是最も直接にして發する事あり、如何となれば何にまれ特殊なる一眞理或は一制度を常に公けに論議することは我等自身にとりても危險無きに非ざればなり。蓋し我等が心は一方に僻し易く、其凝思する所の事は非常に心中に發達し、爲に眞理の諸部の秩序關係は我等が心中に於て紊亂することあり。此危險の實なるとは世人が「ドグマタイズ」(dogmatize)てふ語の第二の意味に就いて下せる普通の判斷を見ても知りぬべし。此判斷を按ずるに、是れ即ち眞理の或る特別なる定義を熱心に主張するの事は、世人の心中に於て自然に驕傲なる權威を假冒するの習慣と相伴ふものなるとを示すなり。而して此事たるや我等自身の氣風に反動す。眞理と此眞理に就ての我等が見解と心中に於て混雜し、我等の量見狹く爲りて虛威を張り、頑固にして屢暴慢に流れ、同一の眞理が其眞箇に確信せらるゝに方りてや他人の心中にも亦或は起さしめん如き異見を容るゝ能はずして、往々平和を害し、限界を越え、愛を失ふ

も顧みず、唯自己の特別なる見解を以て正統教の標準と爲し、强て他人をして之れに默從せしめんとす。嗚呼基督教會の眞理の爲めにアリウス派の異端と戰ひたる夫の大勇將の受けし評言を幾分にても受くるに足る者は如何に寡きぞや、其評言(Hooker)に曰く、「獨アサナシウスの身に於ては、夫の久しき悲劇を通觀するに、眞に智者の爲すべき業行、義人の受くべき災厄の外、他の事あるを見ず」と。

但し此等の危險を外にしても、尙ほ一層公けなる事務は必ず通常我等をして或は此人と爭論するに至らしめ、或は彼の人と反對するに至らしむ。反對者の論破すべき者あらん、論敵の口を箝ますべき者あらん、而して此世の武器は、嗟常に夥く我等の手にとるに任せありて、敵手の胸を貫きたるが如き觀あらん。最初は我等此戰に於て實に眞理の爲めに諸能力を用ゐるならん、されど唯勝利を其れ自身のために愛すの念如何に速かに我等が心中に起り來るものぞや。而してまた我等の舌は如何に速かに嘲罵愚弄の言及び皮肉を刺す隱微の讒侮をなすに長じ我等

の為、牧師自身の心中なる此等諸害の本源を未だ觀察せざるなり。是最も直接にして發する事あり、如何となれば何にまれ特殊なる一眞理或は一制度を常に公けに論證することは我等自身にとりても危險無きに非ざればなり。蓋し我等が心は一方に偏し易く、其凝思する所の事は非常に心中に發達し、爲に眞理の諸部の秩序關係は我等が心中に於て紊亂することあり。此危險の實なるとは世人が「ドグマタイズ」(dogmatize)てふ語の第二の意味に就いて下せる普通の判斷を見ても知りぬべし。此判斷を按ずるに、是れ即ち眞理の或る特別なる定義を熱心に主張するの事は、世人の心中に於て自然に驕傲なる權威を假冒するの習慣と相伴ふものなるとを示すなり。而して此事たるや我等自身の氣風に反動す。眞理と此眞理に就ての我等が見解と心中に於て混雜し、我等の量見狹く爲りて虛威を張り、頑固にして屢暴慢に流れ、同一の眞理が其眞箇に確信せらるゝに方りてや他人の心中にも亦或は起さしめん如き異見を容るゝ能はずして、往々平和を害し、限界を越え、愛を失ふ

も顧みず、唯自己の特別なる見解を以て正統敎の標準と爲し、強て他人をして之れに默從せしめんとす。嗚呼基督敎會の眞理の爲めにアリウス派の異端と戰ひたる夫の大勇將の受けし評言を幾分にても受くるに足る者は如何に寡きぞや、其評言(Hooker)に曰く、「獨アサナシウスの身に於ては、夫の久しき悲劇を通觀するに、眞に智者の爲すべき業行、義人の受くべき災厄の外、他の事あるを見ず」と。

但し此等の危險を外にしても、尙ほ一層公けなる事務は必ず通常我等をして或は此人と爭論するに至らしめ、或は彼の人と反對するに至らしむ。反對者の論破すべき者あらん、論敵の口を箝ますべき者あらん、而して此世の武器は、嗟常に夥く我等の手にとるに任せありて、敵手の胸を貫きたるが如き觀あらん。最初は我等此戰に於て實に眞理の爲めに諸能力を用ゐるならん、されど唯勝利を其れ自身のために愛すの念如何に速かに我等が心中に起り來るものぞや。而してまた我等の舌は如何に速かに嘲罵愚弄の言及び皮肉を刺す隱微の譏侮をなすに長じ我等

が目は如何に速かに弱點を見るに長じ、我等の手は如何に速かに之を強く擊つに長じ、熱烈なる心は如何に速かに輪廓の疑はしき勝利、善惡の混淆したる心術種々の無情殘刻なる筆戰舌鬪を喜ぶに長ずるぞや。此の如き場合に於ては我等の心中に惡魔の業漸く成らんとし、忠實にして亨通する職役を持續するの望は漸く消滅せんとするや如何に明かなるぞや。曾て孜々黽勉たる牧師が變じて輕躁、銳熱、多事にして漸々に天を畏れざるの黨魁と化し、教會を擾亂する者、其不和を攪發する者と爲るは如何に易き事なるぞや、就中其心を察すれば恐ろしく頽敗し、專ら外界の紛爭に生活しつゝ、夫の聖靈の附與に係りて凡て天國に容れらるゝ人の特性たるべき靜穩、爽心の平和、天來の仁愛に益々遠ざかること如何に速かなる者ぞや。

然らば我等如何にして此弊を防禦せんか。斷じて無爲懶惰を以て之を防禦すべきに非ず。諸君は余を以て斯ることを勸る者とはよもや思ふまじ。神の眞理は維持せざる可らず、教會の教義は論證せざる可らず、其

禮拜の力は保全せざる可らず、生活及び運動の危險あるを見て我等は決して睡眠または死に偷安す可らず。我等宜しく戰ふべし、否な熱心に戰ふべし。されど常に此陷り易き弊害を警戒し、自己の心術方法及び行爲の惡からん事を常に疑ひつゝ、且省み且つ戰ふべし、時に靜思して斷えず祈禱し、常に我等の大模範者に着眼し、即ち「泰平」を出さんとに非ず「刀」を出さん爲に」來りながら、尙ほ「競こと」なく「喧こと」無かりし者、戰鬪の凡ての劇熱は益々烈しく迫りて其身邊を圍みたれども、尙ほ「心柔和にして「謙遜」り、彼れに來たれる各患者を常に癒し、「靈魂安を得」るを常に得せしめたる大模範者を諦視しつゝ戰ふべし。

されど此危險は啻に群信徒の牧師たる我等を陷害するのみならず、我等の群信徒をも陷害するなり。されば我等如何にして己れ自身を保全するのみならず、尙ほ彼等をも同疫より保全するを得ん乎。

我等の此業務を適當に果すに缺くべからざる第一の要件は、之を以て特別に勉むべき者と爲して、心頭に懸くるに在りとす。我が大チョルチ

ヘルベルトはいへらく、「愛は我等の業務且つ目的なり」と。我等は職務上自己を以て講和者と爲し、不和を豫防し爭論を調和するとを職務を以て誓ひたる者なりと思惟せざる可らず。教會中に不和爭論の在るは則ち罪の結果にして又罪の原因なり。此の如き不和爭論は基督の眞理の弘通を著しく妨ぐる者にして、教會員が公禮拜に缺席し、特に聖餐に參するを怠るの秘因は屢此不和爭論に原く者なるを見る、此不和爭論たるや之れ無くんば協力して神の爲めに働かん人々をも分離し、萬福なる聖靈をして憂へしめ、我等の職務をして無味無活氣ならしめ、靈魂をして爲に荒ましむるを奈何せんや。されば我等は極めて勉勵し、此等の不和爭論を豫防調停することを以て我等の職務の一部と爲さゝる可らず。但し此豫防も調停も克己なくんば爲し遂げ得べからず、而して此克己の行たるや我等の最も尋常なる行爲までをも威あらしめ貴からしむる者とす。例へば教區會議に屢々起る爭論を豫防し紛議を緩和せん爲めに其教區の長をして常に之に議長たるとを得ざらしむべき事

情の如きは、決して之を輕視す可らず。又然か之に議長たる時は、小心翼々として彼の自然に相分爭軋轢せんとするが如き人々をして親和の情を厚うせしむるとを常に心掛くるを要す。斯くする時は教師の感化力は速かに人々に及び、彼れが到る處には、平和の氣自然に其身邊に靄然たらん。

されば我等はまた教會々員相互間の實際なる關係を知らんことを努めざる可らず。教會中には往々舊怨のあることありて會員と會員若くは家族と家族とを數年間疎隔せしめ、彼等をして長く漠然たる罪の感覺に居らしめたらんも、我等の勤勞耐忍及び判斷を以てせば或は全く之を散ぜしむるを得ん。此等雙方の者は堅固にして親切なる或る手が柔かにはあれども又心强くも其膿壞せる舊怨の傷を針もて探り、而して後其開ける口を縫合せんことを俟てり、而して始めて全治す。然れども凡て此等の事は、我等が勞を惜まずして個人間に奔走するにあらざれば、成す能はず、我等に於て教會員を熟知するのみならず又彼等にも

熟知せられ、彼等をして我等を仁愛なる賢き人と認めて我等の手術を甘受せしむるに到るに非れば、遂る能はざるなり。此業に比すれば、兄弟の愛、及び罪の赦宥を説教するは遙かに容易なり、されど前者に比べて之を言へば、全く無用なるを免かれず。病を療治するには個々に施術せざる可らず。而して此舊怨を和解するの業も亦同じく個々ならざる可らず、如何となれば斯る場合には寸言も千里の分離を生ずれば也。凡そ人心を激昂せしむる者の中にありて怨怒の情は最も柔軟の手と最も敏慧の指を以て之を治するを要す。

我等が此特殊なる務を有するは唯に斯る個人間の不和を調ふるが爲めのみに止まらず。我等は又教會員の身分(貴賤貧富等)より必然に生ずる感情の懸隔をも調和せざる可らず、即ち教會中の富者及び識者に誨るには貧者又は愚者の特別なる誘惑に對して眞個なる兄弟の同情を表し、其德義に對して敬意を表せんとを以てし、農業者及び中等の人々にして雇人を使役する者(貧乏なる雇主も往々にして之れ有り)に教る

には其雇人及び寄食者を苛刻に待遇せざらんことを以てし、而して又親から勞役者及び貧者を屢訪問し、彼等が上級者に對するの惡感情を和らげんことを務むべし。此事業もまた容易なるものに非ず、大いに判斷力を要し、凡ての階級に伴ふ事情および境遇を詳知し、其思想の常習をも詳かにすることを要し、また其成功を必せんには堅志を要するなり。而して我等若し成功を欲せば其孰れにも不當に贊同すべからず。例へば貧者の患難に對し唯同情を表したりとて、それにて彼れを眞に助くるものに非ず、否な此同情を表するは反て彼れが自ら其患難の原因なりと目する人々、――彼れの患苦を柔らぐべきを或は柔げざらん人々――に對し、益々惡感情を增長せしむるやも計る可らず。此困難なる感情の戰に於て彼を助けんには、勿論彼をして先づ諸君が彼と同情を有することを知らしむるを要するなれども、之と同時に又素より親切なるべきも尙ほ明かに斷然と彼が爲に敢て其の苦情を制止し、彼れが目して以て壓制者と爲す所の人々を眞理のかぎり(道理のあらん限り)

辯護し、而して彼(貧者等)が一切の患難は我に在り、一切の枉虐は彼等(富貴の人等)に在りと思ふの惑を解き、彼自らも此枉虐の責を免かれず、而して彼等もまた患難を分擔すといふことを會得せしめずんばあるべからず。

然れども此等通常の不和を醫し、或は預防せんと勉むるよりも尙一層の熱心を以て我等は此の精神にて己れが宗敎上の敎師たるの特務を盡さゞるべからず。

本講話の初に說きたる大則に依て、凡そ敎會には宗敎的感情の盛んなるに隨がひて不和衝突の危險も亦之に比例して增加す。凡そ人は宗敎的生活發動すれば、宗敎上の執拗、黨派心、頑固不通、分離分裂等の諸の危險に陷り易し。是を以て敎會從來の惰眠より覺起し、福音の重要なる大眞理の說敎によりて宗敎的感情には大に發揮せる所あるも、若し此說敎に伴ふて本敎會の權威を施行せず、基督の爲めに個人は靜穩に平和に仁愛を以て本敎會の規則に從順すべき義務ある者なるを說くに非

ずは、遂に分裂によりて全然と破滅せんことを決して其例に乏からざるなり。

人皆忽ちにして敎師となる、「我はパウロ我はアポロ我はケパ我はキリストに屬す」とは口々に稱ふる所なり、只是れ夫の大使徒等の小代表者輩にうきて言へる者なる耳。而して本題の問の係る所は特に此點に在る者の如し、即ち汝は其の群信徒を分離熱に煽ぐこと無く、又は自滿自得の獨斷說を以て彼等を妄りに驕らしむること無く、却つて彼等の中に靜穩平和及び仁愛を擴充すべき樣に敎誨をなすやと、是即ち本問の精神なるに似たり。

而して又此事を如何にして遂ぐべきかを講ずるに方りてやゝ此等の言語の順序において大いに得る所あるに似たり。我等は宗敎上に靜穩を長養せざるべからず、倏忽傲慢喧擾にして事を遂げんとするの弊を愼まざるべからず。我等は平和を大いに進めんことを努めざるべからず。世には聖職員にして其精神全く平和に背馳する者なきに非ず、是の

辯護し、而して彼(貧者等)が一切の患難は我に在り、一切の枉虐は彼等(富貴の人等)に在りと思ふの惑を解き、彼自らも此枉虐の責を免かれず、而して彼等もまた患難を分擔すといふことを會得せしめずんばあるべからず。

然れども此等通常の不和を醫し、或は預防せんと勉むるよりも尚一層の熱心を以て我等は此の精神にて己れが宗教上の教師たるの特務を盡さゝるべからず。

本講話の初に說きたる大則に依て、凡そ教會には宗教的感情の盛んなるに隨がひて不和衝突の危險も亦之に比例して增加す。凡そ人は宗教的生活發動すれば、宗教上の執拗、黨派心、頑固不通、分離分裂等の諸の危險に陷り易し。是を以て教會從來の惰眠より覺起し、福音の重要なる大眞理の說教によりて宗教的感情には大に發揮せる所あるも、若し此說教に伴ふて本教會の權威を施行せず、基督の爲めに個人は靜穩に平和に仁愛を以て本教會の規則に從順すべき義務ある者なるを說くに非

ずは、遂に分裂によりて全然と破滅せんことを決して其例に乏からざるなり。

人皆忽ちにして教師となる、「我はパウロ我はアポロ我はケパ我はキリストに屬す」とは口々に稱ふる所なり、只是れ夫の大使徒等の小代表者輩につきて言へる者なる耳。而して本題の問の係る所は特に此點に在る者の如し、即ち汝は其の群信徒を分離熱に煽ぐこと無く、又は自滿自得の獨斷說を以て彼等を妄りに驕らしむること無く、却つて彼等の中に靜穩平和及び仁愛を擴充すべき樣に教誨をなすやと、是即ち本問の精神なるに似たり。

而して又此事を如何にして遂ぐべきかを講ずるに方りてやゝ此等の言語の順序において大いに得る所あるに似たり。我等は宗教上に靜穩を長養せざるべからず、倏忽傲慢喧擾にして事を遂げんとするの弊を愼まざるべからず。我等は平和を大いに進めんことを努めざるべからず。世には聖職員にして其精神全く平和を背馳する者なきに非ず、是の

如き人々は一の眞理を敎ふるに當りても必らず他人の之を敎へざるを暗示し、或は他人の之を持せず、或は之を否むを攻擊せずんば措かず。斯る聖職員の養成する惡風として、時としては一敎會內に毛を吹て疵を求むる如き爭鬪の精神磅礴するを見るあるも豈怪しむに及ばんや。斯の如き聖職員は縱や熱心にして、大凡は忠信なりとも、黨爭の氣象に傷つけられて、其職を全たうするを得ず。我等もし眞に其群信徒の福たらんと欲せば、萬事にこえて先づ彼等に敎ふるに愛を以て眞理を行なふの大福音訓を以てせんことを務めずんばあるべからず(以弗所書四の十五を見よ)。彼等をして諸の知識に足りて愛の大美德を缺かんよりは、知ること少なくして愛する多きは遙かに愈れりとの事を深く肝に銘せしめんことを要す。

此危險を防ぐに力ある今一つの要具は我等の群信徒を箇別に親密に處遇するに存す。我等もし眞實と柔和と愛とを以て彼等の德を立てんと欲せば、彼等に日夜注目して、其箇々の誘惑品性及び氣風を審かにせ

ずんばあるべからず。我等は講壇を下るや否や我が事業をはりぬと思ふべからず。說敎の事たるや大切は則ち大切なりと雖ども、之をして聖職の全領分を篡はしむべからず。人々は動もすれば說敎の種類により て不眞面目なる浮躁の氣風を長養せられんとす、而して此氣風はすなはち自負自慢の分離を夥しく生ずるの母なる也。然れども若し彼等をして神の恩助によりて眞弟子たる謙遜敬愛の氣風を長ぜしめんと欲せば、最善最眞の說敎に次ぐに日夜間斷なきの愛護(訪問慰藉訓誨等)を以てせざるべからず。

兄弟諸君、茲に我が諸君に勸めんとする件々の最後なる者にして、其最後なると均く亦至難なる一事ありて存す、即ち我等は此誓約を全たうせんと欲せば、我等みづから靜穩平和および愛の人たらざるべからず。而して此事を能くせんには、四六時中常に深く自ら省察戒愼するを要す、是れ我等を誘なふて爭論塲裏に入らしめんとする危險の特別にも圍繞するあれば也。我等がその群信徒に對する關係、我等が割合に其群

信徒以外に獨立なる事、我等の墮落したる性質の常として兎角己れの志好を追ふの傾癖等、――此等の誘惑を半ば生ずる者は彼等の意たるよりは寧ろ却つて我等自身の妄想ならんも知る可らず。次に又我等相互の關係もまた此危險を增すの勢あらんとす、――各々別にはあれども相隣れる二教區の牧師の相互に獨立無關係なるや彼此の間に動もすれば口調の差違を努めて生ぜんとす。――獨立と自然に伴なふの傲慢心は動もすれば特異なる教說または禮式の某徽號となりて洩れ出で、而して基督教會の一致を危うくし或は分裂を增さんとす。否な此危險たるや此に止まる者に非ず。唯に我等が別々の教區に分かれをる事が此危險を來たすのみにあらず、又我等が一の教區に合併せる處においても亦此危險は我等を圍繞す。我が宗制の下に在ては教育も身分も貧富も同じき人々を以て正副の二牧師となして協力せしむるを常とす。されば此等の兩人もし全然其意を同じうせば、勿論萬事圓滑に運ばんとす、然し乍ら彼等二人の間に意見上、口調上、實行上幾分の差別の存

するが如きこと決して珍らしからざらんす、斯る場合においては其一人が他の一人に誠心もて自ら讓るに由て始めて一致を保つことを得る者とす、而して我が宗制においては副牧師(curate)は正牧師(incumbent)に讓らざる可らず。然るに此事たるや容易の讓步にあらざる場合頗る多きを奈何せんや。副牧師あるひは年長ならん、或は一層賢ならん、或は人望大いならん。且又其爭點において副牧師のかた是ならん、而して彼みづから其是なるを知りをらん。是の如き場合においては人情として自ら枉げて他に讓ることは、心苦し。斯る際には敢て贊助を信徒に求めざるも、區內に議論沸騰して、忽ちに分裂をひきおこさんとす。又或る種類の人々の如きは、識らず知らず、恒に教區內の黨派心に訴へつゝありて、朋黨を造り、隱謀を織るをなす。斯る縺の絲は彼等の腹より自から紡ぎ出る者のごとくにして、悉皆混沌ならく而已。此種の紛紜が基督の道に及ぼすの害、聖職員の勞を空しうするの損は極めて深き者とす。此種の紛擾の餘毒が全く消え去らんまでには幾くの歲月も過ぎ行かん、多

くの靈魂も迷ひ亡びん、噫。

但し此等の危險は古今いづれの時代をも圍繞する者なるが、茲に又特に今日の如き世態を圍繞する危險ありて存す。如何となれば、黨爭及び派心の熾んなる世に於ては、徹底眞面目なれども又孰れの黨派にも黨派としては故らに與せざるが如き人物を得ること甚だ難ければ也。我等もし黨派の人となるならば、其良牧師たるの力は大いに傷められん、而して必ず紛紜を攪發する者とならん耳、是は排他の情を己れの方に強くし、反對の氣勢を他の方に煽りつゝ、兩方に黨派心を增すに因る也。されば此に我等は己れの精神と己れの擧動とを深く戒め愼まずんばあるべからず。多事多艱の世に於ては、凡そ靜穩平和の人たらんと欲する者は、夫の內部の黨派心が古來つねに由て洩れ、由て現はれ、由て增したる諸の黨派的徽章をことごとく拋つを必要とす。最も罪なき織すらも時に或は重大なる事件とならんとするは、譬へば大內訌の節に衣服の色の如き平生は何事もなき者が猜疑の種となりて市街に鮮血を迸

らするあるが如し。此事は最も善く我等に當るなり。請ふ我をして只一つの例を諸君に語らしめよ。我等の中の或る人々は、教師として我等の纏ふ服裝が今よりも一層善く我等の職掌を示すが如き者ならんことを望む、而して其目的たるや至極結構にして毫も間然すべき無し。彼等は主張して曰く、是の如き外部の徽號は必ず我等をして其聖なる資格にふさはしからぬが如き輕舉若くは遊戲を愼ましむるの好檢束たらんと。彼等は諄々として說て曰く、是の如き服裝は自省の美風を長養せん、又交際場裏(社交上)に在ては我等と他人とをして均しく我等が何物なるかを忘れざらしむるの益おほからんと。彼等は斯の如き自然なる區別より生ぜんとする功益をば山のごとくに列べたてんとす。彼等は之につきて主張すべき者おほし、而して又自ら其薦むる所を欣んで實行せんとす。彼等は、若し能くすべくんば、曩時の長袍カッソック(cassock)及び窄衣チッペット(tippet)を通常の着用に回復せんと欲す。是にして克はざれば、成るべく之に近き、成るべく俗衣に遠き服裝を採らんとす。然